
ある少年のなんとかなった学園物語

1 2 J o k e r

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある少年のなんとかなつた学園物語

【Nコード】

N4896T

【作者名】

12Joker

【あらすじ】

桐札漣司は、車に引かれそうになつた子供を庇つて死んだ。神によつて転生されてきた世界は、色々な作品のキャラがいる学園の世界だった！神からもらったジョーカーメモリと12本のガイアメモリで様々な困難をなんとか乗り越えて仲間達と面白可笑しく学園生活を送る物語

仮面ライダージョーカー 仮面ライダーバース IS インフィニット・ストラトス ハヤテのごとく！ はじめてのあく！ 遊戯王5D'S トリコ ながされて藍蘭島 おまもりひまり 相棒

かへたんていぶ

オリ主設定（ネタバレ注意 随時更新予定）（前書き）

漣司の設定です。

オリ主設定（ネタバレ注意 随時更新予定）

桐札漣司 きりふだ れんじ

身長175？

体重68？

趣味 サイクリング 読書 デッキ構築

好き 仮面ライダー カフェオレ 仲間

嫌い 仲間や女の子を泣かせる奴 食べ物を粗末にする奴 嘘をついたり約束を守らないふざけた奴

得意 喧嘩 英語以外の教科 家事 料理 機械いじり

苦手 色恋沙汰の話 英語

持っているメモリ

ジョーカー
Jメモリ

インフィニット・ストラトス
ISメモリ

アクア
Aメモリ

サイクロン
Cメモリ

ダークネス
Dメモリ

フレイム
Fメモリ

グランド
Gメモリ

アイス
Iメモリ

メタル
Mメモリ

ライト
Rメモリ

スカイ
Sメモリ

ボイス
Vメモリ

サンダー
Tメモリ

ウェーブ
Wメモリ

武器 ISキャリバー

他 ロストドライバー メモリリング

デッキ

シンクロドラゴンデッキ

ガスタデッキ

切り札

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン レッド・デーモンズ・ドラゴン 銀河眼の光子竜

精霊 風霊使いウイン ガスタの巫女 ウィンダ 銀河眼の光子竜

バイク（D・ホイール）？

この物語の13人の主人公の一人。神であるレイのミスで本来死ぬはずだった子供を庇って車にはねられて死んだ。レイによって転生の方舟で転生することが出来た。その時貰ったガイアメモリで転生した世界で仮面ライダージョーカーとして新しい人生を生きっていくことを決めた。

初めて会ったにも関わらず、自分に学園と言う居場所を与えてくれた千冬と束には感謝をしていて、彼女らの頼みや約束を必ず守っている（仲間達のことになる以外）。

見た目は仮面ライダーWの左翔太郎の16才くらいの姿で結構女子に人気があるくらいの男前。

元いた世界で両親の家事能力がなかったので8才頃から家事をしていたので、家事は得意。

母親が外国人のハーフで、茶髪っぽい黒髪はその遺伝なので地毛。

この髪でよく年上や不良に絡まれていたので相手してたらいつの間にか最強になっていた。学校の先生にも目をつけられていたが、それだけで勉強をしない理由にはしたくなかったので勉強をした結果、英語以外は得意になった。

先生は基本的に信頼していなかったが、中学の数学の先生は別で休み時間などはその先生と親友達と一緒に色々バカをやっていた。先生の教えは親友達と一緒に忠実に守っている。

工業系の高校に進学してそこで出会った親友達と一緒に独学で勉強して、実際に機会弄りしてたら半年で高校三年間の知識と技術を身に付けた。

色恋沙汰の話が苦手なのは、中学は男子と女子の間に溝ができて気まずい生活で高校ではほぼ男子校みたいな所だったから、経験がないだけである。別に女の子が嫌いだとか苦手と言うわけではなく、箒達とは普通に話が出る。

オリ主設定（ネタバレ注意 随時更新予定）（後書き）

随時更新予定です。いつ更新出来るか分かりませんが……。

13人の主人公設定（前書き）

主人公達の設定です。

1 3人の主人公設定

1 桐札漣司

オリ主設定参照

2 織斑一夏

設定 ほぼ原作基準

備考 13人の主人公の1人。原作基準だが、この小説では、篝、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪とは全員幼なじみ。また、漣司達の特訓で白式・雪羅を使いこなしているので原作よりも強い。適合メモリはスカイメモリ。使うデッキはデュアルモンスターデッキ。

3 篠ノ之箒

設定 ほぼ原作基準。

備考 13人の主人公の1人。原作基準だが、幼い頃、一夏と離ればなれになっていないので、姉である束を嫌っていない。

束に紅椿を貰って漣司と特訓していたとき、漣司とは恋人とは違う親友以上の関係になりたいと告白したら、漣司が相棒になってくれと願ったので漣司とは相棒となった。

漣司と共にいるので、周りには付き合っていると誤解される。適

合メモリはフレームメモリ
使うデッキは真六武衆デッキ。

4 綾崎ハヤテ
設定 ほぼ原作基準

備考 13人の主人公の1人。ほぼ原作基準だが、主である三千院ナギとは、誤解がなく、恋愛感情がない主従の関係である。適合メモリはサイクロンメモリ。
使うデッキは、ドラグニティデッキ。

5 後藤慎太郎
設定 ほぼ原作基準

備考 13人の主人公の1人。ほぼ原作基準。時期的には伊達の後任として2代目仮面ライダーバースとなった辺り。
ヤミーとの戦闘中、そのヤミーが光だして気が付いたらこの世界にいた。実力は学園でもトップクラス。漣司とは仮面ライダーとして共に特訓をしている。適合メモリはサンダーメモリ。
使うデッキはマシンナーズデッキ。

6 阿久野ジロー
設定 ほぼ原作基準

備考 13人の主人公の1人。ほぼ原作基準。ジロー達の活動がこの世界に影響を与えてしまったため、千冬がジロー達を保護と言う形で学園に入学させた。

かなりの実力者だが、キョーコを初め、女性はまだまだ苦手なようである。適合メモリはボイスメモリ。

使うデッキはインフェルズデッキ。

7 不動遊星

設定 ほぼ原作基準

備考 13人の主人公の1人。ほぼ原作基準。チーム5D'sや鬼柳京介、トオルやミサキと共に、デュエルで輝かしい功績を残したので、学園からの推薦入学で学園に来了。適合メモリはウェーブメモリ。

使うデッキはもちろん原作のままの遊星デッキ。

8 トリコ

設定 ほぼ原作基準。

備考 13人の主人公の1人。ほぼ原作基準。美食家の代表として仲間達と共に学園に入学した。適合メモリはグランドメモリ。使うデッキは、剣闘獣デッキ。

9 東方院行人

設定 ほぼ原作基準。

備考 13人の主人公の1人 ほぼ原作基準。行人達も後藤と同じく、異世界にある藍蘭島の住人。すず達と花見をするために桜の大木に向かう途中、光に包まれてこの世界に来た。剣の腕前はかなりのもので、主人公達では、箒と匹敵するほどである。ただし、鼻血はこの世界から来てから増えてきたようである。優人と相棒の仲になる。適合メモリアイスメモリ。
使うデッキは、氷結界デッキ。

10 天河優人

設定 ほぼ原作基準。

備考 ほぼ原作基準。後藤と同じく、異世界の住人。緋鞠達と妖を探している途中、光に包まれてこの世界に来た。人や妖だけではなく色々な種族の共存ができる考えを持つようになる。行人とは相棒の仲になる。適合メモリはライトメモリ。
使うデッキはヴァイロンデッキ。

11 伊達明

設定 ほぼ原作基準。

備考 13人の主人公の1人。後藤と同じ世界の住人。手術が成功して日本に戻ってきた時、鴻上会長から後藤が行方不明と聞いた

時、開発されたもう1つのバースドライバーとバースバスターを持ち、探していたら、急に光に包まれこの世界に来た。適合メモリメタルメモリ。

使うデッキはジェネックスデッキ。

12 イブキ

設定 オリジナル有り

備考 13人の主人公の1人。異世界の住人。姿はフスベジムリーダーのイブキだがポケモンバトルの時、相手のポケモンが光出して気が付いたらこの世界に来た。夜空とはその時に会い一緒に仕事していた。仕事を失敗し依頼主に追われ、逃げた密林地区でゴブリンプラントに襲われるが漣司、後藤に助けられる。

ポケモンは持っていないが、代わりに自分自身がドラゴンタイプの技が使えるのと、技を使うのに消費する夜空と同等の魔力を持つ。適合メモリはアクアメモリ。

使うデッキはドラゴンデッキ。

12 法仙夜空

設定 オリジナル有り

備考 13人の主人公の1人 姿はハヤテのごとく！の法仙夜空だが、ハヤテ達とは違い異世界の住人で、魔法が科学で証明された世界から来た。魔術の実験中、光に包まれこの世界に来た。その時

にイブキと会い一緒に仕事していた。仕事を失敗し依頼主に追われ、逃げた密林地区でゴブリンプラントに襲われるが漣司と後藤に助けられる。

前の世界では魔力と魔術はトップクラスでこの世界に来てから格段に上がっている。適合メモリはダークネスメモリ。

使うデッキは魔法使いデッキ。

その0 俺のビギンズナイト（前書き）

はじめて投稿します。馴れない上に駄文になると思いますが宜しく
お願いします。

その0 俺のビギンズナイト

俺は桐札 漣司【きりふだ れんじ】高校一年生だ。趣味はサイクリングと読書（主に推理小説やマンガ）。このご時世は就職氷河期だから就職率が高い工業高校に進学したが、今やってみたい仕事はない。色恋沙汰には興味はなく、高校でできた親友達とバカやってるほうが楽しい。

俺は帰りに本屋で推理小説を買って家で読もうと帰ろうとしたら、なんと脇道から飛び出した子供が車に引かれそうなる。俺は考えるよりも先に体が動いて子供を庇った。

ドゴーン……！！

俺は盛大にはねとばされた。子供は？良かった無事か……。ダメだ、瞼が重くなって意識が朦朧としてきた。これは死ぬな。父さん、母さん、そして親友達、先にあっちに逝くことになってごめん。でも後悔はしていない。最後に人を助けることが出来てむしろ満足だ。俺は意識が途切れた。

これが、俺のこれからの学園物語、ビギンズナイトの始まりとはその時は思いもなかった。

その0 俺のピギンズナイト（後書き）

時間があつたら少しずつ投稿していこうと思います。

その01 漣司と神と仮面ライダー（前書き）

漣司と神が会つところです。

その01 漣司と神と仮面ライダー

うーん・・・？ あれ・・・？ 俺は何をしていたっけ？ ああ、そうだ、俺は死んだだっけ？ ということはここは天国か地獄かどっちだろう？ 天国にしては真っ暗（自分自身はみえているが。）だし、地獄かというと、恐怖感を感じない。一体ここは・・・？

？「ここは天国でも地獄でもないよ〜」

一体誰だ？ やけに可愛い声だったな。

？「こつちだよ〜」

とりあえず声のする方に行ってみた。

そこにいたのは見た目12〜13才くらいの銀髪ポニーテール、右目はルビーで左目がサファイアのような目で白いワンピースを着た可愛いらしい女の子だった。

漣司「君は誰だ？それにここは何処だ？」

レイ「私はレイ、レイ・S・ノヴァだよ」
スカーレット
「ここはね、転生の方舟だよ」

漣司「転生の方舟？」

レイ「転生の方舟というのは、本来まだ死ぬべき時じゃない人が、私達神のミスをしてしまったことで死なせてしまった人を別世界に転生させるところだよ」

へえーそうなんだってちょっと待て。

漣司「君は神なのか？」

レイ「そうだよ」 150年している新人だけだね」

150年で新人で・・・。

漣司「もしかして、俺が死んだのって・・・」

レイ「ごめんね、君を死なせてしまったのは私なんだ桐札漣司君。」

そうだったんだ。まあ、こんな可愛い子を怒る気にならないし

漣司「気にするな。それに転生が出来るんだ。その別世界で自分の新しい人生を楽しむよ。」

レイ「ありがとう。さてお詫びにこれをプレゼントするよ」

レイの右手が一瞬光ったと思ったら、アタッシュケースが出てきて俺に渡す。

漣司「これは・・・！」

中身はなんと仮面ライダーのベルトの一つロストドライバーに切り札の記憶であるジョーカーメモリ、ほとんど見たことがない12本のガイアメモリ、それとメモリ一本入りそうなブレスレット。

レイ「そうだよ」 仮面ライダージョーカーだよ」 変身したら、ブレスレットを左手首にはめてね」 そしたら、他のガイアメモリ挿すことによって挿したメモリの力を使うことが出来るんだよ」

仮面ライダーダブルは見ていて一番好きなのは、左翔太郎が変身していた仮面ライダージョーカー。まさかこの俺がジョーカーになれるなんて。

漣司「ありがとう。最高のプレゼントだよ！」

レイ「ふふっ、良かった。これから転生先の別世界は、実は色々な作品のキャラがいる世界。私達はクロスオーバーの世界で呼んでいるんだよ」

漣司「俺はどうすればいいんだ？」

レイ「それは自分自身で決めることだよ」 君はどんな困難や逆境を『なんとかなる』と言う口癖でなんとかしたら大丈夫だよ」

そうだったな。俺はそれを口癖にして、諦めずに頑張ったからな
んとかあったよな。

レイ「それじゃ大丈夫？」

漣司「ああ、何時でもいいぜ！」

レイ「それじゃいつてらっしゃーい」

こうして俺は別世界の人生、ビギンズナイトの始まりだった。

その01 漣司と神と仮面ライダー（後書き）

今回はインフィニット・ストラトスからあの二人が漣司と出会います。

その02 出会いと最強の女教師と天才ウサミミ博士（前書き）

戦闘シーンがありますが、あまり上手ではありません

その02 出会いと最強の女教師と天才ウサミミ博士

漣司 side

ここがクロスオーバーの世界か。見たところ、元いた世界とあんまり変わらない。ここはどこかの施設の庭のようだが。

？「そこのお前、何をやっている？この学園は関係者以外立ち入り禁止だぞ。」

？「ちーちゃんどうしたの？おや、君は誰だい？」

一人目の女性はスーツ姿でスタイルがよく、美人な人。

二人目の女性は不思議の国アリスに出てきてそうなドレスに、ウサミミという可愛い人。

漣司「ああすいません。俺は桐札漣司と言います。貴女方は？」

千冬「私は織斑千冬だ。」

東「私は天才の篠ノ之東さんだよ。よろしくねっくん」

れっくん？ 何故か分からないが東さんに気に入られたらしい。

漣司「学園ってさっき言っていましたけど千冬さんここは一体何処なんですか？」

千冬「なんだお前知らないのか？まあよい、ここは・・・！？」

突然殺気を感じた方に向いたらなんとマグマドーパントがこっちを睨み付けた。

千冬「なんだこいつは！！」

束「なんかあれかつこいいなあ」

漣司「二人共、下がって下さい。」

俺はロストドライバーを腰にかざし装着し、ジョーカーメモリを左手に持ち記憶の声を鳴らした。

『ジョーカー！』

漣司「変身！」

俺はジョーカーメモリをドライバーに挿入し、ポーズをとりながらドライバーを展開した。

『ジョーカー！』

俺は仮面ライダージョーカーに変身した。

千冬 マグマ「『！！？』」

束「お〜」

千冬さんとマグマドーパントは驚き、束さんは感心していた。

マグマ『なんだ！その姿は！お前は何者だ！！』

連司「俺は・・・仮面ライダージョーカー！さあ、お前の罪を・・・数えろ！！」

俺はマグマドーパントに近づいてパンチ10発、キックを5発を浴びせぶっ飛ばした。マグマドーパントも反撃しようとするが格闘能力が極限に高められているジョーカーにとっては敵ではなかった。

漣司「止めだ」

俺はドライバーからジョーカーメモリを抜きドライバーの右部分にあるマキシмумスロットにさしこむ。

『ジョーカー！マキシмумドライブ！』

漣司「ライダーキック！」

俺の右足に力が込められて、俺はそれをマグマドールパントに飛びげりてぶつけた。マグマドールパントはぶつ飛び爆発して消えた。俺は変身を解除した。

千冬 side

私は驚いた。桐札漣司はベルトのようなものを装着し、USBメモリのようなものをさしこむと変身しだした。怪物を難なく倒したあいつが何者か興味がわいてきた。

漣司 s i d e

ふう、なんとか倒した。やっぱりジョーカーは強いな

俺は変身を解除した。

その時、千冬さんが来て「話がある」と無理矢理応接室みたいなところに連れてこられた。

千冬「まず、あれはなんだ？どうしてお前はそんな力を持っている？」

束「束さんも聞きたいな〜れつくん」

何故か分からないが俺は二人には正直に話した方がいいと思い、俺が元の世界で死んで転生してこの世界に来たと言った。

千冬「信じられん話だが、お前がそういう嘘を付く理由がないか

ら本当のことだろう」

東「東さんも信じるよ。」

漣司「ありがとうございます。」

千冬「なあに、礼にはおよばん。さて、本題だがここは九路州学クロス園。ここにいる生徒のほとんどが特別な存在であらゆる国家から守るために造られた学園だ。お前は私の弟達と共に入学してもらいたい。」

漣司「もし、断ったら？」

千冬「別に構わんが、お前は最強の兵器を使う者として追い回されるだろうな。」

う・・・それはやだな。俺は潔く・・・。

漣司「よろしく願いいたします。」
従った。

千冬「ああ、よろしく」

東「よろしくね」

今日は3月1日、一ヶ月後に始まる俺のいや・・・、

俺達の学園生活の始まりだった。

その02 出会いと最強の女教師と天才ウサミミ博士（後書き）

次回から色々なキャラとの出会いを書こうと思います。

その03 買い物とGと「世界で唯一」の名をもつ二人の少年（前書き）

今回は食事中や台所のGが苦手な方は読まないほうがいいと思います。

では、一夏達との出会いです。

その03 買い物とGと「世界で唯一」の名をもつ二人の少年

3月2日、俺は一ヶ月後に始まる九路州学園の入学の準備をするため、近くの街で、買い物をしていた。

社会的には元いた世界とあんまり変わらないが、東さんが開発したIS インフィニット・ストラトス という女性にしか使えないパワードスーツが原因で、女性優遇されていることがある。

まあ、この世界ではISが最強という訳ではなく、あまりにひどい女はまず嫌われる。

俺は媚びるとかパシリとかは一切お断りだ。むしろそれを、俺にしてきた奴をフルボッコ（女の子には説教）にして二度とそういうふざけたことができないようにしてやった。

さて俺の黒歴史はともかく、服が転生の時のと、学園の制服しかなかったので俺はまず、服を買うことにした。お金については、レイが通帳と印鑑をもらったので問題はなかった。むしろ通帳の中身を見たら貯金額は0が9個ついてたので、一瞬倒れそうになった。

服を買い、日用品も揃えた俺はカードショップがあつたので、そこに入っていた。遊戯王OCGは、親友と一緒に遊んでいたもので、大量に買うことにした。

俺は今、学園の寮で、住まわせてもらっている（生徒は全員寮だとうことらしい）、帰ってデッキを作ろう思った時に、前方がやけに騒がしいので、いつてみたら 6人の女の子達がチャラそうな男達に囲まれていた。

？「あんた達、さつさと退きなさいよ！！」

茶髪のツインテールの小柄な女の子が男達に言うが、

男「いいじゃん 俺達と一緒に遊ばぜ」

男達は女の子達に手を伸ばそうとした時、俺は考えるよりも体が動き、男の一人に、ドロップキックをかました。

男「げふうつつつ!？」

男は盛大にぶっ飛んだ。

男「てめえ!なにしゃがる!」

漣司「女の子が嫌がつているのに、無理矢理連れて行こうとした
チャラ男^{アホ}にドロップキックをかましたただが何か？」

男「おい!お前ら!!あいつを半殺しにするぞ!!!」

男達「おー!ー!ー!!!」

チャラ男達（アホ共）はそれぞれサバイバルナイフやメリケン、
金属バットや釘バット更には鎖鎌など持っていた。

ちよつと待て、お前らそんなもん何処に持っていた? というより
か、半殺しですむレベルじゃないぞ。

ま、^{アホ}なんとかなるか。それに、武器を持ってねえとケン力できない男に負ける気はしない。サバイバルナイフで襲い掛かる奴に、蹴りをかましてナイフを落とさせて、怯んだ隙にアッパーカットを喰らわした。こうやって次々と倒した。

?「危ないですわ!!」

金髪のお嬢様のような女の子が叫んだ。後ろで金属バットで俺を殴ろうとした奴がいた。ヤバイ、気づかなかった、間に合わない！俺は覚悟したが、突然、金属バットを持っていた奴の左頬に拳がめり込んでぶっ飛んだ。

？「一人相手に大勢で襲ってんじゃねーよ！！」

？「「「「「「一夏^{さん}！！」」」」」」

どうやら一夏と呼ばれた男が助けてくれたようだ。

一夏「箒、皆無事か？」

箒「ああ、あの人が助けてくれた。」

箒と呼ばれた黒髪のポニーテールの女の子が俺に指を指して言った。

漣司「一夏と言ったな。助かったぜ。」

一夏「此方こそ、仲間を助けてくれてありがとう。」

？「一夏、遅いじゃない！」

？「一夏さん、何をしていましたの？」

一夏「悪い鈴、セシリア。白式の書類作成で千冬姉に捕まっていた。」

ツインテールの子が鈴で、お嬢様のような子がセシリアという名前だそうだ。

ん・・・？千冬姉？一夏で、もしかして千冬さんの・・・？

男「てめらあ！俺達をほったらかしかい！！こっとなったら・・・」

男が取り出したのはなんとガイアメモリだった。

『コックローチ！』

男は左手にコックローチメモリを差し込んでコックローチドーナントに変身した。

？「きゃあああああゝ！！」

突然、もう一人金髪の女の子が悲鳴をあげた。

一夏「わあ！どうしたシャル？」

シャルという子が涙目になりながら

シャル「ゴキ・・・ゴキ！」

漣司「はい、女の子がダイレクトに言わない。そう言えば、千冬さんと束さんから聞いたことがあるな。」

一夏、第「千冬姉（姉さん）を知っているのか!?」「

ああやっぱり、千冬さんと一夏は姉弟なのか。それと束さんと第という子も姉妹なのか。

漣司「ああ、知っている。それよりも、こいつらは確か・・・」

コックローチ「そう、俺らは「ザ・ゴキ○リズ」違うわあああああー!!」

コックローチドーパントは思いつきり叫んで否定した。

コックローチ「俺らは『一人いたら30人いる』チームだ!」

漣司「やっぱりゴキ○リじゃねーか。」

コックローチ「何度もダイレクトに言うなああああー!!せめてGと言え!!」

漣司「分かった分かった。んでお前の名前は酬危不離男【ごきぶりお】さんだっけ?」

コックローチ「違うわあああああ!俺は古流工呂治【こるくろち】だ!!」

漣司「どっちにしても変わらねえじゃねーか。」

コックローチ「煩い！！お前らまとめて痛い目にあわせてやる！！！」

あらら、奴さん怒っちゃった。

一夏「皆下がってる。来い！白・・・」

「「待て（ま、待って）！一夏！」」

一夏「なっ！？どうした？ラウラ、簪」

ラウラと呼ばれた銀髪の子が一夏の右腕を、簪と呼ばれた水色髪的眼鏡を掛けた子に左腕を掴んで止めさせた

簪「ここで、白式を出したら条約に違反するよ！」

ラウラ「そうだぞ！一夏！教官の説教じゃ済まなくなるぞ！」

一夏「くっ！」

コックローチ「どうした？来ないのか？腰抜け。はっはっはっ！」

その言葉で俺の何かが切れた。

漣司「おい、何かに頼ないとケンカ出来ねえ奴が、人を腰抜けと言ってるじゃねーよ。」

コックローチ「ふん！ガイアメモリを手に入れた俺は無敵なんだよ！」

漣司「残念だったな。お前みたいなアホがガイアメモリ使って悪さしている奴がいたら止めることができる切り札があるんだよ。」

コックローチ「なんだと？」

漣司「でだ。その切り札は俺の手の内にある。」

俺は左手にあるジョーカーメモリを見せた。

コックローチ「ほう、お前も俺みたいなドーパントという奴になるのかい？」

漣司「違うぜ。俺がなるのは、仮面ライダーだ。」

俺は右手にロストドライバーを持ち、装着した。

『ジョーカー！』

漣司「変身」

『ジョーカー！』

「夏、箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、簪「「「「「「「「「「！？」「「「「「「「「「「」

「夏達は俺の姿に驚いていた。

コックローチ「なっなんだ！？何者なんだ！？お前は！！！」

コックローチドーパントは震えた声で言った。

漣司「言っただろ。俺は仮面ライダー・・・ジョーカー。さあ、・・・お前の罪を数えろ！」

コックローチ「うわああああ！」

コックローチドーパントは叫びながらこっちに来たが、俺はジャンプしてかわして、後ろに回り込み、蹴りをかました。

コックローチメモリはスピードが上がる能力のあるメモリだが、適合率が悪いのかあまり能力をフルに使いこなしてはいないようだ。それによほどパニックになっているため、動きが滅茶苦茶だ。俺は避けてキックを連続で叩き込んで、回し蹴りでコックローチドーパントをぶっ飛ばした。

漣司「さて、メモリブレイクだ。」

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

漣司『ライダーパンチ！』

俺は右手に力を込めて、コックローチドーパントを殴り付けた。
コックローチドーパントは爆発し、古流工は倒れ、コックローチメ
モリは粉々に割れた。

俺は古流工達を警察につきだして解決した。

すると一夏が声を掛けた。

一夏「えーと・・・。」

漣司「漣司だ。桐札漣司。」

一夏「漣司。あれは一体？」

俺は変に誤魔化しなかったたので、一夏達に千冬さん達と同じ
ように話した。

一夏「そうだったのか。でも、そんなのは関係ない。漣司は俺の
ために怒ってくれて、仲間達を助けてくれた。漣司は俺達の仲間だ。」

箒「ああ。」

セシリア「そうですね。」

鈴「そうね。」

シャル「そうだね。」

ラウラ「そうだな。」

簪「そうだね。」

漣司「ありがとう皆。改めて自己紹介する。俺は桐札漣司。世界で唯一の仮面ライダーだ。漣司と呼んでくれ。」

一夏「俺は織斑一夏だ。世界で唯一ISを動かせる男だ。一夏でいいぜ。漣司。」

箒「私は、篠ノ之箒だ。箒と呼んでくれ。漣司。」

セシリア「私は、セシリア・オルコットですわ。セシリアとお呼び下さい。漣司さん。」

鈴「あたしは鳳鈴音よ。鈴て呼んでね。漣司。」

シャル「僕はシャルロット・デュノアだよ。シャルロットて呼んでね。漣司。」

ラウラ「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。ラウラと呼んでくれ漣司。」

簪「更識簪です。簪と呼んで。漣司。」

漣司「ああ。よろしく、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、
ラウラ、簪。」

こうして俺は一夏達と出会い仲間という絆が出来た。

その03 買い物とGと「世界で唯一」の名をもつ二人の少年（後書き）

暫くは一夏達との交流を書こうと思います。

その4 引っ越しと手伝いと漣司のスペックの高さ（前書き）

ー夏達の寮の引っ越しと漣司のスペックの高さの話です。

その4 引っ越しと手伝いと漣司のスペックの高さ

3月5日、一夏達と出会い、仲間になって3日が過ぎた。俺は寮の部屋で、買い物で買ったカードでデッキを作っていたら、ドアからノックがしたので開けたら、一夏だった。

漣司「よお、一夏どうした？」

一夏「実は俺達も、入学前から寮に住むことになって、漣司と同じ部屋になったんだ。」

漣司「そうだったんだ。ん？俺達てことは、箒達も？」

一夏「ああ。箒達も住むことになって、皆、同じ部屋だって。」

学園の寮の部屋は、一部屋6人部屋なのだが、さすが、特待生が入学する学園だ。高級ホテル並みの豪華さと、快適さがある。しかも教室よりも広くゆつくりくつろげることができる。俺や一夏の他に後4人は入れることか。どんな奴が来るか楽しみだぜ。

漣司「で、一夏の荷物は、着替えとケータイの充電器だけか？」

一夏「ああ。千冬姉がそれらだけは手配してくれた。」

漣司「なんか優しいお姉さんだな。」

一夏「ああ。それらだけ用意してくれた千冬姉に嬉しくて、俺は泣けてくるぜ。」

漣司「時間があつたら、買い物に付き合つてやるよ。」

一夏「ありがとう。ああ、そうだから漣達の引っ越しの手伝いに行こうぜ。」

漣司「ああ、そうだな。女の子だけじゃ引っ越しは大変だろう。」

俺達は引っ越しの手伝いに行った。

漣司 一夏「手伝いに来たぜ」

箒「一夏と漣司か。助かるぞ。」

漣司「それじゃ俺と一夏が家具とか重い物を運ぶから皆は他の軽い物を運んでくれ。後、俺と一夏に見られたら困る物があつたら言ってくれ。」

箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪「……」
「分か（った）（りましたわ）（ったわ）（ったよ）（ったぞ）（った）」
「……」

漣司「よし、始めますか。」

俺達は引っ越しを始めた。

一夏「箒、このタンスは？」

第「ああ。タンスはあつちに頼む。」

漣司「セシリアの家具って、特注品なのか？」

セシリア「ええ、そうですわね。自慢の調度品ですよ。」

漣司「そうなんだ。ん？鈴の私物はそのバッグの中だけなのか？」

鈴「そうよ。あたしはバッグ一つでどこでも行けるから。」

一夏「相変わらずフットワーク軽いなあ。」

シャルロット「漣司？手伝って。」

漣司「ああ。悪い悪いシャルロット。」

一夏「ラウラ、この大量のナイフは・・・」

ラウラ「何だ。問題があるのか？」

一夏「こんだけ有っても困るだろ。」

漣司「一夏、ツツコミおかしいぞ。」

簪「一夏もかっこいいけど、漣司君も、頼りになるね。」

まあ、なんとか昼前に引っ越しを終えて、俺は蕎麦を打って引っ越し蕎麦を皆に振る舞った。

食べ終わって一夏が聞いてきた。

一夏「漣司で、スペック高いみたいだけど、元の世界では何をしていたんだ？」

第「料理はどこで覚えたのだ？」

漣司「両親の家事能力が壊滅的にダメでな。片付けは一つの物片付けたら十の物を散らかすし、洗濯は洗濯機に洗剤入れすぎて泡だらけなるし、白味噌と間違えてキムチ味噌買ってきてそれで味噌汁を作るうとするし、ポットやレンジの使い方が分からなくて、インスタント食品も満足に作れなくて、俺が家事全部やっていたら、必然的に覚えることができた。」

鈴「なんか、ある意味すごい両親ね……。」

ラウラ「教官……いや、織斑先生から聞いたが機械にも強いと聞いたが？」

漣司「工業の高校に通っていたんだが、先生の教え方が下手すぎて、独学で勉強をし、親友達と一緒に、実際に機械弄ってたら半年ぐらいで、高校三年間分の知識と技術を手に入れることができた。」

シャルロット「じゃあ、学園の倉庫にあるバイクは？」

漣司「ああ。この学園のアリーナはライディングデュエルができるから、一から組み立てているんだ。本当は、仮面ライダーなのにバイクに乗ってないのはおかしいと思って自分だけのバイクを組み立てようと思ったのが始まりだ。組み立ててから、二日目だから全然出来てないが。シャルロット、あれでよくバイクで分かったな。」

シャルロット「ええ、まあ・・・」

セシリア「漣司さん、身体能力が高そうですが、それはどちらで？」

漣司「この茶髪ばい黒髪は地毛だが、染めていると思われるべく不良や年上に絡まれてな。仕方なく付き合っていたら、喧嘩なれしていた。」

簪「勉強は英語以外ほとんどできるんだ？」

漣司「さっき言ったように、この髪で先生らにも目をつけられない。だからといってそれで勉強はやらない理由にはしなくなかったし、俺は初めから何もせず反発するよりも、やるべきことをやって成果を出して見返した方が気分よかったしな。ただ、英語だけはダメでな。どんだけ努力してもなんとかならなかったな。」

一夏達「漣司（君）て天才を越えた超人！！？」

「「「「「「「「「「「」

皆は驚いたが、俺がやりたいことやっているだけだからそれを自慢には思っていない。むしろ俺はまだまだと思っている。一夏達はずっと凄いと思うし追い付きたいと思っている。

夕方まで喋って皆と食堂で、夕飯を食べ一夏と俺は部屋に戻り、デッキ構築の続きをして就寝まで一夏と一緒に余ったカードで一夏のデッキを作っていた。

その4 引っ越しと手伝いと漣司のスペックの高さ（後書き）

その03の簪の言葉が原作と合っていなかったなので書き直します。

その05 新たな出会いとプレゼントと力を手にした少女（前書き）

キーワードに間違えたことを書いたので訂正します。

その05 新たな出会いとプレゼントと力を手にした少女

3月6日、俺、漣司は倉庫でバイクを組み立てていた。

学園から少し歩くとスクラップの山々（俺達はスクラップ山脈と命名。）があつて、そこでたまたま見つけた仮面ライダーWが乗っていたバイク、マシンハードボイルダーのモデルのバイクが捨てられてたので、持ち帰り、解体して組み立て直している。

なかなか順調にはいかないが焦る必要はなかったもののんびりと組み立てている。D・ホイールの知識がなく（当然か。）本で調べているが、そこが一番苦労している。

すると一夏、箒、鈴、簪の四人が来た。

一夏「漣司、バイクはどうだ？」

漣司「まあ、ぼちぼちだな。一夏達、今日はどうしたんだ？」

簪「漣司君、今時間を空けることができる？」

漣司「ん？バイクはいつでもできるから、大丈夫だが、どうしたんだ？」

鈴「実は漣司に会わせたい人達がいて、紹介したいのよ。」

箒「それに、姉さんが漣司に渡したい物があるから、連れて来てほしいて。」

漣司「そうか、それじゃ行こうか。行かなかったら東さん、人参ロケットで来そうだな。」

俺達は、学園のロビーに向かった。

ロビーには東さんと何人がいた。

漣司「東さん、五日ぶりですね。」

東「やあやあ、れつくん、来なかったら人参ロケットで行きそうだったよ。」

俺の予想は当たった。

？「あなたが、桐札君ね。」漣司「ああ、そうだが、あんたは？」

楯無「私は簪ちゃんの姉で更識楯無よ。さらしき たてなし私達も九路洲学園に入学することになったのよ。楯無と呼んでね。」

漣司「そうか、改めて自己紹介する。俺は桐札漣司。他の人も漣司と呼んでくれ。」

虚「布仏虚です。のほとけ つつぽよろしくね。漣司君。」

本音「布仏本音だよ。のほとけ ほんねよろしくね。きりふー。」

黛「黛薫子よ。まいあずみ かおるこよろしくね。漣司君。」

弾「五反田弾だ。ごたんだ たん俺と一夏と鈴と俺の横にいる数馬は中学からの仲で一緒に遊んでたんだ。弾でいいぜ。よろしくな。漣司。」

数馬「御手洗数馬だ。俺と弾は一夏と鈴について、色々な人なつきまとされて、千冬さんが保護という形で入学することになった。数馬でいいぜ。よろしくな。漣司。」

蘭「五反田蘭です。そこにいる五反田弾の妹です。蘭て呼んで下さい。よろしくお願いします。漣司さん。」

漣司「ああ、よろしく、楯無、虚、本音、薰子、弾、数馬、蘭。」

自己紹介が終わって、東さんが言った。

東「あーそうだ。篝ちゃんとれっくんにプレゼントがあるんだ。」

プレゼント？

東「まずは篝ちゃんから、じゃじゃーん！！これが篝ちゃんの専用機、第四世代型IS紅椿！東さんお手製だよ。」

あれ？俺の調べでは、IS開発企業はどこも、やっと第三世代型が出来たばかりのはずだが？

俺はそれについて東さんに話したら、

東「まあー、れっくん。そこは東さんの腕なのだよ。バイバイ。」

だそうだ。

篝「姉さん、ありがとう！」

東「どういたしまして。はい、れっくんには、これをプレゼント。」

「東さんは縦50センチ、横130センチ、高さ20センチくらいのきれいにラッピングされた箱を俺に渡した。やけに重いな。」

漣司「開けていいですか。」

東「勿論。れっくんのプレゼントだからね。」

開けて見ると中身は、仮面ライダーオーズに出た武器、メダジャリバーに似た1メートルくらいの大型剣とISと書かれたジョーカーメモリと同じ形のガイアメモリだった。

東「それは、仮面ライダージョーカーであるれっくんのために作った、万能大型剣《ISキャリバー》と、ISメモリだよ。」

漣司「何故これを俺に？」

東「れっくんで前に言っていたジョーカー以外の12本のガイアメモリは特別で使用は、ちーちゃんに止められているでしょ？」

そう、12本のガイアメモリは普通には使えない。ジョーカーに変身した後、メモリリング（神であるレイが命名）というブレスレットを左手首につけ、いずれかのメモリを差し込むことによって、メモリの中にある、生物をモチーフとしたガジェットが出てきて、そのガジェットが専用武器とアーマーとなって装着される。これによってジョーカーは差し込んだメモリの専用武器と固有能力と戦闘スタイルを使うことができる。

千冬さんと東さんにこのことを話したら、千冬さんが入学までこれ以上目立つ行動は避けるようにと、ジョーカーメモリ以外のメモ

りの使用を止められた。

東「ISメモリは、メモリリングに差し込むことで、ジョーカーに紅椿に似た蒼いISアーマーが装着されて、いっくん達と一緒にISで訓練や模擬戦ができるよ。ISキャリバーは格闘だけのジョーカーのために遠中近距離に対応出来るし、ジョーカーメモリかISメモリをそのスロットに差し込んだらマキシマムドライブを発動できるよ。」

漣司「東さん、ありがとうございます。ここまでしてくださって。」

東「いやいや、れっくんのためならこれぐらいは朝飯前だよ。ただ代わりていつてなんだけど、箒ちゃんとタッグを組んで、来週いっくん達とタッグバトルしてほしいんだ。紅椿とISキャリバーとISジョーカーのデータを録りたくて、ちーちゃんには許可は貰ったから。」

箒「わかったよ、姉さん。」

漣司「それぐらいはお安いご用です。」

東「ふふ、ありがとう。それじゃあまたね。」

東さんが帰った後、一夏と鈴が話してきた。

一夏「漣司、お前と戦ってみたいと思った。まさか形で実現出来るとは、思わなかった。やるからには本気でやろうぜ。」

漣司「一夏、俺もお前と戦ってみたいと思った。俺の限界をお前にぶつけてやるぜ。」

鈴「漣司、箒、やるからには本気で行くから覚悟しなさいよ!」

漣司 箒「ああ!」

一夏達は寮に帰った。

漣司「箒。」

箒「どうした漣司?」

漣司「ISキャリバーを使いこなしたいから、俺に剣の間合いと教えてほしい。」

箒「ああ、いいぞ。その代わり、紅椿を使いこなしたいから特訓に付き合ってくれるか?」

漣司「ああ、お安いご用だ。」

箒「ありがとう!」

それから一週間の間、俺と箒は互いの都合が合う時にアリーナで訓練をし、互いに技術を高めあった。

その05 新たな出会いとプレゼントと力を手にした少女（後書き）

この小説の中では筭は一夏と離れ離れになっていないので束さんを嫌ってはいません。筭は一夏が好きなので、漣司とは相棒的な仲になっています。

その06 模擬戦と代表候補生とコンビネーション（前書き）

戦闘は鈴、セシリアペアの模擬戦しか考えてなかったのですれしか書けませんでした。一夏達の模擬戦楽しみにしていた方は、すみませんでした。では、その06が始まります。

その06 模擬戦と代表候補生とコンビネーション

3月13日、束さんからプレゼントを貰って一週間が経ち、漣司達はIS専用の第2アリーナにいた。

千冬「桐札、すまないな。目立つなと言ったときながら、模擬戦に参加してもらって。」

漣司「いえ、俺に居場所を与えてくれた千冬さんと束さんの頼みを無下に断るということは、俺には出来ません。恩返しということで参加させて下さい。」

千冬「そうか、感謝する。後、学園生活では織斑先生と呼んでくれ。」

漣司「分かりました。」

千冬「うむ、ではこれより、タッグ模擬戦を行う。桐札と篠ノ之はオルコットと鳳、デュノアとボーデヴィツヒ、織斑と更識の順番で始めてくれ。」

漣司 side

この模擬戦では、俺のジョーカーと一夏達のデータを録ることになった。俺は一夏のISは知らない。調べれば分かるが、それでは面白くないしこれからの敵も正体や能力が分からないのは当たり前だから、俺と篤は技術向上と連携訓練に時間を費やした。

今の服装は、俺と弾と蘭と数馬は私服で千冬さんはスーツ、一夏達はISスーツだ。女子達のISスーツはスクール水着みたいなもので正直、変態みたいに興奮はしないが目のやり場に困る。一夏のは腹だしタイプ、よく平気でいられると逆に感心ができた。

俺はジョーカーに変身してからISを起動してから着替える必要がない。ちなみに、ISの実戦訓練は俺と一夏以外の男子はデータ収集や訓練機の整備などの、女子達のサポートすることになっている。

女子は訓練機である打鉄うちがねやラファール・リヴァイブを使って訓練することになっている。

セシリア「いきますわよ。ブルー・ティアーズ!!」

鈴「来なさい。甲龍シエンロン!!」

篤「来い、紅椿!!」

三人はISを装着した。

漣司「さて、俺もいくか。」

ロストドライバーを装着し、ジョーカーメモリを押した。

『ジョーカー!』

漣司「変身!」

『ジョーカー!』

切り札の戦士、仮面ライダージョーカーに変身した。

楯無「ほー、これが。」

虚「これが仮面ライダージョーカー……。」

本音「わあゝほとんど真っ黒だゝ。」

薰子「いける。これは確実に売れる。」

漣司「更に、もうひとつ。」

俺はメモリングを左手首に付け、ISメモリを押し、メモリングに差し込んだ。

『IS インフィニット・ストラトス！』

『IS ジョーカー！』

ISメモリからアーマーが出てきて、装着される。見た目は紅椿の蒼色バージョンで肩と胸と腹にもアーマーがある仮面ライダージョーカー、ISジョーカーフォームになった。

弾「スゲー。」

数馬「カッチョイイー。」

蘭「それと、漆黒と蒼色の組み合わせがいいです。」

皆に誉められてどうしても照れてしまう。

漣司、篝、セシリア、鈴「い（くぜ）（くぞ）（いきますわよ）（くわよ）――！」

俺、箒ペアとセシリア、鈴ペアの模擬戦がはじまった。

鈴「漣司、なかなかの格闘センスじゃない。」

俺は鈴が所持している二つ青竜刀が連結した双天牙月の刃以外の部分を蹴り、攻撃を防いでいた。

鈴「でも格闘だけじゃ勝てないことを教えて・・・て、うわ！」

鈴に近付いて、足ばらいをして鈴が倒れた隙にかかとおとしを繰り出した。

鈴「くっ！」

鈴はとっさに回避をして、かかとおとしを繰り出した俺の右足は地面に直撃し、半径5メートルの地面は地割れをおこした。

鈴「接近戦はヤバイ！こうなったら！」

鈴の両肩に浮いている非固定浮遊部位からエネルギーがチャージし、見えない何かが来るのが分かると俺はISキャリバーを取り出し、弾き飛ばした。

漣司「驚いたぜ。」

鈴「こっちは龍砲の見えない衝撃砲を弾き飛ばしたあんに驚い

たわよ！」

セシリア「鈴さん、まず漣司さんから倒しま・・・きゃあ！」

セシリアが鈴の援護をしようとしたが、箒が所持していた二刀の一つ、雨月から出たレーザーで妨害した。

箒「私を忘れるな！漣司、セシリアは任せてくれ！」

漣司「分かった。じゃあ、連携訓練の成果を試すか！」

箒「ああ！」

鈴「連携訓練だか何だか知らないけどさせないわよ！」

セシリア「そうですわ！」

鈴は俺に、セシリアは箒に攻撃を仕掛けた。

俺はISKヤリバーで袈裟斬りを放ち、双天牙月を真つ二つにした。

鈴「くっ！やっぱり接近戦じゃあキツイわね。かといって龍砲は全部弾き飛ばしちゃうし、一旦退いて・・・。」

セシリア「ちよっ・・・ちよっとな鈴さん！？」

鈴「え？」

二人は一緒になった。実は俺と箒は別々に戦っているように見せて二人を一緒に集まるように誘導したのだ。

漣司「これで決めるぜ。」

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

漣司「ライダーキック！」

俺のライダーキックは二人に炸裂した。

セシリア 鈴「きゃあ~~~~~！！！」

二人は叫びながら墜落した。

千冬「試合終了！勝者桐札、篠ノ之ペア！」

俺達の勝利だった。

千冬「さすがだな、桐札。一週間でISをここまで物にするとはな。」

漣司「いえ、俺はまだ限界を出しきれないのですまだまだです。」

一夏「それでもすげーな。漣司、なんか上達するコツとかあるのか？」

漣司「しいて、言うなら、基礎訓練が上達のコツかな。」

千冬「そういうことだ。精進しろよ。馬鹿者。」

一夏「はい……。」

千冬「では、次を始めるぞ。」

二時間後、模擬戦は俺と篝の勝利で終わった。

その06 模擬戦と代表候補生とコンピネーション（後書き）

次の次にハヤテのごとく！のキャラ達を出す予定です。

その07 相棒と色恋沙汰と質問攻め（前書き）

各話 詰めていたのでスペース空けて編集し直しました。

その07 相棒と色恋沙汰と質問攻め

模擬戦が終わったなら、昼だったので、漣司は疲れている皆にきつねうどんと野菜の天ぷらを作り、食べていた。

漣司「あつ、すまん。お茶用意するのを忘れてた。用意してくる。」

「

一夏「漣司も、疲れているだろ。ここは俺が用意してくるよ。」

漣司「サンキュー。」

一夏はお茶を用意に行った。

シャルロット「漣司、このきつねうどんもしかして、麺から作ったの？」

漣司「ああ、麺は三日前に打っていたやつを食堂の冷蔵庫で保存して使っている。」

ラウラ「いつも作っているのか？」

漣司「いや、皆に食べてもらいたくて作っているから、それに俺は自分の味付けが分かっているから、自分のはインスタント食品で済ましている。」

第「そつ、それではいかなぞ！ちゃんと栄養のあるもの食べないと。そうだ。漣司が私達に、料理を作って食べさせてくれるなら私が漣司に料理を作って食べさせてやろう！」

漣司「いいのか？ 箒。」

箒「ああ、遠慮するな。何せ漣司と私は相棒なのだから！」

「「「「「え？」「」「」「」

セシリア達は驚いた。

セシリア「漣司さんと箒さんが相棒？」

鈴「てっきり私達は付き合っていたのかと。」

箒「なっ何故そうなる！」

シャルロット「だって二人きりで訓練していたし。」

ラウラ「それに、屋上で二人きりで夕日を眺めていたのを見たぞ。」

箒「後、箒は漣司君のガレージの前で待っていて漣司君が来たら一緒に入るを見たよ。」

蘭「後、街で二人きりで歩いていてまるでデートでした。」

楯無「漣司君がリヤカーを引いてスクラップ山脈に行こうとしたら、箒ちゃんも付いていったよね。」

弾「漣司が食堂の食材を調達しに行こうとしたら、箒も『危険なのは分かっているから連れてってくれ!』と涙目になりながら言うて一緒に行ったよな。」

数馬「だから、俺達は漣司と箒ができているんじゃないかと思っているんだ。」

束「そのところはどうか？箒ちゃん、れつくん。」

漣司「あー箒、恥ずかしいと思うが話していいか？このままじゃあ、変な誤解されてしまうし。」

箒「う・・・うん。」

箒の顔が完熟トマトのように真っ赤になった。

漣司の回想

あれは、束さんからプレゼントを貰ってその日に、箒と一緒に訓

練をしてそれが終わって、更衣室で着替えが終わり帰る途中に箒が待っていたんだ。

箒『実は話したいことがあるんだ。』

漣司『分かった。とりあえず、ガレージで話そうか。』

ガレージに着いた俺は箒の話を聞いた。

漣司『さあ、話していいぜ。』

箒『実は、漣司に初めて会ってから私は漣司に一夏に対して思う似たような感情を持つようになった。』

漣司『箒は一夏のことを異性として好きなんだよな。』

箒『ああ、私は一夏のことが好きだ。漣司のは、一夏のと似ているのかもしれない。でも、漣司のは、共に戦いたい、守られてばかりいるから、守りたい、もっと頼ってほしい、意見を言い合ってそれで口喧嘩をしたい、恋人とは違う親友以上の関係になりたい、そういうことを思うようになった。』

漣司『俺と元いた世界の親友達は箒が言う関係を俺達は、相棒と言っている』

箒『相棒?』

漣司『そうだ。それでだ箒。もしお前がいいなら俺の相棒になってくれるか?』

箒『私なんかでいいのか？』

漣司『ああ、俺は学校の先生で唯一信頼できる中学の数字の先生がいたんだ。その先生が 人生の相棒と言える人を探せ。男、女どちらでもいい。その相棒と絆で結ばれた仲間達と共に、あらゆる困難に立ち向かい乗り越える。 てな。箒は俺の相棒と言える人だ。こんな俺でいいなら相棒になってくれ！』

箒『ああ、漣司がそう言ってくれるならこちらこそよろしく願います！』

俺と箒は握手をした。

漣司「とまあ、こうして俺と箒は相棒になったんだ。」

鈴「けどね、人が聞いていたらそれってプロポーズと間違いそうね。」

漣司「そうか、そういう勘違いにならないように言葉を選んで言ったつもりだが。」

セシリア「二人の行動はどう見ても恋人同士にしか見えませんわよ。」

漣司「ああ、一つずつ説明するわ。箒との訓練は今回の模擬戦の為に二人きりでしていた。夕日を見たのは箒は紅椿の単一仕様能力、ワンオフアベリリテイ

絢爛舞踏^{けんらんぶたつ}を上手く発動出来なく焦っていたんだ。それで箒と一緒に夕日を見に行っただ。屋上で見る夕日は綺麗で落ち着くことができるからな。箒も落ち着くことができて、この日以降の訓練から絢爛舞踏を任意で発動することが出来たぞ。」

シャルロット「漣司も箒のためにしないようなことをするんだね。」

漣司「ああ、それほど箒は焦っていたからな。ガレージについては箒がバイクの組み立てに手伝ってくれたんだ。ガレージで二人きりといっても、その後一夏と千冬さんがバイクを見に来たぞ。箒がデッキを作りたいと言ったからカード買うためにカードショップに行くのに付き合っただ。」

楯無「漣司君てもしかして女の子と付き合っただことがあるの?」

漣司「なかったな。中学時代はある事件を境に男子と女子の間に溝が出来て気まずい雰囲気でも思春期の男女が過ごすとは思えない中学生活だったし、高校は、女子がほとんどいない工業高校だったし、他校の女子に告白はされることがあっただがな。」

薫子「その時の状況を教えて。」

漣司「十人くらいで来たな。その子達は学校ではアイドル的な存在だったみたいで、その子達によると不良に絡まれたところを俺は助けたみたいだ。」

ラウラ「みたいだ?」

漣司「この見た目で不良が寄って来て喧嘩三昧だったからな。いつ、どこで助けたのか分からなかったんだ。それがきっかけで告白されたんだが丁寧に断ったよ。」

簪「どうして？」

漣司「今でもそうだが、俺は本当にどうしようもなく、色恋沙汰に興味が無くてな。親友達と一緒にバカやってた方が楽しかったし、それに付き合ったら俺がしたいことが自由に出来なくなるからそれだけでもイライラしてくるんだよ。」

鈴「漣司で、鈍感そうには見えないけど、親友達にそここのところなんて言われたの？」

漣司「俺は色々な奴に目をつけられてな。誰も敵意、邪険、信頼感、好意、尊敬色々という目で見られているから誰が誰にどういう目でみるかわかるんだよ。」

簪「漣司が引越しの時、私達が一夏が好きなのがすぐわかったらしいぞ。」

漣司「まあ、簪達が一夏のことが好きなのは分かるし、大切な仲間達と思っているから、まあ、よろしく？」

この後すぐ一夏が、戻って来て、昼食が終わった。

午後は夕飯まで模擬戦の反省会をした。

翌日、俺達は新たな仲間達と会う。

その07 相棒と色恋沙汰と質問攻め（後書き）

次はハヤテのごとく！のキャラ達と出会います。

その08 少年執事と酒飲み教師と力を持つ者の使命（前書き）

遅くなつてすみません。中々、思ったように書けなくて、それで今回の話は二話に分けました。なるべく後半は早く投稿出来るようにします。

その08 少年執事と酒飲み教師と力を持つ者の使命

3月14日

俺達は千冬さんに招集をかけられた。

一夏「どうしたんだよ。千冬姉『バシーン！！！！』ぐえ！！」

千冬「学園では織斑先生だ。それと教師には敬語を使えよ馬鹿者。」

千冬さんの出席簿アタックが炸裂したな。一夏の頭と出席簿に煙が立っている。

「さて諸君に集まったもらったのは、入学することになった生徒達が船で来るから、港まで行ってその出迎えを頼みたいという予定だったが問題がおきた。」

ここは10年以上前に突如、太平洋の真ん中に浮上した島だったようで、あらゆる国や組織が手を出せないから、ここに学園を設立したようである。面積は四国の10倍くらいの広さで色々な地区がある。この学園地区や、市街地区、スクラップ山脈、森林地区、鉾山地区、氷山地区、火山地区、砂漠地区、海岸地区、湖などなど、人が住む以外の地区にはそれぞれの生態系が生んだ猛獣がいる。そのほとんどの猛獣にはIGO（国際グルメ機関）という機関が定めた捕獲レベルというのがある。捕獲レベルは猛獣の強さ、食材の発見、調達、調理の難しさを表している。これら食材を探索し食す美食屋と絶滅寸前の猛獣や食材を保護、再生し、度が過ぎた食材調達

をする者を独断で検挙することが出来る再生屋と言う人達がいるらしい。

話がそれてしまったが、その地区の一つ港地区は入学する生徒が乗っている船が10時に来るようだ。　ん？今千冬さん問題がおきたと言わなかったか？

千冬「ああそうだ桐札、その生徒達が乗っている船が何者かに占領されたとの情報が入った。」

ラウラ「教官『バシーン！！』・・・織斑先生、その船に乗っている生徒は？」

千冬「大富豪の息子や娘とその執事達だな。」

シャルロット「では、その人達が狙い？」

千冬「そこまでは分らん。それで、桐札と専用機持ちは船に行つて生徒達を救出してほしい。桐札、織斑、篠ノ之は実力は有つても代表候補生みたいな特別な訓練を受けてないから危険かもしれない。無理にとは言わない、どうする？」

漣司「その人達は俺達の仲間になるんだ。その仲間の危機を俺は助けたいから、行きます。」

一夏「そうだな。女の子に任せるといふ男にはなりたくないな、俺も行きます。」

篤「私も仲間達を守りたい。それに相棒の漣司と一緒になら大丈夫です！ですから、私も行きます。」

千冬「ふつ、では、桐札、織斑、篠ノ之、オルコット、鳳、デユノア、ボーデヴィツヒ、更識妹は船に向かい、残りは待機だ。」

「「「「「「「はい！」「」「」「」「」

俺達は停留している船に入った。そして、生徒達がいるであろうロビーに向かった。それにしても占領されたにしてはやけに静かすぎる。それに、ロビーからは女性の酔っぱらった声と男達の悲鳴声が聞こえる。俺達は急ごうとしたら、ラウラがいきなり近くのゴミ箱に向かって言った。

ラウラ「そこにいる二人、出てこい。」

ゴミ箱の裏から出て来たのは水色髪の執事服の男と桃色の長髪の女の子だった。

漣司「俺は桐札漣司、あんだ達は？」

ハヤテ「僕は、綾崎ハヤテです。」

ヒナギク「私は桂ヒナギクよ。」

一夏「俺は織斑一夏だ。」

第「私は篠ノ之箒だ。」

セシリア「私はセシリア・オルコットですわ。」

鈴「私は鳳鈴音よ。」

シャルロット「僕はシャルロット・デュノアだよ。」

ラウラ「私はラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

簪「私は更識簪です。」

漣司「二人は何でここに？」

ヒナギク「私の友達がハヤテ君と一緒に助けを呼んできてと頼まれて、あなた達が来たからとりあえず隠れることにしたの。」

ハヤテ「桐札君達はどうしてここに？」

漣司「俺のことは漣司でいい。織斑先生にあんた達を救出してほしいと言われてここに来た。」

ハヤテ「僕もハヤテでいいです。」

ヒナギク「私もヒナギクでいいわ。」

漣司「わかった。それじゃ行きますか。」

俺達はロビーに急いだ。

？「私の生徒に手を出すなー！！」

男「がは！」

ロビーで俺達が見たのは、あちこちに倒れている男達とそれを倒している女性だった。

ヒナギク「お姉ちゃん！」

鈴「え？あれ、あんたのお姉ちゃん？」

ヒナギク「ええ、雪路お姉ちゃん。私達の先生よ。」

それにしては似てねえな。それにやけに顔が赤くて酒臭いな。

漣司「ヒナギク、あんたの姉貴、もしかして酒飲んでんのか？」

ヒナギク「ええ、お姉ちゃん給料のほとんどをお酒に替えるほどのお酒好きなの。」

ヒナギクは呆れたように言う。

おいおい、生徒が頑張っているのに教師は酒飲んでんのかい。

リーダー「くっ、こうなったら」

リーダー格の男がガイアメモリを取り出したが雪路先生がそれを

奪った。

雪路「へえーこれを使っただ。だつたらこれを使って生徒に手を出したあんた達に裁きを下してやるわ!!!」

雪路先生はガイアメモリの記憶の声を鳴らし、腕に差し込んだ。

『ビースト!』

獣の記憶、ビーストメモリで雪路先生はビーストドーパントになり、リーダー格の男を襲おうとした。

で、おい!犯人が死んでしまう!

漣司「ヤバイ!」

俺はジョーカーメモリを取り出した。

『ジョーカー!』

「変身！」

リーダー「助けてくれ！！！」

雪路「覚悟『ジョーカー！』て、え？ わー！」

俺は仮面ライダージョーカーに変身して雪路先生に飛び蹴りをくらわせた。

漣司「間に合った。一夏、その男を頼む！」

一夏「わかった！」

一夏は男を安全なところに避難させる。

篇「一夏！漣司！何故犯人を助ける！そんな男は放っておいて……」

一夏 漣司「篇！！！」

篇「！！？」

一夏「そんな寂しいことを言わないでくれ。力を手にしたら弱者の立場が分からなくなるなんて箒らしくないぜ。」

漣司「俺達が知っている箒は力がない者達を助ける優しい女の子のはずだ。」

箒「私は・・・」

雪路「あんた達、よくもやってくれたわね！」

雪路先生もといビーストドーパントが箒を襲おうとした。

漣司「箒！！！」

俺は箒を抱き、ビーストドーパントの攻撃をくらってしまった。

漣司「ぐう！！」

箒「漣司！私なんかを庇って・・・」

漣司「女の子を守るのは男の仕事だ。それに、先生は言っていた。『力を手にした者は二つの使命がある。一つ、その力を、何時、何のために使うのか見極めること。もう一つ女の子や力がない者を助けること。例えばそれが犯罪者であっても』とな。力を手にした者は使命と言うものがある。」

箒「漣司、すまない。私はまた間違いを・・・」

漣司「これ以上は言わなくていい。大事なのは、同じ過ちを繰り返

返さないことだ。箒、お前だったら見極めることができる。」

箒「漣司、その為だったら私に力を貸してほしい。」

漣司「ああ、任せな。よし、あの酒飲み教師を止めるか。」

箒「ああ!」

俺達はその教師に犯罪者になって欲しくないから、絶対に止める。

その08 少年執事と酒飲み教師と力を持つ者の使命（後書き）

実は自分は前はシャルロット党でしたが、今はファース党です。黒髪ポニーテールの大和撫子である筈はいいですね。

その09 仲間の力と教師の抱擁と新しい生き方（前書き）

編集し直しました。ではどうぞ。

その09 仲間の力と教師の抱擁と新しい生き方

俺達は雪路先生もといビーストドーパントを倒すため闘う。

ビースト『うおおおおおおお！！』

ビーストドーパントは怪力でテーブルや椅子を投げてきたがラウラのIS、シュヴァルツエア・レーゲンのAIC（慣性停止能力）で防いだ。

ラウラ「一夏、漣司！私達が時間を稼ぐから、倒してくれ！」

一夏「わかった！」

漣司「一夏！ビーストドーパントは再生能力があるから、零落白夜で攻撃してくれ！そしたら、俺が間髪入れずメモリブレイクする。」

ビースト「なんなんかよく分からないけど、させる「邪魔させると思う？」！？」

シャルロットが割って入った。ショットガンを二挺使ってビーストドーパントを妨害したばかりか瞬時に、右手を近接ブレードブレード・スライサーでビーストドーパントの攻撃を受け止め、左手で持ったマシンガンで直接ビーストドーパントのボディに銃口を付けて撃った。

シャルロットのISラファール・リヴァイヴ・カスタム？は訓練機ラファール・リヴァイヴの基本装備を外して、その代わりISに武器を量子変換するために必要な拡張領域 バススロット を倍に

していて装備が20もあるらしい。

シャルロットはその拡張領域を利用して状況に合わせて、武器を呼び出ずとも戦闘と同時進行で行える高速切替 ラピッド・スイッチ を特技としている。

シャルロットはラファール・リヴァイヴ・カスタム？と高速切替で『砂漠の逃げ水』という戦法ができる。この戦法は押そうが引こうが一定の距離と攻撃リズムを保ち、安定した戦いができる。

シャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタム？、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンのコンビはほぼ死角なしだ。俺と篤は模擬戦でよく勝つことができたと思う。

ビースト『ぐあああああああ！』

シャルロットとラウラのコンビネーションは抜群だ。セシリアと鈴とは違うな。それでもビーストドーパントにはダメージが与えられない。いや、与えられないんじゃなく、ビーストドーパントの再生能力が皆の与えるダメージよりも上回っているからダメージがないように見えるんだ。

セシリア「くっ！これじゃキリがありませんわ！」

鈴「でも、もうこれで終わりよ！」

篤「一夏、やれ！」

一夏「零落白夜、発動！」

一夏のIS、白式の単一仕様能力、零落白夜は対象のエネルギーを消滅させることができる。あれをくらってしまったら、俺は強制

解除されてたな。

まあ、俺はISキャリバーで全部防いだが。

一夏「うおおおおおおおおお！！！」

雪片はビーストドーパントのボディに直撃した。

ハヤテ「凄い……。」

ヒナギク「でも、まだ倒れてないわ！」

簪「大丈夫。私達には白の戦士、一夏と。」

俺はビーストドーパントの後ろに回り込んだ。

箒「切り札の戦士、漣司がいる！」

漣司「さあ、あんたが犯そうとした罪を数えろ！」

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

漣司「ライダーパンチ！」

ビーストドーパントは振り返って殴ろうとするが、俺は避けてボディにライダーパンチを当てた。

ビーストドーパントは爆発しその後、雪路先生が倒れ、ビーストメモリは粉々に割れた。

ヒナギク「お姉ちゃん！」

ヒナギクは雪路先生に駆け寄った。

ヒナギク「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！ しっかりして！」

漣司「安心しな。メモリブレイクしただけで、少しすれば目が覚めるはずだ。」

一夏「漣司、大丈夫か？」

漣司「まあ、大丈夫だ。」

今回もなんとかなったようだ。

あれからハヤテやヒナギクの他の生徒を助けだし、任務は完了した。ケガをしたのは箒を庇ってダメージを受けた俺ぐ

らいだった。箒は気にしてたようだが俺は頭を撫でてあげた。箒は少し元気になったようだ。

俺と一夏の部屋にハヤテが新しい仲間になった。俺と一夏は祝いにハヤテのデッキを作る手伝いをした。ちなみに一夏はデュアル、ハヤテはドラグニティ、俺は闇と風のドラゴンとのシンクロデッキだ。

俺は飲み物買いに、外の自販機に行こうとしたら千冬さんがいた。

漣司「織斑先生。」

千冬「今は千冬さんでいい。それよりも漣司、箒を庇ってケガをしたそうじゃないか。」

漣司「いえ、たいしたケガじゃないですよ・・・!?!」

俺は驚いた。何故なら、千冬さんは俺を近くのベンチに座らして、母親のように抱きしめられたからだ。

漣司「ちよつと千冬さん!?!」

千冬「まったく、一夏といいお前といい、どうして私の生徒はこう無茶ばかりするんだ。」

漣司「すいません。」

千冬さん「なあに、ただ何があっても、どんな無茶もしていい。決してお前達は死なないでくれ。頼むから。」

千冬さんはしっかりとした喋り方だったが体が震えていた。

漣司「大丈夫ですよ。俺や一夏だけじゃない、貴女の生徒達は必ず生きて貴女の元に帰って来ますよ。」

俺は千冬さんの背中を擦り安心させた。

千冬「まったくお前も一夏と同じ妙に女を刺激させるな。」

漣司「今は千冬さんを安心させようとしただけです。」

千冬「そうか、では話を変えるがお前の生き方は見つかったか？」

漣司「俺の生き方は、この学園では誰にも泣いてほしくない。だから俺は仲間達と共にこの学園を守りたい！」

千冬「そうか、では守りたいのなら、更に精進しろよ。」

漣司「はい!!」

こうして俺は新しい生き方を仲間達と共に過ごす。

その09 仲間の力と教師の抱擁と新しい生き方（後書き）

中々入学に繋げられません。次からははじめてのあく！、遊戯王5D
' S、トリコのキャラを出します。

その10 特訓と学園事情と新たな出会い（前書き）

だいぶ慣れてきたので自分のペースで出来るので安心です。

その10 特訓と学園事情と新たな出会い

3月16日

ハヤテ達と出会って二日が経ち、俺達は剣道場で特訓をしていた。セシリア達代表候補生はISが使用不可能になっても闘えるように訓練されている。

俺もジョーカーに変身出来なくなっても仲間達と闘える為に日々筋トレやジョギング、箒との剣術修行、千冬さん直々の特訓をしている。これらを俺、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪にハヤテとヒナギクとも一緒にすることになった。

ハヤテの主やヒナギクの親友達は体力が無さすぎて鍛える以前に筋肉痛で動けなくなるそうだ。その上ハヤテの主、三千院ナギという女の子は頭がいいが体力がなく、昔よりかはマシになっているが、極度の引きこもりだったらしい。ヒナギクの親友である花菱美希^{はなびし みき}、瀬川泉^{せがわ いずみ}、朝風理沙^{あさかぜ りさ}は成績も悪く、体力が無いくせに、悪知恵は働いてヒナギクを困らせている。通称生徒会三人娘。

この三人は何故かハヤテのことをハヤ太君といい（一夏は一太君、俺は漣太君と呼ばれた。）彼に関する動画を撮っているらしい。

後、ナギの親友が三人いて大阪弁を使う女の子愛沢咲夜^{あいざわ さくや}、和服が似合う女の子鷺ノ宮伊澄^{さぎのみや いすみ}、口は悪いが努力家の男の子橘ワタルがいる。俺と一夏は咲夜とワタルに兄、伊澄には様付けで呼ばれている。

他に五人いて、ナギいわくザ・キングオブ・普通と言われて、ま
たはハムスター（人間だった）と呼ばれている西沢歩^{にしざわ あゆむ}、ラプ師匠霞^{かすみ}
愛歌^{あいか}、よく育てられた腐女子春風千桜^{はるかぜ ちはる}、最弱のヘタレ東宮康太郎^{あすまみや こうたろう}、
ハヤテを狙うホモの変態で泉の双子の兄でもあり執事の瀬川虎鉄^{せがわ こてつ}

ちなみに、ナギ、美希、泉、理沙はハヤテを女顔だからといって女装させたと聞いた俺と一夏は四人に説教し、反省してくれたので

ハヤテに女装はさせないと約束してくれた。まあこれで虎鉄とお金関係以外の不幸はないだろう。

俺達はナギ達を連れて剣道場に訪れた。

さて、学園の事情を説明しよう。この九路洲学園は俺達が入学生一号なので二、三年がいないのだ。だから二十歳越えた人も俺達と同じく一年生から始まる。更に一つのクラスを六十人にするから大したものだ。

部活も色々あつて俺達は剣道部にした。理由は剣術を磨くことができるから。

漣司「まったくお前らは呆れるほど体力ないな。」

ナギ「うつつ、もうへロへロなのだ。」

花菱「まったく漣太君達は」

朝風「本当に容赦ないな。」

瀬川「疲れたよ」

篤「まだ、三十分も経ってないぞ。」

東宮「ピューピュー」

ラウラ「ヘタレの息がヤバイな。」

ヘタレ「ヘタレ違うわあああああああああ！て、名前までも！？」

ヒナギク「これはあなた達のためにやっているのよ？」

ヒナギクの言う通り、この五人は体力が無さすぎる。ヘタレを除く子はISの訓練があるが、乗れたとしても十分もたないだろう。だから俺達で鍛え上げている

鈴「あんた達はまだマシよ。問題はそこのヘタレよ。ヘ・タ・レ！」

ハヤテ「鈴さん、ヘタレヘタレ言わないであげてください。確かに東宮君は体力がなく、負けたら次は自分より小さくて弱そうな相手を戦って負けても、ヘタレは言い過ぎだと思えます。」

セシリア「ハヤテさんが一番言い過ぎだと思えますけど・・・。」

東宮「ぐはっ！」

漣司「あつ、東宮が倒れた。」

シャルロット「東宮君くっ！しっかりして！」

シャルロットが往復ビンタで東宮を無理矢理起こした。

簪「シャルロットで、たまに凄いことするね・・・。」

まあ、東宮も結構しぶといからなんとかなるだろう。

一夏「それでも、お前らに合わせた練習メニューなんだぜ？」

一夏の言う通り、俺、一夏、簪、ハヤテ、ヒナギクで剣術の相手

をしてナギ達のレベルに合わせているのだ。

ナギ「それでも、ツライものはツライのだ！」

ハヤテ「皆さん、今日はこれくらいにしませんか？お嬢様も頑張っていますし。」

漣司「まだ満足じゃないがこれくらいにするか。」

俺達は帰る準備をしていたら、千冬さんと山田^{やまだ}真^ま耶先生とツラが来た。俺は雪路先生を先生とは思えないのでツラと言っている。

漣司「織斑先生と山田先生どうしたんですか？」

雪路「ちよつと！桐札君！あたし無視！」

漣司「何ですか。居たのですか？ツラ。」

雪路「ツラじゃないわ。桂よ！桐札君あたしは先生だから敬意を持ってほしいわ。」

漣司「仕事中に酒飲んで、酔っぱらってガイアメモリ使って、犯人を殺そうとしたばかりか生徒にケガをさせた人を俺は教師だと思っ
ていません。」

雪路「うつっ……。」

千冬「もういいだろ桐札。さて新しい生徒になるもの達を呼んだから紹介しよう。さあ入れ。」

千冬さんは三十人くらいはいるだろう生徒を入れさせた。

ジロー「阿久野ジローだ。よろしく頼む。」

キョーコ「渡キョーコです。よろしくね。」

アキ「中津川秋穂だ。よろしくな。」

ユキ「東雲雪路です。よろしくね。」

緑谷「緑谷ヤスヒコです。よろしく。」

黄村「黄村ヨシヒトだ。よろしく。」

シズカ「草壁シズカです。よろしくお願いします。」

乙型「キョーコ乙型です。乙型と呼んでください。」

黒澤「黒澤アキラです。よろしくお願いします。」

サブロー「阿久野サブローです。よろしく。」

遊星「不動遊星だ。よろしく頼む。」

ジャック「俺の名はジャック・アトラス。よろしく頼むぞ。」

クロウ「クロウ・ホーガンだ。よろしくな。」

アキ「十六夜アキです。よろしくね。」

龍亞「龍亞です。よろしくね。」

龍可「龍亞の双子の妹の龍可るかです。よろしくお願いします。」

ブルーノ「ブルーノだよ。よろしくね。」

鬼柳「鬼柳京介きりゅう けいすけだ。共に満足に行こうぜ。」

トオル「トオルだ。よろしくな。」

ミサキ「ミサキ……。よろしく……。」

トリコ「トリコだ。よろしく。」

小松「小松です。よろしくお願いします。」

ココ「ココです。よろしく。」

サニー「サニーだ。よろしく。」

ゼブラ「ゼブラだ。お前ら俺に適応しろよ。」

鉄平「鉄平だ。よろしく。」

滝丸「滝丸たきまるです。よろしくお願いします」

マッチ「マッチだ。よろしく。」

千冬「これで諸君のクラスは全員揃った。後は『ドコーン……!?!?』」

一夏「なっ何だ!？」

ジロー「何かが、落ちたような音だぞ！」

第「様子を見に行こう。」

遊星「しかし、どこに落ちたかわからないぞ。」

トリコ「大丈夫だ。ゼブラ、場所は分かるか？」

ゼブラ「南西のほうだ。そう遠くじゃねえ。」

千冬「第三アリーナのほうか。」

漣司「よし、行ってみるか。」

俺達はライディングデュエル専用の第三アリーナに着いた。
そこにいたのはスーツを着た人がベルトとタンクと一緒にアリー
ナの中央で倒れていた。

その10 特訓と学園事情と新たな出会い（後書き）

次は新たな仲間達と共に戦闘です。追記 間違えたので訂正しました。

その11 異世界の人達と二人目の仮面ライダーと集まった仲間達（前書き）

仮面ライダーオーズのあの人と、ながされて藍蘭島、おまもりひまり、相棒のキャラが出ます。

その11 異世界の人達と二人目の仮面ライダーと集まった仲間達

俺達は倒れていた人に声をかけた。

漣司「おい、あんた大丈夫か？」

？「ん・・・ここは？君は誰だ？」

漣司「ここは九路洲学園と言うところだ。俺は桐札漣司。あんたは？」

後藤「俺は後藤慎太郎。」

千冬「私は織斑千冬。後藤。何があつたか話してくれるか。」

後藤「俺はヤミーを倒していたら、そのヤミーが急に光だして気が付いたらここにいました。」

一夏「ヤミー？」

後藤「ヤミーは人の欲望から生まれた怪物なんだ。その欲望はセルメダルになってヤミーの肉体になるんだ。俺はヤミーを倒す仕事をしているんだ。」

篝「あの、ヤミーとやらを倒す仕事をしているって、後藤さんはもしかして漣司と同じく仮面ライダーなのですか？」

後藤「ああって、桐札、君も仮面ライダーなのか？」

「 漣司「ああ、俺は切り札の戦士、仮面ライダー・・・ジョーカー。」

「 後藤「俺はセルメダルを使って変身する仮面ライダー・・・バースだ。」

その後、後藤によるとバースは元々装着者がいたらしいが、その装着者が闘えなくなり装着者の意志を継ぎ後藤がバースとなったようだ。

漣司「後藤。俺達と一緒にここ生徒にならないか？」

後藤「いいのか？桐札。」

漣司「ああ、いいですよね千冬さん？」

千冬「全く、勝手に決めおって、まあいいだろ。」

後藤「ありがとうございます。」

その時、三つの光が現れた。どうやら新しい仲間は後藤だけではないようだ。

「 漣司「いてて、皆大丈夫か？」

「 私達は大丈夫だよ行人」

「 うーん、緋鞠、皆大丈夫か？」

？「私達は無事じゃ若殿。」

？「亀山君、神戸君無事ですか？」

？「ええ、右京さん俺は無事です。」

？「はい、杉下さん僕も無事です。」

漣司「あんた達、俺は桐札漣司。あんた達は？」

行人「僕は東方院行人とうほういんです。」

すず「私はすずです。」

あやね「私はあやねよ。」

まち「私はまちよ。」

りん「あたいはりんだ。」

みこと「ウチはみことや。」

ゆきの「私はゆきのだよ。この動物達は私の友達だよ。」

ちかげ「私はちかげです。」

梅梅「わ、私は梅梅メイメイといいマス。こちらの河童かどうさんは遠野さんといいいマス。」

しのぶ「拙者はしのぶでしる。」

くない「私はないです。」

みちる「私はみちるです。」

優人「僕は天河優人です。」

緋鞠「野井原緋鞠じゃ。」

凜子「九崎凜子です。」

静水久「静水久……なの。」

くえす「神宮寺くえすですわ。」

右京「僕は杉下右京といいます。」

亀山「俺は亀山薫だ。」

神戸「僕は神戸尊です。」

話を聞くと、行人達は藍蘭島という島の住民でお花見に行く途中突然光に包まれて、優人達は妖を探す途中に突然光に包まれて、右京さん達は刑事で犯人を追跡中に、突然光に包まれていつの間にかここにいたそうだ。

それにしても、後藤といい行人達といい、俺とは違う方法でこの世界に來たようだ。

その時、俺達の周りに黒いもやが出てきた。

『！！！！？』

もやからバイオレンスドーパント、ジュエルドーパントを筆頭に怪物が現れた。

クロウ「なんだコイツらは！？」

漣司「後藤、コイツらは。」

後藤「ああ、ヤミーだ。共に戦ってくれ。」

漣司「もちろん、いくか。」

俺はロストドライバーを装着し、ジョーカーメモリを、後藤はバーストライバーを装着し、セルメダルを持った。

『ジョーカー！』

漣司 後藤「「変身！」」

『ジョーカー!』

俺はジョーカーメモリをドライバーに装填し展開し仮面ライダージョーカーに、後藤はドライバーの左側の投入口にセルメダルを入れ、右側のハンドルレバーを回したら、複数のカプセルが出てきてアーマーになり、仮面ライダーバースとなる。

ジロー「おお!カッコいい。」

亀山「まるで特撮だな。」

漣司「さあ、お前達の罪を数えろ!」

俺と後藤はドーパント&ヤミー軍団に立ち向かった。

漣司「数が多いな。」

一体一体弱いが、数が多い。

一夏「俺達も加勢するぜ。」

一夏達が来てくれた。一夏、ハヤテ、ジロー、遊星達は俺を、トリコ、行人、優人達は後藤のサポートをしてくれた。

バイオレンス、ジュエルは俺を狙って来るが、

第「やらせるか!」

一夏「漣司ばっか狙ってんじゃねえ!」

ハヤテ「僕を忘れてもらっては困ります!」

ジロー「複数で来るとは悪の風上にも置けぬやつらだ!」

遊星「仲間をやらせはしない!」

箒達の攻撃でドーパント達は吹っ飛んだ。他の皆は、マスカレイドドーパント軍団と戦っている。

後藤「こうなったら。」

後藤バースはセルを投入口に投入し、ハンドルレバーを回した。

『ドリルアーム!』

後藤バースの右肘からカプセルが出てきてそれは右手から右肘にかけてパーツが装着されて巨大なドリルになった。

トリコ「おお!」

後藤バースはカブトムシをモチーフとしたヤミーにドリルアームで突いた。するとヤミーからセルメダルがどんどん溢れてドリルアームにくっついていく。

千冬「なるほど、戦いながら、セルメダルも回収も出来るか。良

くできたシステムだ。」

後藤「皆、止めを刺すから時間稼ぎを頼む。」

すず「わかった。」

ゼブラ「わかったぜ。ただし、ミスすんじゃねーぞ！」

後藤「ありがとう！」

後藤バースはドリルアームを解除し、メダルを投入し回した。

『ブレストキャノン！』

今度は後藤バースの左胸からカプセルが出てきて胴体に装着され
巨大なキャノン砲となった。

後藤「さらに！」

後藤バースはタンクからセルメダルを取りだし二枚ずつ投入し、
回した。

『セルバースト！』

後藤バースはそれを繰り返していた。

『セルバースト！』

『セルバースト!』

『セルバースト!』

緋鞠「まだか!」

『セルバースト!』

後藤「よし、充電完了!皆、離れる!」

トリコ達は離れ、後藤バースはブレストキャノンから赤い防弾をヤミー達に浴びせた。ヤミー達はセルメダルになった。

漣司「よし、俺も片付けるか。」

俺はISキャリバーを取りだしISメモリを装填した。

『IS インフィニット・ストラトス !マキシマムドライ
ブ!』

漣司「はああああああっ!せいや!」

ISキャリバーから衝撃波が飛び、ドーパント達に当たり爆発した。

昼12時、食堂で皆と昼飯を食べた。これから、面白可笑しく過
ごすメンバーになるからそこが嬉しい。後藤や行人達は生徒、右
京さん達は先生になるそうだ。

例えどんな敵や困難が来ようとも俺達は必ず乗り越えていく。

その11 異世界の人達と二人目の仮面ライダーと集まった仲間達（後書き）

後何話か投稿したら オリ主、ジョーカー、主人公達の設定と入
学式の話を投稿します。

その12 バイクと命名と対の存在（前書き）

遅くなりました。では、漣司のバイクの話です。

その12 バイクと命名と対の存在

3月17日

この日、漣司のガレージに漣司、一夏、箒、後藤、ジロー、ハヤテ、遊星、ブルーノ、トオル、ミサキが集まっていた。

遊星「漣司、お前は廃材から、バイクを組み立てたのか？」

漣司「ああ、スクラップ山脈からパーツを拾って、それ以外は市街地で買って集めて組み立てたんだ。」

ジロー「すごいな。ほとんど完成している。」

漣司「ああ、だがD・ホイールとしては出来てないんだ。」

ブルーノ「僕で良ければ見せてほしい。」

トオル「俺も見させてくれ。」

漣司「ああ、いいぜ。」

ミサキ「ありがとう・・・。」

三時間ぐらいで俺のバイクはライディングデュエル専用のバイク、D・ホイールに出来た。

漣司「ありがとう。ようやくできた。」

一夏「何、仲間だから協力して当然だ。」

篤「漣司、このバイクの名前は決まっているのか？」

漣司「そーいや、組み立てるのに夢中で全然考えてなかったな。」

後藤「皆で考えるのはどうだ。」

遊星「そうだな、もうすぐ昼だし、食堂に来た連中で考えないか？」

ハヤテ「そうですね。」

漣司「それじゃ、食堂に行こうか。」

漣司達は食堂に着き、ほとんどの生徒がいたので、昼食を済ませると、ガレージに集めると後藤が皆に言った。

後藤「皆、さっき漣司のバイクが出来たのだが、名前が決まっていないんだ。だからいい名前があったら言ってほしい。」

漣司「ちなみに、バイクのメインカラーは黒で、サブは紫と蒼だ。」

りん「漣司のダンナ。」

漣司「どうしたりん？」

りん「ばいくて、なんだ？」

りんの質問に行人達以外の皆は驚いたが無理もない。

行人と梅梅と遠野以外の藍蘭島の住人は外の交流がなく、明治時代の考え方が根強く残っていたので、現代社会がわかっていないのだ。

ジロー「バイクで言うのは、・・・（割愛）・・・と言うのがバイクなんだ。」

ゆきの「そうなんだ。」

りん「こんな便利なもんがあるんだな。」

漣司「改めて聞くぞ。」

ヒナギク「はい！」

漣司「え？それじゃヒナギク。」

ヒナギクはネーミングセンスがないので漣司達は不安になった。

ヒナギク「ブラックカーてのはどう？」

漣司「はい、他には？」

ヒナギク「ちよつ、ちよつと！何初めから聞かなかったことにしているの！？」

漣司「一応聞いてみたけど、ダメだったから、聞かなかったことにしたんだ。」

一夏「花菱達から、雀の雛をチャイ坊と言ったり、タヌキをポコ吉と言ったり、カッコいい名前を付けると言ったらスーパーカーと言ったりと聞いたぞ。」

ヒナギク「うぐつ。」

漣司「他には？」

ゆきの「はい！ゆきのはれんれん号がいいと思うの。」

漣司「うーん他に？」

歩「西沢の西からとって、ウエスト・・・」

東宮「いや、東宮の東からとって、イースト・・・」

ナギ「おい、何でお前達の名字から漣司のバイク名を決めねばならんのだ。」

東宮「なんだと・・・」

鈴「ヘタレは黙ってなさい。」

ラウラ「そうだぞ、ヘタレ。」

ヘタレ「はい・・・て、またヘタレになっている!？」

静水久「ブラックバードてのはどう・・・なの？」

クロウ「いや、それ俺のと被っているし。」

雪路「じゃあ・・・」

漣司「あんたは黙ってる、ヅラ。」

ヅラ「はい・・・て、私も!？」

サニー「ビューティーブラックのはどうだ？」

漣司「サニーが思うほど美しくないぞ。」

第「そう言えば、漣司のISの姿はバイクの色と似ているな。」

一夏「そう言えばそうだな。」

漣司「あのISには蒼椿あおつばきと名付けているが。」

後藤「だったら、それと対になりそうな名にしたらどうだ？」

漣司「それだったら、いい名が思い付いた。」

トリコ「どんな名だ？」

漣司「黒桜だ。この名が思い付いたら何故かしっくりくるんだ。」

篤「黒桜かなんかいいな。」

花菱「ああ、ヒナよりか断然いい。」

ヒナギク「悪かったわね！でもいい名だわ。」

俺は黒桜に手を置いた。

漣司「黒桜、お前の名は黒桜だ。これからよろしく頼むぜ。」

その夜、漣司は黒桜のメンテナンスにガレージにいたら、東が来た。

東「ヤッホー、れつくん。」

漣司「東さん、お久しぶりですね。」

東「うん、お久しぶりだね。れつくんその子は黒桜で言うんだね。」

漣司「何故知っているんです？」

東「まあ、そこは東さんだからだよ。ブイブイ。」

漣司「流石は東さんて感じですね。」

東「まあそこは置いといて、れっくん、黒桜触らせてくれないかな？」

漣司「いいですよ。」

東はどこからかコードを複数取り出し黒桜に射し込んで空中投影のディスプレイとキーボードを出し、ディスプレイを見ながら、キーボードを叩いていた。

三分後、東はディスプレイとキーボードを閉じ、コードを抜いた。

漣司「何をしたんです？」

東「れっくんて蒼椿の対となるように黒桜と名付けたでしょ。本当に対の存在になるようにしただけだよ。じゃあねれっくん、バイバイ。」

そう言うつと東はガレージを後にした。

漣司が東の言ったことの意味が分かったのはもう少し先のお話。

その12 バイクと命名と対の存在（後書き）

次はどの話するか迷っています。

その13 恋する少女達と計画と追跡調査（前書き）

あの3人が漣司に惚れる話です。

後、束さんが漣司と篤の関係を確めるために動きます。

その13 恋する少女達と計画と追跡調査

3月18日

鈴side

私達の部屋に、箒以外と楯無さん、千桜、りん、みことが来ていた。

シャルロット「楯無さんも来てどうしたのですか？」

楯無「んー、お姉さんは興味本意で来たと言いたいけどこの子達と同じ理由よ。」

ラウラ「理由？」

千桜「桐札君のことについて聞きたいんだ。」

鈴「漣司のことで？」

りん「実はみこと以外のあたい、楯無さんと千桜とあたいは漣司のダンナに惚れちまつたんだ。」

りん達の顔が真っ赤だわ。まあ、漣司もカッコいいし、女の子には優しいからね。まさか楯無さんまで惚れるとはね。

セシリア「皆さんは漣司さんのどこに惚れたのですか？」

楯無「お姉さんはね、事務関係の仕事を漣司君に頼んだら、漣司君は嫌な顔をしてくれないで、心よく引き受けてくれたのよ。それに仕事で疲れている私に色々ともてなしてくれたことかな。」

千桜「私は、実はアニメとかが好きで皆に気持ち悪がられたら嫌で隠してたんだ。一昨日の夜に桐札君にバレてしまったけど、桐札君はそんな私を受け入れてくれたばかりか、マンガやアニメや特撮のDVDを貸してくれたことかな。」

りん「あたいはダンナに昨日の午後からバイクをやつを細かく教えてくれたんだ。そして、実際、後ろに乗らさしてくれてダンナの背中でこんなにも大きくて頼りになるんだと思つて。それにあたいが女の子らしい着物とか簪付けて見せたら綺麗だつて言ってくれたんだ。」

みこと「うちは行人以上にりん姉え様を骨抜きにした漣司に制裁を下すためや。」

みことのは置いとして、漣司もこんな美人でスタイルのいい人達に持てるとはね。

りん「それで鈴、漣司のダンナはどこ行つたんだ？」

シャルロット「漣司なら、箒と一緒に買い物に行つたよ。」

千桜「なんだって!？」

りん「もしかしてダンナと箒は付き合っているのか!？」

二人は泣きそうになるけど、私達は漣司と箒の関係を話した。

千桜「なるほど、二人は仮面ライダーWの主人公達のような関係か。」

りん「相棒の関係か。それでも羨ましい。」

鈴「まあ、実際私達から見たら付き合っているようにしか見えな
いけどね。」

楯無「でも、漣司君て色恋沙汰には興味がなく、誰とも付き合う
気はなかったよね。」

ラウラ「一夏みたいに唐変木じゃないから、女の子がそう言う目
で見えるのもすぐわかるし、ちゃんと断っている。」

千桜「確かに・・・。」

りん「ダンナはそういうのにも鋭いからな。」

鈴「ある意味、一夏やハヤテ、ジロー、遊星、トリコ、行人、優
人達よりも攻略は難しいかもね。」

そう、そう言う意味で漣司を攻略するのは難しい。鈍感じゃない
から、漣司は自分を好きになった子達にはちゃんと理由を言って断
っている。

それでも女の子達は諦めずに、漣司にアタックしている。
漣司に惚れた女の子達は漣司が自分達が漣司のことが好き（異性
として）なのを分かってくれているので、私達はそこが羨ましい。

簪「まあ、漣司が好きなことを気づいてくれただけでもいいと思うよ。」

りん「それもそうだな。」

千桜「でも、桐札君にはアピールはしたいな。」

セシリア「それでしたら、楯無さん、千桜さん、りんさんは明日から三日間、一人一日ずつ、漣司さんにアピールするのはどうでしょうか？」

楯無「それいいね。」

千桜「それだったら平等にアピールが出来る。」

りん「よし、それに決めた！」

鈴「順番はクジで決めようか。」

厳選なるクジの結果、一日目は千桜、二日目は楯無さん、三日目はりんとなった。

鈴「私達は束さんが作ってくれた追跡カメラで様子を見るから。」

りん「分かった。」

千桜「今、桐札君と簪はどうしているんだろう？」

セシリア「さあ、今さっき簪さんが出掛けたばかりでしたから。」

コンコン、誰かがノックをした。

鈴「はい、一夏どうしたの？」

来たのは一夏だった。

一夏「楯無さん達も一緒だったのか、ちようどよかった。」

鈴「ちようどよかった？」

一夏「ああ、束さんが全員モニタールームに来てほしいんだって。」

鈴「分かったわ。皆行きましょ。」

私達は一夏と一緒にモニタールームに行った。

一夏 side

俺達はモニタールームに着いた。このモニタールームは教室の約2倍の広さで、故に100人は余裕で入れるほどだ。それにしても束さん、何で俺達を集めたんだろう？

束「いつくん達も来たようだし、話を始めるよ。実は、今日れつくんと箒ちゃんが一緒に買い物に行ったことは知っているよね？」

俺達は頷く。

束「当人達は相棒という関係だけど、私達からすれば2人はできているようにしか見えない。」

俺達は頷く。

束「それでね、2人にそれぞれ追跡カメラを追わせているの。このモニターから映るから、2人は本当に相棒なのか、それとも2人は気付かないうちにできているのか皆で見て結論を出そうと決めたんだ。」

千桜「なるほど、一理あるな。」

りん「確かに、ダンナも箒も魅力あるし、2人とも異性として意識しているかも。」

楯無「まあ、2人とも恋愛対象にならないかも知れないけど、万が一ということもあるし。」

この3人は、やけに漣司と箒の関係を意識しているなあ。何でだろっ？

鈴「今のアンタじゃ一生分からないわよ。」

何で俺の考えていることが分かるのかね。

東「まあまあいっくん、そこは置いといて、早速、繋げるよ」

東さんはモニターのスイッチを押した。

漣司はどうやって女の子をエスコートするのだろうか？
少し興味が出てきた。

鈴「まあ、アンタよりかはマシでしょ。」

セシリア「そうですね。」

シャルロット「そうですね。」

ラウラ「そうだな。」

だから、何で俺の考えていることが（以下同文）。

その13 恋する少女達と計画と追跡調査（後書き）

あの3人にした理由は個人的に気に入っているからです。漣司とのCPにするかどうかも未定です。

箒を相棒にしたのは、漣司にも相棒的な存在が欲しかったのと、自分はファース党で、箒が一夏のことを好きという設定を崩したくないという2つの理由です。

後、これを読まれている方は、アドバイス（特に文章）をよろしくお願いします。

その14 幕の悩みと漣司の存在と2人のデッキ（前書き）

もう仕事とかで週一しか出来ないのもう少し早く出来る努力をします。

その14 箒の悩みと漣司の存在と2人のデッキ

午前9時半 一夏side

束さんが、モニターのスイッチを押すと、駅前の大きな時計台の下に漣司の姿が映っていた。

腕時計を見たり、辺りを見回りにいかにも待ち合わせしている雰囲気を見せていた。

ジロー「待ち合わせしているようだな。」

鈴「確か、箒は10時に待ち合わせしているて聞いたわ。」

小松「今9時半ですから、」

キョーコ「漣司は30分前からまっているの!？」

シャルロット「そう言えば、箒が初めて漣司と買い物行くとき、箒は一夏以外の男の子と初めて買い物だったから、緊張して30分早く来て待っていたそうだよ。」

ラウラ「おそらく、漣司は今日も箒が30分早く来ると自分で分もそうしたのだろうな。」

行人「漣司は相手に合わせて行動ができるのか。」

ハヤテ「本当に、間が悪い、僕とは違いますよ……。」

ハヤテは落ち込みながら言う。

虎鉄「綾崎、気にするな。それで皆に嫌われても、俺がいるじゃないか！」

ハヤテ「変態は黙つとけ——！！！」

ドカツ！バキツ！ボコ！バツコーン！！

虎鉄「ギアアアアアアアアアア！」

ハヤテは抱き付こうとした虎鉄をフルボッコにして虎鉄をぶつ飛ばした。

それにしても、ハヤテにあんだけやられているのに虎鉄は懲りないなあ。

「あ、箒が来たようだよ。」

ずが言つと箒が来たようだ。箒は珍しく、オシヤレをしていた。うんうん、箒も漣司の相棒になってから、変わったから良かったぜ。

「すまない漣司、待たせたか？」

漣司「いや、俺も5分くらい前に来たばかりだし、大丈夫だ。それと可愛いな。似合っているぜ。」

『あ、ありがとう……。』

箒の顔が赤い。

漣司『まあ、この言葉は一夏に言っただけだったんじゃないか？』

箒『まあ、そうだな。』

箒、俺が言っても嬉しいのか。そんなに褒められたいのかー。

漣司『さて、まずは、箒のデッキを作るためにカードショップでカードを買いに行くか。』

箒『ああ、よろしく頼む。』

漣司と箒は歩き出した。

咲夜「それにしても、漣司兄ちゃんも箒姉ちゃんも本当に付き合い合っているようにしか見えないほど仲ええなあ。」

ラウラ「確かに、2人のコンビネーションは最高だ。」

遊星「それに漣司は一夏、ハヤテ、ジロー、のD・ホイール以外に箒の分まで組み立てている。」

ヒナギク「箒も漣司君のために栄養満点のお弁当を作っているし。」

緑谷「僕らのために練習メニューを2人で考えているし。」

ゼブラ「あの2人の心音や脈拍など聴いたら、上っ面ではない、互いが心の底から信頼しあっているのが分かるぜ。」

サニー「あの2人は最高に美しすぎる……。」

千桜「いいなあ、箒は。」

楯無「漣司君と一緒に買い物ができる。」

りん「今すぐにも、変わってほしい……。」

東「まあまあ3人共、れっくんと箒ちゃんは付き合っているわけではないから、焦らずゆっくりやっていけばいいんだよ。」

千桜 楯無 りん「……はい……。」

3人は少し元気になって頷いた。

それにしても、漣司は3人も好意を持ってくれているのに、箒と一緒に買い物なんて漣司で意外と鈍いのか？

鈴「いや、漣司は一夏とは違うから。」

セシリア「そうですね。漣司さんは一夏さんとは違い、女性の気持ちが分かる殿方ですね。」

シャルロット「一夏、乙女の気持ちが分からない男は馬に蹴られて死ぬといいよ。」

ラウラ「人の好意に気が付かない男は犬にも劣るぞ。」

なーんで俺の考えていることはバレやすいのかね。それに言い方があるだろう、ちょっと傷つくぜ。

ココ「そこまでだよ。漣司君と箒ちゃんが話はじめたよ。」

ココに言われて俺達はモニターを見た。

漣司と箒は公園のベンチに座っていた。2人以外には居ないようだ。箒は顔が暗くなりながら喋りだした。

箒「やはり駄目だな私。」

漣司「紅椿を持つことにか？」

箒「ああ、私は力を手にしたら、思いっきり使いたくなってしまって、暴走して自分自身を抑えることが出来なくなってしまうんだ。この前の船での戦闘でも、私だけは力のない犯人を見殺しにしましまいそうだった。本当に駄目だな私は・・・どうしても力を手にしたら力がない人のことが見えなくなっている・・・。」

箒は両手でスカートを握り、涙目になりながら言った。

漣司「箒・・・。」

箒漣「漣司・・・？ふえっ！？」

箒は驚きながら腑抜けた声をあげた。何故なら、漣司は箒の頭を撫でたからだ。

箒「れっ、漣司！？」

漣司「箒、力を手にしたら思いっきり使いたくなくなってしまふの。力を持ってない人のことが見えなくなってしまう、自分が持っている力を捨てたい、逃げたいという気持ちは分かんなくはない。俺も

ジョーカーの力を正しいことに使えているか今でも悩んでいる。」

箒『漣司……』

漣司『だがな箒。だからと言って自分の力から逃げては駄目だ。』

漣司は真剣な目で箒を見た。

漣司『前にも言ったが力を持つ者には使命がある。先生は言っていた。力はその力を持つ者にしか使えない。だから力を持つ者はその力から逃げずに正しいことに使えるように努力をして、責任を持ち、先生が言った2つの使命を守ることだ。てな。紅椿は箒、お前の力だ。』

箒『ああ……。』

漣司『その紅椿を正しいことに使えるのは箒しかいないんだ。だから紅椿から逃げずに努力をして、責任を持ち、2つの使命を守るんだ。』

箒『漣司……私は紅椿を正しいことに使えるのだろうか……？』

漣司『その為だったら、一夏や千冬さん、束さんやセシリア達を頼れ。皆箒の仲間だし、そして何より……』

漣司は一息ついて言った。

漣司『相棒の俺がいるだろ？1人で抱え込まず、俺達を頼れ。お前は俺達の大切な仲間なんだからな。』

箒『漣司・・・うつ・・・うつ・・・』

箒の目から涙が溢れだした。

箒『うわああああああああん！！！』

箒は泣きながら、漣司に抱き付いた。漣司は抱き締め、右手で箒の頭を撫でた。

シャルロット「箒、悩んでいたんだ・・・。自分が紅椿をもっていいのかって。」

ヒナギク「しかも、それを自分の心が壊れそうなくらいに真剣に悩んでいたのね・・・。」

ジャック「だが、箒には俺達がいって何より、漣司がいる。」

まち「漣司様と箒は恋愛ではない、別の信頼関係で結ばれているわ。」

右京「それは僕と亀山君と神戸君同じ関係かもしれませんね。」

亀山「そうですね、右京さん。」

神戸「僕達と同じ関係を持った子達に出会えたのは嬉しいですね。」

行人「相棒か・・・なんか僕もそういう人が欲しくなったな。」

優人「だったら僕と相棒になってほしい。」

行人「いいの？ありがとう。」

トリコ「小松、あいつら俺達にも劣らねえコンビだな。」

小松「そうですね。トリコさん。」

キョーコ「何か、2人を見ていると私とジローも家族以上の信頼関係なのかもね。」

ジロー「ん？キョーコ何か言ったか？」

キョーコ「べーつに。」

ナギ「私とハヤテも主従以上の信頼関係かもしれんな。」

ハヤテ「そうですね。お嬢様。」

遊星「俺達が仲間いう絆で結ばれたのは漣司のおかげだな。」

後藤「ああ、漣司は箒ちゃんだけではなく、俺達にはなくてはならない存在になったな。」

一夏「ああ、俺達は漣司と共に生きて様々な敵や困難を乗り越えていこうぜ！」

『おーーーーー！！！！』

漣司、俺達を会わせてくれて本当にありがとう。

一夏 side out

漣司 side

5分くらい経って箒は泣き止んだ。

箒「漣司すまない。涙で服を濡らしてしまつて。」

漣司「気にするな。お前の心が楽になったのなら、安いもんだ。」

箒「そうか、ありがとう。」

漣司「どういたしまして。さて行こうか。」

箒「ああ。」

俺達はカードショップに行った。

箒「箒はどの様なデッキにしたいんだ?」

箒「私に合っているのがいい。」

漣司「だったらこれはどうだ?」

箒「真六武衆?」

漣司「ああ、箒は剣道やっているしサムライガール見たいに見えるから、似合っているかなと思ってな。」

箒「そうか、漣司が言うのならこれにしよう。」

俺達はシヨップに置いてある机で椅子に座り、箒の真六武衆のデッキを作った。

漣司「出来たな。」

箒「漣司のおかげだ。ん？漣司、デッキを作っているのか？」

漣司「ああ、なぜかこのデッキを作らなければいけないような気がしてな。」

箒「これは・・・ガスタ？」

漣司「ああ、作ったデッキはライディングデュエル用にしたり、スタンディングデュエル用にしようと思う。」

すると突然2枚のカードが輝きだした。

箒「漣司、どうしたのだ？」

どうやら箒は輝きが見えなかったらしい。

俺は輝きだした2枚のカードを見た。

『風霊使いウィン』

『ガスタの巫女 ウィンダ』

何故この2枚が輝きだしたのだろうか？今は分からない。

漣司「箒、行こうぜ。」

箒「あ、ああ。」

俺達は近くのラーメン屋でラーメンを食べ、近くのホームセンタ
ーで必要な物を買い、午後3時に寮に帰った。

帰ったとたん、楯無、千桜、りんは箒を羨ましそうに見ていた。
まさかあの3人は……。

今考えてもしようがないか。俺は皆で夕食を食べ、それぞれの部
屋に入っていた。

俺はガスタのデッキを調節してから寝た。

その14 幕の悩みと漣司の存在と2人のデッキ（後書き）

次は漣司が久々に神と会いある頼み事を任されます。

その15 告白と計画と頼みごと（前書き）

ISのコレクションフィギュアを買いいきなり第3弾が出ました。もう
テンション上がってます。

その15 告白と計画と頼みごと

3月19日 午前2時

漣司 side

今午前2時か。俺は急に目が覚めてしまった。俺は一夏達を起こさないように動き、冷蔵庫に入れてある水が入ったペットボトルを取り出し水を飲んだ。やはり数時間前に話されたことがあってなかなか寝付くことが出来ない。

今から6時間前 3月18日 午後8時

俺達の部屋は俺と同じ部屋で住んでいる一夏、ハヤテ、後藤、行人、優人の6人と箒、ジロー、遊星、トリコ、千桜、楯無、りんに千冬さんの8人、合わせて14人いた。

箒「漣司、実は千桜、楯無さん、りんが漣司に言っておきたいことがあるそうだ。」

漣司「ん？どうしたんだ3人共。」

千桜「漣司君、あなたに本当の私を見てくれた時から好きでした。結婚を前提にお付き合いしてください。」

楯無「漣司君、仕事で疲れている私を癒してくれて、さらに私が

更識の女なのに関係無く普通に私や簪ちゃんと接してくれたことに
お姉さん、心を奪われたわ。お姉さんの夫になることを前提にお付
き合いしてください。」

りん「漣司のダンナ、男口調で怪力な男女なあたいをダンナは女
の子として見てくれて、あたいの洒落を笑いもせず綺麗だと笑顔
で言ってくれたダンナに惚れたんだ。あたいをお嫁さんにする前提
にお付き合いしてください。」

はい？

漣司「簡単に言うとな俺を異性として好きで、付き合ってください
ってことか？」

俺は勘違いにならないように、確認の為に質問した。

千桜「はい！」

楯無「うん！」

りん「ああ！」

どうやらそれで合っているみたいだ。

元いた世界でのことを反省して、女の子を刺激させないように、
一定の距離をとって接して（筈は相棒で互いに恋愛感情ないから普
通に接していた）いたのに、まさか3人も好意を寄せられていると
は、しかもあの楯無が俺に好意を寄せているとは思ひもなかった。
楯無の理想結構高そうなんだが、俺が理想に合っているのか、理想
と現実のギャップを感じないのかどちらかは分からない。

とにかく、3人共いい娘なんだが、俺は誰とも付き合う気はない。

傷付くかもしれないけど、はつきりと断った方がいいな。

漣司「3人の気持ちは嬉しいが、俺は……。」

千桜「わかつている。漣司君が誰とも付き合う気がなく断り続けていることを。」

楯無「でも、一回の告白で失敗したからって諦めるお姉さん達だと思っただけだ。」

りん「ダンナは何も思わなくていい。あたい達が勝手に好意を寄せているだけだから。」

・・・恋する女の子は強いと先生は言ってたが、まさにこの事だな。一夏やハヤテに自覚しろと言ったが、これじゃ2人の事が言えなくなっただけだ。

一夏「とりあえず、漣司、19日は千桜、20日は楯無さん、21日はりんがそれぞれお前にアピールすることになったんだ。」

ジロー「俺達はその様子を追跡カメラで見ることにしたのだ。」

漣司「もしかして、今日幕と買い物に行ったときの生き物ではない視線を感じるのはそのカメラということか。」

優人「気付いてたの?」

漣司「俺だけでなく、幕も気付いていたぞ。」

幕「ああ、ただ私達を見てただけで漣司と一緒に無視しただけ

だ。」

漣司「さて、明日生徒会3人娘を黙らせてくるか、放つと思ったら
箸が弄られそうだし。」

ハヤテ「有り得ますね……。」

千冬「まあ、私がいる限り私がさせないがな。」

千冬さんは凄い、この人に逆らえる人がいたら逆に見てみたい。

遊星「漣司、3人とどのように過ごすか予定組む方がいいじゃないか？」

漣司「確かに、組んだ方がいいな。3人共何か予定あるか。」

千桜「漣司君、私は午前中、買い物に出掛けないか？」

漣司「もしかしてアニメDVDが発売するのか？」

千桜「ああ、それだけではなく仮面ライダーも発売されているんだ。午後からそれらを鑑賞したりゲームしたりして過ごそう。」

漣司「分かったぜ。」

楯無「漣司君、お姉さんはね午前中はいつも通り、生徒会の仕事を手伝ってほしいのよ。3人娘と黄村君以外のメンバーは総動員で動いているけど、漣司君がいないと半分ぐらいしか出来ないほどの量なのよ。」

漣司「分かった。その日は必ずその4人は来させるようにはする。」

楯無「ありがとう。午後はお姉さんの家に招待したいのよ。」

漣司「更識家の家か？」

楯無「そう、いつも、手伝ってくれている漣司君におもてなしをしたいの。」

漣司「なるほど、分かったぜ。」

りん「漣司のダンナ、あたいは朝はバイクの稽古つけてほしいんだ。代わりにあたいが大工のことを教えるから……。」

漣司「いいぜ。」

りん「そっか、じゃあ昼からあたいの部屋に来てほしいんだ。それで、新しい服が手に入ったからそれを見てほしいんだ。」

漣司「分かったぜ。」

これで計画は決まった。

トリコ「それにしても、女子の比率が多いな。これじゃ1人の男子に複数の女子が好意を寄せられることなりそうだな。」

行人「もし、1人の男が複数の女の子に好意を寄せられてその男が誰も選ばなかったら……。」

後藤「間違いなく、せの男は共有財産とされるだろうな．．．。」

『．．．．．』

この部屋は沈黙に支配された。

漣司「まあ、ハーレム目指している以外は大丈夫だろう．．．多分。」

一夏「でも、本人はその気はなくても第三者から見たら『見ろ、これが俺のハーレムだぜ！』としか見えないよな．．．。」

優人「俺達はそういう節操なしじゃないと信じたい。」

遊星「兎に角、好きな異性は1人に決めよう。」

漣司「ああ．．．。」

一夏「そうだな．．．。」

ハヤテ「そうですね．．．。」

ジロー「色々と問題があるしな．．．。」

トリコ「いくらオレでも体が持たない．．．。」

行人「僕なんか鼻血の大量出血で死んじゃうよ……。」

優人「緋鞠や凜子に凄い怒れそうだからな……。」

こうして俺達は共有財産にされないように10時まで話し合った。

それで冒頭に戻る。

俺はちゃんと、3人の中から1人を選ぶことが出来るのだろうか？
例え、選ぶことが出来たとしてもその娘を幸せに出来るのだろうか？

それに3人だけじゃなく、今まで告白してきた娘達もいるし、また俺に好意を寄せる娘がいなくても限らない。

選ばなかったら、俺は確実に共有財産にされるのだろう。それだけは色々大変だから絶対に避けたい。

そう考えていると、後ろから声がした。

レイ「おーい…… 漣司君……。」

漣司「レイか久しぶりだな。」

振り向くといいたのは俺をこの世界に転生させたレイだった。

レイ「漣司君覚えてくれたんだ…… 嬉しいよ……。」

漣司「まあ、あんなことがあったから、忘れなくても忘れないよ。それより何かあったのか？」

レイ「なぜ、そう思ったの？」

漣司「いくら自分のせいでもこの世界に転生した俺を見に来るほど暇ではないはずだ。何かあって俺のところに来たんじゃないか？」

レイ「流石だね」　その通りだよ漣司君　実は頼みがあるの。」

話によるとカードの精霊がいて、精霊を使って悪いことをしているアホがこの世界にいるらしい。そのアホ達をこらしめてほしいとのことだ。

漣司「ああ、引き受けるよ。」

レイ「ありがとね」　後、漣司君ジョーカーメモリ以外のメモリを出してくれる？」

俺は言われたようにメモリを出した。

レイ「漣司君このメモリの力関係を教えてあげるね」

レイがこれから話したことはまた俺に覚悟と力をくれた。

その15 告白と計画と頼みごと（後書き）

取り敢えず続きます。

その16 メモリと神の説教と3枚のカード（前書き）

今回の話で12本のメモリがわかります。

その16 メモリと神の説教と3枚のカード

俺は言われたようにメモリを出した。それにしても、結構メモリがあるな。ジョーカーに アクア、サイクロン、ダークネス、フレイルム、グランド、アイス、メタル、ライト、スカイ、サンダー、ボイス、ウェーブの13本だ。Wの約2倍だぞ。

レイ「今から12本のメモリの力関係を教えるね〜。まずはどのメモリも強弱関係なくジョーカーとの適合率は100%だから安心してね〜 でも一度使うと漣司君の体力が非常に消耗してしまうから気を付けてね。」

漣司「何回か使う内に慣れることは出来るか？」

レイ「出来るけど、あんまりして欲しくないな。」

漣司「分かった、分かった、体力をつけるから泣きそうな顔はやめてくれ。」

レイは本当に泣きそうだった。それほど俺のことを本気で心配してくれたからだ。

レイ「ありがとう。メモリの能力を教えるね。まずは風のサイクロンメモリは超高速の移動が可能で、スピードと2本の青竜刀を武器に敵を倒せるよ〜」

漣司「なるほど、カブトのクロックアップと同じようなもんか。」

レイ「次に雷のサンダーメモリ、付属の近接ブレードとマシンガ

ンに雷の力宿らせて広範囲の攻撃と貫通能力で大量の敵を倒せるし、学園の1年分を賄える電気を供給することが出来るんだよ〜」

漣司「なるほど、戦闘以外でも役に立ちそうだ。」

レイ「そうだね〜」 次に金属のメタルメモリは最高の攻撃力の三ツ又槍と最高の防御力の盾を持ち、特殊な電磁波を出して、地中の鉱物を金属にして仲間達の支援が出来るんだよ〜」 ただし、全フォーム中スピードが最弱だけだね。」

漣司「スピードを落として余りある能力があるのか。」

レイ「次に地のグラウンドメモリ、これは全フォーム中パワーと姿勢制御に特化して両腕に付いているガントレットを武器に、さらに周囲の重力をコントロールすることが出来るんだよ〜」

漣司「重力操作って、えげつないな・・・。」

レイ「次は波動のウェーブメモリは波動の力を使って自分も仲間の能力を強化する事が出来るんだよ〜」 因みに武器は二刀一対のガンブレードだよ〜」

漣司「完全にサポート系のメモリか。」

レイ「音のボイスメモリは聴覚に優れていて、武器は鈴が付いた錫杖で攻撃も防御も支援も音を使って闘うことが出来るんだよ〜」

「

漣司「ゼブラとほぼ同じかあ。」

レイ「空のスカイメモリはウイングスラスタに付いている20機のピットとドリルランスで闘うことが出来て、さらに超音速の飛行が可能だよ」

漣司「ランスはともかく、ピットは使いこなせるかな。」

レイ「次に氷のアイスメモリは弓矢を使った遠距離の戦い方で、冷却能力と低温維持能力に優れているよ」。さらに周囲の水分を凍らせて、氷を使う戦い方が出来るんだよ」

漣司「みちるに教えてもらおうかな。」

レイ「次に光のライトメモリはアックスを使った戦い方で、腕力、広範囲攻撃、高温耐性に優れていて、固有能力は湖の水を一瞬で蒸発させる高熱線を発光することが出来るんだよ」

漣司「これもえげつないな。」

レイ「次に闇のダークネスメモリは視覚、視野、瞬発力に優れていて、武器は鎌で、あらゆる攻撃や防御を拒絶することが出来るんだよ」

漣司「使い方によってはある意味最強だな。」

レイ「次に水のアクアメモリは潜水能力、感知能力に優れていて、手甲型の剣と水の盾、固有能力の水を操ることが出来て、柔軟な戦い方が出来るんだよ」

漣司「これって、楯無のIS、ミステリアス・レイディみたいな。」

レイ「うふふ 最後に・・・炎のフレイムメモリは、視覚、キック力、飛行能力、飛行補助能力、空間認識能力に優れていて、武器は他のメモリの力を引き出せる手甲型のフレイムスピナーだよ」
固有能力はあらゆる攻撃を吸収し、炎に変換させる能力だよ」
12本のメモリの中で全体的に戦闘能力が高いね」

漣司「多分、ヒートより強いんだろうな。」

レイ「これで説明終わり」

レイは両手を挙げて体を伸ばしていた。

レイ「まあ、入学までは使うことが出来ないと思うけど、仲間達と相棒の箒ちゃんの為に絶対に無理はしないだね。」

漣司「ああ、努力はする。」

レイ「そこは、約束するぜとか言って欲しいな」

漣司「仲間達の為には無理をすることがある。」

レイ「でも、仲間達は漣司君に無理することを望んでないと思うけど。」

漣司「……………」

レイの正論に俺は何も言えなくなった。

レイ「漣司君、君が仲間達のことを大切に思っているように、仲

間達も漣司君を大切に思っていることを忘れてたらダメだよ」

漣司「わかった、約束する。」

レイ「うんうん 素直でよろしい いい子いい子」

そう言っただけ俺の頭を撫でた。

レイ「じゃあまたね〜」

漣司「おう、仕事頑張れよ。」

レイ「うん、ありがとう それじゃ・・・って、あー！忘れる所だった。」

帰ろうとしたレイはあわててこっちに来た。

漣司「どうした？」

レイ「あのね、漣司君、ナンバーズというカードを集めて欲しいの。」

漣司「ナンバーズ？」

レイ「うん、ナンバーズは持った人の欲望や負の感情を増幅させて、暴走させるカードなの。」

漣司「わかった、引き受けるぜ。」

レイ「ありがとう。この本で回収したナンバーズを入れてね。後、

私の手元にあった2枚のナンバーズとこの子を託すから頑張っ
てね。

「

レイはちょうど100ページある本と3枚のカードを俺に渡した。

『No.39 希望皇ホープ』

『No.17 リバイス・ドラゴン』

『銀河眼の光子竜』

レイ「それじゃ頑張っ
てね〜」

レイは光となって消えた。

うーん、今1時間くらいたったか。寝よう・・・ZZZ・・・。

その16 メモリと神の説教と3枚のカード（後書き）

次からは千桜、楯無、りんの順番で漣司にアピール作戦を実行します。

その17 嚴重注意と疑問と2人の死の危機（前書き）

今回は少しですけど早めに投稿できました。

千桜、楯無、りんそれぞれ2話ぐらいに分ける予定です。

その17 嚴重注意と疑問と2人の死の危機

3月19日 午前8時 学園地区 ???

ブルー「よし、これで、編集出来たな。」

ブラック「漣太君と箒の買い物記録がな。」

レッド「ふう、泣きながら漣太君に抱き付く箒ちゃんは可愛いねえ〜。」

イエロー「これは高く売れるぞ。」

ヘタレ「これで、いつも僕達をしごいている漣司や篠ノ之の弄りのネタが出来たな。」

ブルー「儲けるし弄りのネタが出来たし・・・。」

『おいしい話ですな〜。』

千冬「ほう・・・?」

ビクッ!!??

千冬「その話・・・。」

ギギギギッ 5人が後ろに振り向く音

千冬「ぜひ、私にも聞かせて欲しいものだ・・・。」

そこには鬼神のオーラを纏った千冬がいた。

5人『ギャアアアアアアアアアアアアアア!!?』

しばらくの間、この5人を見た者は誰もいない。

同時刻 市街地区 駅前

漣司 side

千桜「漣司君、待たせたな。」

漣司「いや、俺も5分早く来たただけだ。」

アピール1日目は千桜との買い物だ。

千桜とは同じくアニメや特撮好きなのが意気投合してたまに一緒

に鑑賞していたりしていたが、まさかそれで俺に好意を寄せるとは。千桜は俺にバレて以来は自信を持ったのか、ナギだけではなく、ヒーロー物が好きな、簪や龍亞とも話をするようになった。

漣司「それじゃ行くか。」

千桜「うん……。」

千桜は右手を差し出した。

千桜「漣司君、手を繋いでくれるか？」

漣司「あ、ああ。」

俺は吃りながらも、千桜の手を繋いだ。

千桜「ありがとう。」

漣司「どういたしまして。」

俺と千桜は大きいお友達御用達のア　メイトと言うところに行つた。

元の世界でもあったのだが自分は特撮全般というより仮面ライダージョーカー、W、ディケイド、オーズがカッコよく憧れていただけで、オタクみたいに熱狂的にアニメや特撮が好きではない。

千桜「漣司君は入るのは初めてなのか？」

漣司「まあな。機械弄りそのものが俺達の青春みたいなもんだつたしな。」

千桜「意外だな。漣司君はケンカとかばかりかと思っていたけど……。」

漣司「あはは……。まあそう思われるのも無理ないか。確かに中学、高校ケンカしていたけど、週に1回あるかないかだし、俺自身がケンカ売ってんじゃなく、売られたケンカは買うという感じでしていたんだ。」

千桜「ごめん、漣司君をそういうふうに見ていたんだ。」

漣司「気にすんな、それよりも早く入ろう。欲しいものが売り切れる前に。」

千桜「うん、そうだな。」

漣司 side out

同時刻 学園地区 九路洲学園 モニタールーム ハヤテ side

ヒナギク「ハル子、冷静を装っていても、緊張しているのが分かるわ。」

咲夜「ハルさんも、漣司兄ちゃんの前では骨抜き状態だな。」

愛歌「本当ね、咲夜さん。」

愛歌さんが暗い笑みで弱点帳という学習帳で何か書いています・
・？。

ナギ「千桜はよく鍛えられた腐女子だからな。漣司に恋心を持ったことで、青春しているのだ。」

歩「ナギちゃん、腐女子は言い過ぎだと思うけど・・・？。でも千桜さん生き生きしているんじゃないかな。」

弾「漣司もまんざらではないようだな。」

数馬「けど、箒とは違う雰囲気だよな。」

凜子「だって、漣司と箒は恋愛感情がないから、互いが遠慮しないで信頼関係が築いていけるじゃない。」

伊澄「千桜さんだけではなく、楯無さん、りんさんは漣司様に好意を寄せているから少しでもアピールしようと、箒さんとは違う雰囲気になるのはしょうがないわ。」

セシリア「漣司さんはそれも承知の上で、3人のお誘いを了承したのでしょうか。」

皆さん、漣司君と千桜さんの買い物に興味を持ち、様々な意見を出しあっています。

それにしても漣司君は最終的には誰を選ぶのでしょうか？

ただ分かっているのは箒さん（名前でいいと言われた）は選ばない。漣司君と箒さんは友情や恋愛感情を越えた相棒という絆で結ば

れていますから、やはり千桜さん、楯無さん、りんさんの中から選ぶのでしょうか？

ハヤテ「結局、漣司君は誰を選ぶのでしょうか？」

トリコ「さあ？こればかりは漣司でないとわかんねーな。」

クロウ「3人の内の誰かもしれねーし。」

ジャック「他の女かもしれんしな。」

くえす「確かに3人だけではありませんからね。」

優人「第の次に親しい女^{ひと}で、織斑先生と束さんだっけ？」

梅梅「ひゃあああ、漣司サンと織斑先生が生徒と教師の禁断の……」

遠野「こらこら、梅梅、何であんたはすぐそーいう方向に話を持つていくのよ？」

小松「でも案外似合っているのかもしれないよ？」

皆さん色々と意見を出しあっています。でも最終的に漣司君の気持ち次第ですから僕達は見守りましょう……ってあれ？

ハヤテ「そう言えば、花菱さん、瀬川さん、朝風さんはどこ行つたのでしょうか。」

ジロー「そう言えば、黄村も朝から見てないな。」

鈴「ヘタ・・・あず・・・東宮もないわね。」

シャルロット「鈴、今ヘタレと言いかけて、名前忘れそうになったよね・・・?。」

今の5人は興味を持ちそうなのにどうしたのでしょうか?

千冬「その馬鹿者共なら・・・。」

そう言いながら、織斑先生が入ってきました。

千冬「ちよつと前においしい話をしていたので、私もせのおいしい話とやらを聞かせてもらった。」

セシリア「どんな話ですか?」

千冬「昨日の、桐札と篠ノ之の買い物映像をくだらんことに使おうとしたらしい。そこで私も混ぜてもらった。」

行人「それで、その5人は?」

千冬「しばらく見ないと思うぞ?」

織斑先生は何をしたのでしょうか・・・正直不安です・・・?。

千冬「心配するな綾崎。少し厳重注意をただけだ。」

何で心の声が聞こえるのですか!?

千冬「少し分かりやすかったただけだ。」

ハヤテ「はぁ……。」「

千冬「それから梅梅。」「

梅梅「ハ、ハイ!」「

千冬「教師が自分の教え子に惚れるわけがないだろ。馬鹿者。」「

梅梅「ひゃあああ、ごめんなサイ〜〜!。」「

千冬「分かればいい。」「

鈴「あれ？織斑先生で思い出したけど、一夏は?」「

ラウラ「そう言えば、箒も居ないな。」「

ああ、皆さんようやく気付いてしまったようですね。

シャルロット「後藤さんはなにか知らないの?」「

後藤「実は昨日の夜話し合いが終わった後の話だが、漣司は一夏と箒ちゃんに映画のチケットを渡したようだけど。」「

遊星「漣司は箒が一夏と一緒にいるために色々協力しているんだ。」「

ラウラ「ほう、漣司が私の嫁に、浮気を協力しているのか?」「

シャルロット「漣司、いくら相棒だからって不公平じゃないかな？」

鈴「よし！一夏と漣司、共に殺そう！」

セシリア「ふふっ、うふふふふふふふふふ。」

4人共恐いです・・・？。一夏君、漣司君、殺されないように祈ってます？。

ハヤテ side out

その17 嚴重注意と疑問と2人の死の危機（後書き）

次は一夏と筈の所も書く予定です。

その18 Wデートと少女達の怒りとメイドさん(前書き)

サブタイトルについての感想をお願いします。

その18 Wデートと少女達の怒りとメイドさん

同日 午後1時 市街地区 千桜side

漣司（ゾクッ!？）

漣司君は一瞬身震いして、辺りを見回り出した。

千桜「漣司君、どうかしたのか？」

漣司「い、いや別に（何だ、この悪寒と俺に対しての殺気を感じたが・・・、もしかして一夏と箒をデートさせたことがセシリア達にバレたのか!?!）。」

千桜「そう。体調悪かったら、言ってくれ。」

漣司「ああ、ありがとう。」

漣司君は笑顔で返事してくれた。

漣司君は私なんかの女の子でも優しく話しかけてくれる。だから私も漣司君に惚れてしまった女の子達の1人になってしまったのだ。

漣司「千桜、そろそろ帰るか、それで一緒に見ようぜ。」

千桜「そうだな、2人きりで見ような。」

漣司「ああ、」

私と漣司君は学園に帰ろうとしたら映画館から織斑君と篤が出てきた。

千桜side out

同時刻 市街地区 映画館 篤side

一夏（ゾクッ!？）

一夏が身震いして、辺りを見回り出した。

篤「一夏？どうしたのだ？」

一夏「いや、何でもねえ（何だこの悪寒と俺に対しての殺気を感じたが・・・気のせいかな?）。」

篤「そうか、体調が悪かったら言ってくれ。」

一夏「ありがとう。」

一夏はお礼を言ってくれた。

漣司には感謝しないとな。昨日の夜、話し合いが終わった後漣司

が私と一夏に映画のチケットを渡してくれたのだ。漣司は相棒である私に一夏にアピール出来るチャンスを与えたのだ。今、見ているのはコメディ系の映画だ。いきなり恋愛系は一夏が断ると思った漣司が私と一緒に見に行ってくれるようにと漣司なりの配慮だった。

一夏「それにしてもこの映画面白いよな。」

箒「ああ、私はあまりこういうは見ないが、たまに見るのはいいな。」

一夏「箒、楽しめたか？」

箒「ああ、漣司には礼を言わないとな。」

一夏「・・・箒、少し話が変わるのだが・・・。」

一夏は顔を近づいてきた。

箒「どっ、どうした一夏？」

私は慌ててしまった。

一夏「タッグの模擬戦が終わった後の昼飯の時、漣司と箒が相棒になった時の話をしたよな。」

箒「ああ、そうだがどうしたのだ？」

一夏「箒は俺と漣司に対して特別な感情を持っていると言ったな。漣司は相棒という関係になった。じゃあ、箒は俺とはどういう関係になりたいんだ？」

箒「えっ、えっと、それは……。」

一夏「俺とはただの幼なじみの関係ではダメなのか？」

あの唐変木の一夏がこんなことを言うなんて思いもしなかった。

一夏とはただの幼なじみの関係じゃなく恋人関係になりたい。でも、一夏はどれだけアピールやデートに誘っても勘違いをして全然効果がなかった。

箒「いつ、一夏、あまり顔を近づけるな、はっ、恥ずかしい……。」

一夏「あっ、悪い。」

一夏は謝りながら、顔を離してくれた。

箒「一夏、まだ心の整理がついてないから、しばらく時間をくれないか？」

一夏「あ、ああ、いいぜ。」

話が終わった直後に映画が終わった。

一夏「箒、映画が終わったから出ようか。」

箒「ああ、そうだな。」

私達は映画館から出たら、漣司と千桜がいた。

箒side out

同時刻 市街地区 映画館前 漣司side

漣司「一夏、箒どうだった？楽しめたか？」

一夏 箒「あ、ああ……。」

一夏達に会ったから声を掛けたのだが、2人共何か雰囲気微妙だな。一夏は何かモヤモヤしているみたいだし、箒は顔真っ赤だし。取り敢えず千桜に箒を任せて俺は一夏を連れて、事情を聞いた。

一夏から映画館の話聞いた。

漣司「なるほど（一夏は箒を意識している証拠なのか？）。」

一夏「漣司、俺は箒と漣司が仲良くすればするほど自分では分からない感情を抱いてしまうんだ。俺このままじゃ箒を傷付けてしまうんじゃないかと思ってしまうんだ。」

漣司「一夏。」

俺は一夏の肩に手を置く。

漣司「一夏、それはゆっくり考えてもいいんだ。今は分からなくても、一夏だったらいつか分かるはずだ。」

一夏「漣司……。」

漣司「さて一緒に帰るか！」

一夏「ああ、漣司ありがとう。」

漣司「どういたしまして。」

俺達は学園に帰って来たが、突然、さっきの殺気を感じた。

上を見上げると、ブルーティーズのピットの一機が一夏の頭目掛けて撃ってきたから俺はISキャリアーで弾き飛ばした。

さらに上を見上げると、ISを纏ったセシリア、鈴、シャルロット、ラウラがいた。かなり怒っているみたいだ。

ラウラ「一夏、私の嫁なのに浮気をするとはな。」

シャルロット「一夏、何で僕達に黙ってたのかな？」

鈴「よし！今から拘束して聞き出そう！」

セシリア「一夏さん私達とたつぷりOHANASHIしましょう。」

「
ヤバイ！4人共かなり怒っている。特に、鈴とセシリアは俗に言うヤンデレとなっている。」

漣司「一夏、箒と千桜を連れて逃げる。」

一夏「漣司は？」

漣司「俺がなるべく時間を稼ぐ。」

一夏「すまん、漣司、借りは返すから箒、千桜行くぞ！」

箒「ああ！漣司、死ぬな！生きて帰ってこい！」

千桜「えっ、ちよつと・・・うわ！？」

一夏と箒はISを展開し、千桜は箒に連れられた。

ラウラ「逃がすか『ジョーカー！』！？」

漣司「変身。」

『ジョーカー！』

俺は仮面ライダージョーカーに変身し、セシリア達の前に立った。

漣司「邪魔させてもらっぜ。一夏が惨殺死体になる恐れがあるからな。」

ラウラ「ほう？だったら一夏の浮気を協力した漣司が一夏の代わ

りに惨殺死体となつてもらおうか？」

シャルロット「漣司、覚悟してね？」

鈴「漣司、泣いて土下座しても許さないからね！」

セシリア「うふふ、さあ、漣司さん、踊り狂って下さいな。私達が奏でる鎮魂歌で！」
レクイエム

漣司「来な！俺がお前らの怒りを全て受け止めてやる！！」

俺は、皆に仲良くやって欲しい。だから皆の怒りや悲しみは全て受け止めてやる。

今誓ったが流石にこれはちとキツイ。

ラウラが言ったように気を抜いたら、俺は本当に惨殺死体になってしまう……。

それだけは気を付けながら皆の怒りを受け止めた。

2時間後、騒ぎを聞き付けた千冬さんの伝家の宝刀、出席簿の出席簿アタックがセシリア達の頭に炸裂し、事なきを終えた。なんとかなった。千冬さんありがとうございます。

さらに5時間後、午後8時、一夏達は訳あって別の部屋で寝るらしい。

漣司「久し振りだな1人で寝るのって。」

そう言いながら俺は部屋に入った。

？「お帰りなさいませ、ご主人様」

部屋にはミニスカのメイドさんの千桜だった。

漣司「もしかして、千桜か？」

ハル「流石です漣司君。ですが今は咲夜さんの専属メイドのハルです」

漣司「では、ハルさん。どうして、メイド姿になって俺達の部屋に？」

ハル「咲夜さんが『メイド姿になってご奉仕すれば、漣司兄ちゃんでも喜ぶんとちゃうか？』とそれで来ました」

うーん、俺はメイドさんにご奉仕されて喜ぶ趣味は無いんだが、千桜の好意を踏みにじる訳にはいかな。

漣司「それじゃハルさん。」

ハル「は、はい！」

どもっている。何を想像していたのだろう。

漣司「昼間見えなかった仮面ライダーのDVD、一緒に見るか。」

ハル「！、はい！」

こうして俺と千桜^{もといハルさん}は深夜12時まで、仮面ライダーのDVDを鑑賞した。

その18 Wデートと少女達の怒りとメイドさん（後書き）

次は楯無の話の前に漣司のカードの精霊の話です。

その19 精霊と価値と決意（前書き）

遅くなつてすみません。それでは漣司と精霊の話です。

その19 精霊と価値と決意

3月20日 深夜1時 学園地区 九路洲学園 学生寮 漣司達の部屋

漣司と千桜がDVDを見終わって千桜が自分の部屋に帰り、漣司は明日（日付が替わっているので正確には今日）に備えて就寝した1時間後のお話である。

漣司の机にあるデッキのカードから数枚、光が出て漣司が寝ているベッドの周りに集まった。

？『マスター……いい加減起きてよ……』

？『ダメだよ。ウイン、マスターを無理矢理起こそうとしたら。』

？『レイ様が一目置かれている男、桐札漣司……。』

？『我らナンバーズを使うに相応しい者か……。』

？『ふん、レイの奴、新しいマスターが出来るからと言ったが、まだこんなガキじゃねーか。』

？『おいギャラクシー。お前はマスターを馬鹿にしているのか！』

？『別に？希望皇？只、こんなガキがお前や俺の力を正しい事に使えるか疑問に思ったただだよ？お前はこのガキが俺達の力を正しい事に使えるか絶対に信じる事が出来るか？』

？『それは・・・。』

？『ほら見る。お前も信用してねーじゃねーか。』

？『だからこそ、我らが見極めなければならない。』

？『大丈夫だよリバイス。マスターは仲間の事を信じてるから私達も信用してくれるよ。私達はそこを信じようよ。』

？『ウインダ・・・そうだな。』

漣司「んー・・・？何か騒がしいな。」

？『あ、マスターが起きた』

漣司「ん？」

漣司 side

楯無の手伝いの為に早め（もう深夜だが）寝ることにしたのだが、急に話し声が聞こえたから目が覚めてしまった。やがて意識が覚醒した俺の目の前に、箒との買い物に光だしたカード、『風霊使いウイン』、『ガスタの巫女 ウィンダ』、レイから譲り受けた『No. 39 希望皇ホープ』、『No. 17 リバイス・ドラゴン』、『銀河眼の光子竜』が半透明で居た。

ウイン『マスターおはよう』

漣司「あ、ああ、おは・・・って、まだ深夜だが・・・。」

ウイン『あつ、そうだね』

ウィンダ『ウイン・・・ちゃんとしつかりしてよ・・・。』

このウインと言う子はなんだかレイと微妙に喋り方が似ているな。

漣司「で、君達がレイの言っていたカードの精霊で、俺は君達のマスターになるってことか。」

ウイン『うん　私は風霊使い　ウインだよ　ウインって呼んでね』

ウィンダ『私はガスタの巫女　ウィンダです。私とウインは双子です。私のことはウィンダとお呼び下さいマスター。』

ホープ『私は100枚のナンバーズの内の1枚、39の数字を持つ希望皇ホープです。これからはマスターの剣と盾となります。よ

ろしくお願いします。』

リバイス『我もホープと同じくナンバーズの内の1枚、17の数字を持つリバイス・ドラゴンだ。マスターに我の力を授ける。』

ギャラクシー『俺は銀河眼の光子竜だ。ガキ、漣司と言ったな。俺はお前を信じてねえがレイの言っていたことが本当かどうか試させてもらうぜ。』

漣司『ああ、皆も今日から俺・・・いや、俺達の仲間だ。』

ウィン『うん』

ウィンド『はい!』

ホープ『マスター!』

リバイス『そうだな。』

ギャラクシー『ふん。』

漣司『マスターになったのはいいが、俺は精霊を悪用する奴を倒しながら、後、残り98枚のナンバーズを回収すればいいんだな?』
ウィンダ『はい。ただ、ナンバーズはナンバーズとの戦闘でしか破壊されないんです。ですからマスターもナンバーズを持つ者とデュエルする時はマスターもナンバーズを使わざるおえないでしょう。』

ウィン『だからマスター。ナンバーズを賭けたデュエルは私達のデッキより、もう1つのシンクロドラゴンデッキで戦って。少し調

整したらエクシースモンスターであるナンバーズを召喚出来ると思うから。」

ギャラクシー『まあ漣司、希望皇やリバイスに頼らなくても俺がいるんだ。俺の方が頼りになるぜ。』

ホープ『お前はどのようにして俺達に喧嘩を売るようなことしか言えないんだ？』

ギャラクシー『このような性格なんでね。それに俺は対ナンバーズのエクシースキラーのカードだ。言うなればナンバーズの回収の為にだけに生まれてきたような存在なんだよ。それ以外の価値は無い。銀河眼の光子竜。』！？何だ漣司？』

漣司「頼む、銀河眼の光子竜。その為にだけに生まれてきたとかそれ以外の価値が無いとかそう言う悲しいことは言わないでくれ。」

ギャラクシー『・・・。』

漣司「確かにお前を作った奴はその為だけに作っただけでそれ以外の価値が無いようにしたかもしれない。だが、人であるうと精霊であるうと、生きる自由はあるし、自分が生きる価値は自分で決めることも出来る。」

ウィンダ『マスター・・・。』

漣司「俺はお前をナンバーズ回収の為だけに利用することはしない。お前が少しでも生きる価値を探したいのならいくらでも協力するし、信用出来ないなら俺を試してもいい。だから・・・。」

ギャラクシー『ギャラクシー。』

漣司「え？」

ギャラクシー『フルネームで呼ばなくていい。ギャラクシーでいい。呼ばなかったら、協力しねーぞ。』

漣司「分かった、ギャラクシー。」

ギャラクシー『ふん……。』

ギャラクシーはカードの中に戻っていった。

ウィン『やれやれ、素直じゃないんだから。』

ウィンダ『凄いですね、マスター。ギャラクシーの心を開かせるなんて。』

ホープ『何せ、あいつが自分のことをギャラクシーと呼ばせるのは、俺ら精霊以外はレイ様とマスターだけだからな。』

漣司『そうなのか。』

リバイス『口ではああ言っているが、無意識にマスターを信じてみようと思ったのだろうな。』

ウィン『何にしてもこれからよろしくね。』

漣司「ああ、よろしくな。」

ウィン達もカードに戻った。

漣司「俺は仲間達を守る。」

何処まで出来るか分からないが、皆の悲しみや怒りを受け止めてやる。例え・・・俺が決めた決意で俺自身に残酷な運命が待っているとしても俺は仲間達を守って見せる！！

その19 精霊と価値と決意（後書き）

漣司の決意が後に仮面ライダージョーカーに大きな変化を与えます。12本のメモリ使用の後になりますけど・・・。

その20 生徒会と欲望とナンバーズを賭けたデュエル（前書き）

遅くなりすみません。色々とやることがあったので、それでは始めます。

その20 生徒会と欲望とナンバーズを賭けたデュエル

3月20日 午前8時 学園地区 九路洲学園 生徒会室 漣司
Side

楯無「ちやお 漣司君」

ヒナギク「おはよう、漣司君。」

漣司「おはよう。楯無、ヒナギク。他のメンバーは？」

楯無「他の皆は後もう少しで・・・あ、来たわ。」

蘭「皆さんおはようございます。」

ハヤテ「今日も手伝いに来ました。」

一夏「今日も頑張るか。」

箒「ああ、そうだな。」

虚「さあ、セシリアさん達も頑張ってください。」

セシリア 鈴 シャルロット ラウラ「・・・はい・・・。」

「」

今日は楯無が俺にアピールする日だ。

今生徒会室には俺、一夏、箒、楯無、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、蘭、ヒナギク、ハヤテ、虚、千桜、愛歌がいる。

俺は楯無の計画で、一夏、箒、ハヤテはただの手伝いで、セシリア達は無断でISを動かし、騒動を起こした罰で生徒会の仕事をすることになった。

俺が何で生徒会の仕事を手伝っているのは、ハヤテ達が来た次の日の3月15日の事だ。俺は体力がないナギや花菱達の特訓のメニューを考えながら散歩していたら、珍しく悩んでいる顔している楯無がいたから俺は声をかけた。

漣司『よう、楯無、悩んでいるようだな。俺でよかったら相談に乗るが?』

楯無『ああ、漣司君ありがとう。実はね。』

楯無の話によると、今誰がこの九路洲学園の生徒会長になるか学園の理事長達が議論中とのことだ。今有望株なのは前に在籍していた学校の生徒会長の楯無、ヒナギク、蘭、黄村の4人、男でISを使える一夏、紅椿を手に入れ予想以上の成績を上げた箒、ある意味反面教師となり、影響力のある東宮、容姿も宛ら、運動神経、知能、戦闘能力が高く正義感がある後藤と最後に俺もその有望株の1人となってしまった。

俺の場合、箒と紅椿の力を引き出したのと、模擬戦の時のジョーカーの戦闘能力の高さ、この2つが有望株となった理由らしい。生徒会長に戦闘能力は関係ないと思うが・・・。

もし、議論で決まらなかつたら、生徒達に決めさせるという、生徒達に押し付けるといふ形になるらしい。

もし、生徒達に決めさせたら間違いなく、能力や人望以前に、容姿端麗な楯無やヒナギク、蘭、箒の誰かに絞られてしまう。女の子を生徒会長にさせる気持ちが俺には分らない。俺は後藤が一番適任だと思うが。話を元に戻そう、楯無はその生徒達に決めさせることで悩んでいた。一癖も二癖もある生徒だらけの学園だ。外見だけで決めてしまう生徒達の判断で生徒会長を決めてしまうのは危険ではないかと悩んでいたのだ。

楯無『でね、漣司君は誰が生徒会長に適していると思う？』

漣司『後藤が一番適任だと思う。』

楯無『そこは俺だと言つて欲しかったな。』

漣司『俺は元の世界では生徒会長に推薦されたけど、辞退したからな。』

元の世界では生徒会長立候補者の演説で俺は辞退を宣言したからな。俺は今回も演説があつたら、多分辞退するだろう。

漣司『生徒会長するということは自分がしたいことする時間が減るだろ。それが嫌なんだよ。』

楯無『確かに、漣司君は自分がしたいことをしたいという欲望に忠実だね。』

漣司『俺だけじゃない。一夏は仲間達を守りたいから強くなりたという欲望。箒は一夏や俺と仲間達と共に戦いたいという欲望が彼女に紅椿という力が授かり、後藤は世界を守りたいと伊達という人の死なせないという2つの欲望で彼はバースとなることが出来た。

ハヤテだつて主であるナギや友人達を守りたいと言うのも立派な欲望だ。』

楯無『確かにね。』

漣司『ジローも世界を征服したい欲望が彼は知恵と力を身に付けた。遊星も仲間達の絆を守りたい、その欲望が彼をクリアマインドと言う境地を見ることが出来た。トリコもうまいものを食べたい欲望が彼に欲望を満たせるように進化が出来た。行人も俺達やず達と一緒に過ごしたい欲望が彼自身や俺達の体も心も成長させることが出来る。優人は人も妖も共に生きたいと言う欲望が彼を天河家の光渡しの力を手に入れた。千冬さんも一夏を守りたい欲望が彼女をIS最強の操縦者となった。右京さんも真実が知りたいと言う欲望が数々の難事件を解決することが出来た。』

楯無『皆、欲望があるからこそ、頑張ることが出来るのね』

漣司『そういう楯無こそ、欲望はあるんじゃないか？』

楯無『お姉さんはね、恋人が欲しいと言う欲望なのよね。』

漣司『恋人？楯無のことだから恋人がいるかと思つたが？』

楯無『うーん、お姉さんはね、好きな人がいて告白しても、貴方とは釣り合わないとか貴方と付き合つのは恐れ多いとか私を過大評価し過ぎて全て断られてしまうの。』

漣司『なるほどな。そうだ、楯無が恋人出来るまで色々と協力するぜ。』

楯無『え？』

漣司『多分、楯無が告白した奴は楯無の外見や能力の方を見てしまつて、断つたんじゃないか？楯無も本当は恋する可愛い女の子だと見てくれたら、いいんじゃないか？』

楯無『（ドキッ、私は綺麗とか美人だとか言われたけど可愛い女の子では初めて言われた。』

漣司『ん？どうした楯無？俺、変なことを言ってしまったか？』

楯無『ううん、何でもないのよ。』

漣司『そうか（楯無、まさか・・・、まさかな。）。』

楯無『あつ、そつだ漣司君。協力してくれるなら生徒会の仕事を手伝つてくれない？』

漣司『生徒会の仕事？いいぜ。仕事を早めに終わらせれば楯無の恋人探しの時間も作れるしな。』

楯無『ありがとう漣司君（漣司君と一緒にいてこの気持ちは何なのか突き止めよう。）！』

漣司『ああ、つてそんなに抱き付くほど嬉しいのか？』

楯無『お姉さんはね、女の子の頼みを快く引き受けてくれる男の子は好きよ。』

漣司『そうか・・・。』

っで、それから楯無の頼みがあったら、手伝っている。この時
だろう、楯無が俺に好意を持っていたのは。生徒会の仕事の時、
やたらと楯無が俺に対して熱い眼差しで見てる。部屋に戻って来
た時、どうやって入ったのか裸エプロンの楯無が『お帰りなさい。
ご飯にします？お風呂にします？それともわ、た、し？』と言って
迫って来た。その時はちゃんと服着させて、帰って貰ったが、あれ
は流石に精神的に堪えた。

漣司「一夏、箒悪いな。手伝って貰って。」

一夏「何、漣司には昨日の借りがあるからな。」

箒「そうだと漣司。相棒である私に何でも言ってくれ。協力する。」

漣司「ありがとう。」

このまま順調に仕事が進み、終わるかと思っただが、急に、俺は強
力な力の気配がこっちに来るのを感じた。

箒「なっ、何だ？」

一夏「何か来る！」

箒も一夏も何か感じたようだ。皆はキョトンとしているようだ。

扉が開いて現れたのは黄村と東宮だ。しかし様子がおかしい。

ヒナギク「東宮君、黄村君どうしたの？貴方達は織斑先生から謹慎つけているはずじゃ……。」

漣司「ヒナギク！2人に近付くな！！」

ヒナギク「え？・・・キヤア！？」

2人に近付いたヒナギクは衝撃波によって吹き飛ばされ、壁に激突し、気絶した。

ハヤテ「ヒナギクさん！」

楯無「2人ともから良くないものを感じるわ。」

ウィン『マスター！』

漣司「ウィン！まさか2人は……。」

ウィン『うん、2人共、ナンバーズを1枚ずつ持っている！』

一夏「漣司、お前の隣にいるその子誰だ？」

箒「一夏も見えるのか？」

ハヤテ「僕も見えますよ。」

楯無「お姉さんも見えるわ。」

漣司「説明したいところだが、今それどころじゃないようだ・・・」

黄村『レンジ、イチカ、ハヤテ、オマエタチバツカリイイオモイヲシヤガツテ!!』

東宮『オマエタチブタヤロウヲオシテ、カツラサンニミトメテモラウ!!』

漣司「ナンバーズに心を奪われている。かといって、2人相手はキツいな。」

箒「漣司、私も闘う!」

漣司「箒!?!」

箒「漣司、相棒としてお前と共に闘いたいんだ!!」

漣司「分かった。ただし、無茶だけはするなよ。」

箒「ああ!」

黄村『フタリ、イイフンイキヲダスナ!!』

漣司「悪い悪い。それじゃ始めようか。お前達のナンバーズを回収させてもらう!!」

俺と箒は遊星に作って貰ったデュエルディスクを装着し、デッキを入れた。

漣司 第「いく(ぜ)(ぞ)！」

『デュエル!!』

ナンバーズを賭けた最初のデュエルが始まる。

その20 生徒会と欲望とナンバーズを賭けたデュエル（後書き）

今回、自分の解釈で主人公達の欲望を書いてみましたがどうか？

後、ナンバーズを賭けたデュエルは急展開しすぎでしたでしょうか？

感想、評価お待ちしております。

その21 幕の努力と漣司の逆鱗とボロボロになった2人（前書き）

wikiで調べてカードの解説まで書いたら長くなった上、おかしいところもあると思います。

その21 幕の努力と漣司の逆鱗とボロボロになった2人

一夏side

漣司、箒ペアと黄村、ヘタ・・・じゃなく東宮ペアのデュエルが始まる。

『デュエル!!』

漣司 LP8000

箒 LP8000

黄村 LP8000

東宮 LP8000

漣司「先攻は俺が貰う、俺のターン、ドロー！」

漣司「俺はモンスターはセットして、カードを二枚伏せてターンエンドだ。」

漣司 LP8000

手札3枚

裏守備モンスター1体

伏せカード2枚

漣司はこれで様子見だろう。

東宮『ボクノターン、ドロー！』

東宮『ボクハ手札カラ『ジェリービーンズマン』ヲ召喚スル！』
フィールドから剣と盾を持った豆戦士が現れた。

ジェリービーンズマン

地属性 レベル3 ATK1750/DEF0

【植物族】

ジェリーという名の豆戦士。自分が世界最強の戦士だと信じているが、その実力は定かではない。

東宮『サラニカードヲ1枚フセコレターンエンドダ。』

東宮 LP8000

手札4枚

攻撃表示モンスター1体 伏せカード1枚

伏せカードを1枚だけ？戦況をひっくり返すカードなのか？

第「私のターン、ドロー！」

第「私は手札から、魔法カード、『紫炎の狼煙』を発動する！」

紫炎の狼煙

通常魔法

自分のデッキからレベル3以下の「六武衆」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

第「私は『紫炎の狼煙』の効果でデッキから『真六武衆 ミズホ』を手札に加える。」

第は『真六武衆 ミズホ』を手札に加える。

第「私は『真六武衆 ミズホ』を召喚。」

第は手札に加えた真六武衆の紅一点、ミズホを召喚した。

真六武衆 ミズホ

炎属性 レベル3 ATK1600/DEF1000

【戦士族・効果】

自分フィールド上に「真六武衆 シナイ」が表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。また、1ターンに1度、このカード以外の自分フィールド上に存在する「六武衆」と名のついたモンスター1体をリリースする事で、フィールド上に存在するカードを1枚を選択して破壊する。

第「フィールド上に『真六武衆 ミズホ』が表側表示で存在する時、手札にある『真六武衆 シナイ』を特殊召喚する事が出来る。私は『真六武衆 シナイ』を特殊召喚する。」

ミズホの隣に、棍棒を2つ持ったシナイが現れた。

真六武衆 シナイ

水属性 レベル3 ATK1500/DEF1500

【戦士族・効果】

自分フィールド上に「真六武衆 ミズホ」が表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。フィールド上存在するこのカードがリリースされた場合、自分の墓地に存在する「真六武衆 シナイ」以外の「六武衆」と名のついたモンスター1体を選択して手札に加える。

東宮『リバーズカードオープン！永続罫『血の代償』ヲ発動！』

血の代償

永続罫

ライフポイントを払う事で、モンスター1体を通常召喚する。この効果は自分のメインフェイズ時及び相手のバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。

ん？このタイミングで血の代償？ただ単に発動するのを忘れたのか？

第「私はカードを2枚伏せターンエンドだ。」

第 LP 8000

手札2枚

表側表示モンスター2体

伏せカード2枚

黄村『オレノターン、ドロー。』

黄村はどう出る？

黄村『オレハアクロバットモンキーヲ召喚！』

黄村は機械で出来たサルを召喚した。

アクロバットモンキー

地属性 レベル3 ATK1000 / DEF1800

【機械族】

超最先端技術により開発されたモンキータイプの自立型ロボット。
非常にアクロバティックな動きをする。

黄村『オレハアズマミヤノレベル3、ジェリービーンズマントレ
ベル3、アクロバットモンキーヲオーバーレイ！』

2体のモンスターが光の球体になり突如地面に渦が生じ球体が吸
い込まれた。

黄村『2体ノモンスターデオーバーレイ・ネットワークヲ構築！
エクシーズ召喚！アラワレロ』No.20 蟻^{きごと}岩土ブリリアント』
！』

渦の中から、不思議な物体が現れ、変形し、銀と紫の巨大な蟻
になった。右の羽に何だろう？数字みたいなのが刻まれている。多分
20？

No.20 蟻岩土ブリリアント

光属性 ランク3 ATK1800 / DEF1800

【昆虫族・エクシーズノ効果】

レベル3モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて
発動する事ができる。自分フィールド上に表側表示で存在する全て
のモンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

セシリア「なんですの！？あのモンスターは！？」

鈴「何だろう？あのモンスターから変なのを感じるわ。」

愛歌「聞いた事あるわ。確か最近、デュエリスト達が次々と事件を起こしていると。」

千桜「愛歌さん、もしかしてその人達って・・・。」

愛歌「ええ、その人達はナンバーズというエクシーズモンスターを使っていたと聞いた事があるわ。」

黄村『バトル！レンジノモンスターニコウゲキ！』

ブリリアントは漣司のモンスターに攻撃した。漣司のモンスターは赤いドラゴンだ。赤いドラコンは破壊された。

漣司「マスクド・ドラゴン仮面竜のモンスター効果発動！仮面竜が戦闘で破壊され墓地に送られた時、デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚する。俺はランサー・ドラゴニートを特殊召喚する。」

漣司のフィールドに槍を持った緑色の竜が現れた。

仮面竜

炎属性 レベル3 ATK1400/DEF1100

【ドラゴン族・効果】

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを1体を自分

フィールド上に特殊召喚することができる。

ランサー・ドラゴニユート

闇属性 レベル4 ATK1500/DEF1800

【ドラゴン族・効果】

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、そのモンスター守備力を越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

漣司「この瞬間、リバーカードを発動！速攻魔法、地獄の暴走召喚。」

地獄の暴走召喚

速攻魔法

相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスターを1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

漣司「俺は仮面竜の効果で特殊召喚したランサー・ドラゴニユートを選択し、デッキから同じくランサー・ドラゴニユート2体を特殊召喚する。」

上手い、破壊されたのに漣司のフィールドに一気に3体を召喚させるとは。

ハヤテ「凄い、一気に3体も・・・。」

蘭「漣司さんは破壊されるのを予想して地獄の暴走召喚も伏せたのですか。」

ラウラ「しかし、何故黄村は表側表示の箒のモンスターより、裏側表示の漣司のモンスターに攻撃したのだ？」

黄村『カンタンダ。マズ、レンジヲサキニタオシ、アトカラシノ
ノノヲ、ユツクリイタブルノサ!!』

東宮『シノノハオンナノクセニオレヲヒンジャクアツカイシ
ヤガツテオレヲケンドウサセボロボロニスルンダゾ!!』

鈴「いや、それアンタ達が本当に貧弱過ぎて、練習終わった後、
後ろに振り向いた箒を不意打ちしようとして逆に返り討ちにあった
んじゃない。自業自得よ。」

東宮『ダマレソレニシノノハセンヨウキヲモツテイルガソレハ
カイハツシャノイモウトダカラトイウミウチヒイキデモラツテイル
ジャナイカ!!』

箒「うつ!？」

箒は紅椿を手に行っているがそれは身内だからと見られていること
が多い。俺はそんな奴らが腹がたつ。

黄村『オレタチニハドリヨクシロトイイナガラ、ジブンハナンノ
クロウモセズISヲモラツテイル!!』

箒「わ、私は・・・。」

ヤバイ、箒が震えて両手で顔隠して泣いている。あいつら！

ブチッ！！

俺が東宮達を殴りにいこうとしたら何かが切れたような音がして不意に止まってしまった。

東宮『ナンバーズハデュエリストニリアルニダメージヲアタエル
コトガデキル！シノノヲココロモカラダモボロボロニシテ「おい
」！？」』

漣司が東宮の会話を遮るようにドスの効いた声で東宮達を睨んだ。
今わかった。今の切れたような音は漣司本気で怒っているんだ。

漣司「お前ら、黙って聞いていれば好き放題言いやがって。いい
加減にしろ。あ？」

ゾクッ！！！！

漣司の声ってこんなに恐かったか？

漣司「お前ら箒がどれ程努力したかも知らないで、好き勝手に言
ってんじゃねえよ。」

箒「漣司……。」

箒「箒は確かに姉である束さんに紅椿を譲り受けた。だがな、そ

れは箒が人一倍に努力をして、それを見た束さんが箒の為に紅椿を作り、箒に託した。それに箒は紅椿を貰ってからは紅椿を使いこなせるように一層特訓して、努力したんだ。朝早くから夜遅くまでな」

東宮 黄村『!!?』

漣司「箒はな、やらされている特訓だけしかしていないお前らは違うんだよ。努力している量も力を持つ責任も覚悟もな!!」

漣司、箒の事もこんなにも理解しているなんて、俺は知らなかった。俺も理解出来るのか？箒の事を・・・。

漣司「はつきり言ってやる。俺も箒も、お前らみたいな覚悟も責任も努力もない奴どんな力を持つとが、負ける分けねえだろ。」

東宮 黄村『オマエハイッタイナニモノダ!?!』

漣司「俺は篠ノ之箒の相棒、仮面ライダー・・・ジョーカー。桐札漣司だ。」

漣司は一呼吸を置いて言った。

漣司『さあ、ナンバーズで箒を傷付けようとしたのと、箒を泣かせた、お前達の罪を・・・数えろ!!!』

黄村『ダメレ!オレハターンエンドダ!』

黄村 LP8000

手札5枚

表側攻撃表示モンスター1体
伏せカードなし

漣司「俺のターン、ドロー！」

漣司はドローしたカードを見てニヤリと笑った。

漣司「箒、お前のモンスター、俺に託してくれるか？」

箒「わかった。漣司も私に力を貸してくれ！」

漣司「ああ、ありがとう。俺は箒のレベル3『真六武衆 ミズホ』とレベル3『真六武衆 シナイ』をオーバーレイ！」

ミズホとシナイは光の球体になり、地面の渦に吸い込まれた。

漣司「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる『No.17 リバイス・ドラゴン』！」
渦から不思議な物体が変形して、右の角みたいところに17の数字が刻まれた竜になった。

No.17 リバイス・ドラゴン

水属性 ランク3 ATK2000/DEF0

【ドラゴン族・エクシーズ/効果】

レベル3モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、このカードの攻撃力を500ポイントアップする。

このカードのエクシーズ素材が無い場合、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。

漣司「更に、自身の2体のレベル4のランサー・ドラゴニユートをオーバーレイ！」

3体いる内の2体のランサー・ドラゴニユートが光の球体になり、地面の渦に吸い込まれた。

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる『No.39 希望皇ホープ』！」

『リバイス・ドラゴン』と同じように、物体が変形して左肩に39の数字が刻まれた翼の戦士が『ホープ！』と叫びながら現れた。

No.39 希望皇ホープ

光属性 ランク4 ATK2500/DEF2000

【戦士族・エクシーズ/効果】

レベル4モンスター×2

自分または相手モンスターの攻撃宣言時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動する事ができる。

そのモンスターの攻撃を無効にする。

このカードがエクシーズ素材の無い状態で攻撃対象に選択された時、このカードを破壊する。

セシリア「漣司さんもナンバーズを！？」

シャルロット「しかも2体も・・・。」

ハヤテ「でも、黄村君達みたいに操られてないみたいですけど・・・。」

ハヤテの言う通り漣司は ナンバーズを出してもなんの変化もな

い。

漣司「更にチューナーモンスター『デルタフライ』を召喚！」

デルタフライ

風属性 レベル3 ATK1500/DEF800

【ドラゴン族・チューナー】

1ターンに1度、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してレベルを1つ上げる事ができる。

漣司「『デルタフライ』のモンスター効果発動！1ターンに1度、『デルタフライ』以外の表側表示のモンスターのレベルを1つ上げる事ができる。俺は『ランサー・ドラゴニユート』のレベルを4から5に上げる。」

ランサー・ドラゴニユート

レベル4 5

漣司「俺はレベル5となった『ランサー・ドラゴニユート』とレベル3『デルタフライ』をチューニング！」

『デルタフライ』が3つの光の輪になり、『ランサー・ドラゴニユート』を包み『ランサー・ドラゴニユート』も5つの光の球体になる。

漣司「勝利の切り札は、何時でも俺の手の内にある！シンクロ召喚！」

3 + 5 = 8

漣司「現れる『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」
悪魔みたいなドラゴンが現れた

レッド・デーモンズ・ドラゴン

闇属性 レベル8 ATK3000/DEF2000

【ドラゴン族・シンクロ/効果】

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。このカードが自分のエンドフェイズ時に存在する場合、このターン攻撃宣言をしてない自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

鈴「凄い・・・ナンバーズだけじゃなく、シンクロモンスターも召喚するなんて・・・。」

一夏「そう言えば、漣司のデッキはドラゴン族のシンクロモンスターを召喚する前提に構築したデッキって漣司が言ってたな。」

ラウラ「なるほど、ナンバーズも召喚できるように少し調節したのだな。」

漣司「『リバイス・ドラゴン』のモンスター効果発動。1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ取り除く事によって『リバイス・ドラゴン』の攻撃力を500ポイントアップする」

『リバイス・ドラゴン』は自身の周りに回っている2つの光の球体の1つを取り込んだ。

リバイス・ドラゴン

オーバーレイ・ユニット2 1

ATK2000 2500

漣司「バトル！『ホープ』で『ブリリアント』を攻撃。ホープ剣・スラッシュ！」

『ホープ』は剣をブーメランのように放り投げて、キャッチし、ブリリアントに斬撃を与え、破壊した。

黄村『グアツ！？』

黄村 LP8000 7300

漣司「更に『リバイス・ドラゴン』と『レッド・デーモンズ』でダイレクトアタック！バイス・ストリーム！アブソリュート・パワーホース！」

『リバイス・ドラゴン』は口からエネルギー弾を、『レッド・デーモンズ』は手から炎の鉄拳を黄村に浴びせた。

黄村『ギャアーーーーー！！！！』

黄村 LP7300 1800

漣司「俺はカードを1枚伏せターンエンドだ。」

漣司 LP8000

手札2枚

表側攻撃表示モンスター3体

伏せカード2枚

第「さすが、漣司だな。その、ありがとう・・・。」

漣司「いいって、相棒を侮辱されて黙っている奴はいないからな。」

東宮「クツ、ボクノターン。ドロー！」

東宮「ボクハ『血の代償』ノ効果発動！ライフを500ポイント
ハライ、『ジェリービーンズマン』ヲ召喚。サラニサントイメノ『
ジェリービーンズマン』ヲ召喚。」

東宮 LP8000 7500

東宮「ニタイノレベル3『ジェリービーンズマン』ヲオーバーレ
イ！ニタイノモンスターデオーバーレイ・ネットワークヲ構築！エ
クシーズ召喚！アラワレロ『No.30 破滅のアシッド・ゴーレ
ム』！」

東宮が所持（もとい操っている根源）している紫の体で右足に3
0の数字が刻まれた不気味なゴーレムが現れた。

No.30 破滅のアシッド・ゴーレム

水属性 ランク3 ATK3000/DEF3000

【岩石族・エクシーズノ効果】 レベル3モンスター×2

自分のスタンバイフェイズ時、このカードのエクシーズ素材を1
つ取り除くか、自分は2000ポイントダメージを受ける。

このカードのエクシーズ素材が無い場合、このカードは攻撃でき
ない。

このカードがフィールド上に存在する限り、自分はモンスターを特殊召喚する事ができない。

東宮『バトル！』『アシッド・ゴーレム』デ、ガラアキノシノノニダイレクトアタック！』

東宮の奴！箒を！

一夏「箒！！！」

『アシッド・ゴーレム』の拳が無慈悲にも箒を襲って・・・。

漣司「『希望皇ホープ』のモンスター効果発動！『希望皇ホープ』のオーバーレイ・ユニットを1つ取り除く事によって、モンスターの攻撃1度だけ無効にする。ムーンバリア！」

希望皇ホープ

オーバーレイ・ユニット2 1

襲って来なかった。箒の前に『ホープ』が現れ翼を盾にして箒を守った。

漣司「これ以上、相棒に指一本触れさせない！」

東宮『クツ、コレデターンエンドダ。』

東宮 LP7500

手札3枚

表側攻撃表示モンスター1体

永続トラップ1枚

箒「私のターン。ドロー！」

漣司「箒！『アシッド・ゴーレム』を破壊するために『リバイス・ドラゴン』の効果を発動させて攻撃を！」

箒「しっ、しかしそれでは！」

漣司「『リバイス・ドラゴン』もそれを望んでいる！」

箒「わかった。『リバイス・ドラゴン』のモンスター効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ取り除く事によって『リバイス・ドラゴン』の攻撃力を500ポイントアップする！」

リバイス・ドラゴン

オーバーレイ・ユニット1 0

ATK2500 3000

箒「バトル！『リバイス・ドラゴン』で『アシッド・ゴーレム』を攻撃！」

『リバイス・ドラゴン』と『アシッド・ゴーレム』は相打ちになつて破壊される。

箒「東宮に『レッドデー・モンズ』、黄村に『ホープ』でダイレクトアタック！」

東宮「グアッ！」

黄村「ギャアーーーー！！！」

東宮 LP 7500 4500
黄村 LP 1300 0

黄村を倒した。それにしても、ナンバーズを所持している奴はナンバーズの攻撃を直接喰らっても問題無いみたいだ。箒だけがボロボロにされる恐れがあったんだ・・・。

箒「私はこれでターンエンドだ。」

箒 LP 8000

手札3枚

モンスターなし

伏せカード2枚

漣司「俺のターン、ドロー！」

漣司「バトル！『ホープ』と『レッド・デーモンズ』で東宮にダイレクトアタック！」

東宮『グアッーーーー！！！！』

東宮 LP 4500 0

一夏「やったな！漣司！箒！」

漣司「ああ、それじゃ早速・・・。」

漣司は気絶している東宮と黄村から1枚ずつカードを取り出した。

『No.20 蟻岩土ブリリアント』

『No.30 破滅のアシッド・ゴーレム』

漣司「『No.20 蟻岩土ブリリアント』、『No.30 破滅のアシッド・ゴーレム』、回収完了。」

セシリア「あの、漣司さん。ナンバーズとは何なのでしょう？」

漣司「ある人から聞いたんだが、ナンバーズと言うのは所持したら、そいつは最もしたい欲望が増幅して暴走するもんだと。俺はその人に100枚あるナンバーズの回収を頼まれている。」

鈴「けど、何でアンタはなんともないのよ？」

漣司「それはこいつが守ってくれるからだ。」

漣司が見せたのは1枚のカードだった。

『銀河眼の光子竜』

漣司「こいつには精霊が宿っていて、ナンバーズの力を抑えてくれるんだ。さっきいた子は『風霊使い ウィン』だ。さて、ヒナギク、東宮、黄村を保健室に運ぼう。一夏、黄村を運ぶの手伝ってくれ。」

一夏「わかった。」

俺達は黄村を保健室に運んだ。

漣司が回収したナンバーズ『No.20 蟻岩土ブリリアント』
『No.30 破滅のアシッド・ゴーレム』

残りナンバーズ、96枚

その21 幕の努力と漣司の逆鱗とボロボロになった2人（後書き）

感想、評価、アドバイス、間違っている点があったらよろしくお
願いします。

その22 食材調達と2人の少女とWバース（前書き）

やっとこの物語の13人の主人公を集結させる事が出来ました。

その22 食材調達と2人の少女とWバース

3月20日 午後1時 密林地区 漣司 side

昼間の件で俺達は騒ぎを聞き付けた千冬さんと山田先生の事情聴取を1人ずつ執る事になった。ナンバーズの事を話したら、2人は信じてくれてナンバーズの管理は俺で構わないとのことだ。

今回の件で楯無の家に行くのは急遽中止にした。楯無の事だから何かしらのアプローチはしてくると思うが・・・。

俺は今トリコを先頭に一夏、箒、ハヤテ、後藤、行人、優人、ジロー、遊星らと一緒に密林地区に入ろうとしていた。

何故ここにいるのか順を追って説明しよう。ナンバーズのデュエル後、食堂で昼食を食べていたら、食堂のおばちゃん達が困っているのを見て、声をかけた。何でも近日中に俺達1組のクラスの何人が料理大会を開いて料理を振る舞うらしい。っで、その料理に使う食材が足りないとの事らしい。

俺達は何時も世話になって（主に食事で）いるおばちゃん達の為に食材を調達する事にした。

必要な食材が書いたメモを受け取ると、俺、一夏、箒、ハヤテと途中で合流した後藤達と事情を話して行く事にした。

そして冒頭に戻る。

箒「漣司、『リバイス・ドラゴン』は大丈夫か？」

漣司「ああ、今は寝ているが、大丈夫だと。」

箒「そつ、そうか。よかった……。」

箒が安堵の溜め息を漏らす。

一夏「そういえば漣司、精霊は他にもいるのか？」

漣司「ああ、『風霊使い ウィン』、『ガスタの巫女 ウィンダ』、『希望皇ホープ』、『リバイス・ドラゴン』、『銀河眼の光子竜』だ。」

俺は5枚のカードを皆に見せた。

ギャラクシー「漣司、お前、ナンバーズの時、俺を出さなかったのはどういうことだ？」

『銀河眼の光子竜』のカードからギャラクシーがデフォルメされた感じで実体化し俺を睨んだ。

漣司「悪い、『ホープ』と『リバイス』をリリースしてお前を出していたら箒を守れなかったからな。」

ギャラクシー「そうかい。だがな漣司、お前が俺の為に言ってくれた時から一応マスターとして認めているんだ。命懸けで守ると誓ったんだよ。だから俺をもっと頼って『ギユム』。『！？』」

箒が突然、ギャラクシーの言葉を遮るように、ギャラクシーを抱いた。まるでぬいぐるみを抱くような感じで。

箒「お前がナンバーズの負の力から私の相棒を守ってくれているのだな。礼を言う。ありがとう。」

ギャラクシー『なっ、なんだ小娘！？』

箒「私は小娘ではなくて箒という名がある。それよりも、漣司を守ってくれているのはいいが、自分の事も大事にしてほしい……。」

箒が悲しそうな目でギャラクシーを見る。

一夏「そうだぜ。自分の事も大事にしねえと。」

ハヤテ「1人では限界があります。」

後藤「頼らない!! 強いてわけじゃない。」

遊星「仲間達と力を合わせる事が大事だ。」

ジロー「仲間達と一緒に生きていく事は何よりも素晴らしい事だぞ。」

トリコ「皆で食うメシも旨いし。」

行人「この素晴らしさが分からなかったら。」

優人「俺達が教えてあげるよ。」

ギャラクシー『……お前ら、漣司と同じく、俺を心配するんだな。』

ギャラクシーはカードの中に戻った。

漣司「全く素直じゃねえな。暫くそつとしといてやるか。」

トリコ「そうだな。さて漣司、頼まれていた食材ってなんだっけ？」

漣司「えっと、この密林地区で採れる『ブルブラッド』、『ホネナシサンマ』、『シャクレノドン』、他、数種類。」

後藤「よし、日が暮れない内に早く調達に行『きゃあああああ！』！？」

ジロー「今の悲鳴は！？」

遊星「この奥からだ！」

行人「行ってみよう！」

俺達は悲鳴の方に向かって走り出した。

? side

?「ぐうつ！」

？「大丈夫！？夜空！」

夜空「ええ、イブキは？」

イブキ「私はなんとか・・・。」

私は法仙^{ほうせん}夜空^{よんくう}。そしてもう1人の少女がイブキだ。私達はパートナーで一緒に仕事をしている。

今私達は、食材の調達の仕事に失敗をして依頼主の怒りを買ってしまい追われている身だ。なんとかこの密林まで逃げる事が出来たのだが、変な植物の化け物が私達を襲って来た。

イブキ「きゃあ！」

夜空「イブキ！・・・ああっ！」

イブキは化け物の根に弾き飛ばされ、私は助けに行こうとしたが、化け物の根が私の両手両足首、腰、首に巻き付きX字のように磔にされ、捕らわれてしまった。

ミシミシミシミシ！

巻き付かれている所の骨が嫌な音をたてている。

夜空「くそっ！」

私は魔力を使い根を斬ろうとしたが、力が抜けて上手く魔力を練り出す事が出来ない。化け物が急速に成長している。コイツ私の魔力を吸収して成長しているのか！

夜空「あ、ああ・・・。」

ヤバい、魔力を吸われ過ぎて意識が朦朧としてきた・・・。

イブキ「夜空！」

イブキが私の名を叫ぶ。すまない、イブキ・・・

『IS<インフィニット・ストラトス>！マキマシマムドラ
イブ！』

漣司「はああああ、セイヤ！」

後藤「はあ！」

1人の男が持っている大型剣で私の巻き付いた根を切り裂き、私をお姫様抱っこで私を担ぎ、もう1人の男が形の変った機関銃のような物で化け物を蜂の巣にしてイブキの方に駆けつけた。

漣司「大丈夫か？」

男は私に聞いた。

夜空「大・・・丈・・・夫だ。」

漣司「大丈夫ではなさそうだな。今はゆっくり寝ろ。」

その言葉に私は安心して、意識を手放した。

漣司 side

駆けつけた時、女の子が植物の化け物の根に捕らわれているのを見て、俺はISキャリアバーにISメモリを装填し、マキマシマムドライブを発動して根を切り裂き、女の子を助けた。

漣司「大丈夫か？」

少女「大・・・丈・・・夫だ。」

女の子は弱々しく答えた。

漣司「大丈夫ではなさそうだな。今はゆっくり寝ろ。」

俺の言葉に安心したのか、女の子は寝てしまう。この時、不謹慎だと思うが可愛い寝顔ですーすーと可愛い寝息をたてていた。

後藤「漣司、その子は無事か？」

後藤もバースバスターで化け物を蜂の巣にし、もう1人の女の子を助け、俺に聞いた。

漣司「ああ、今は寝ている。そっちは？」

後藤「ああ、こっちも緊張の糸が切れたのか寝ている。」

トリコ「漣司、後藤、ソイツはゴブリンプラントだ！ソイツを倒すにはかなりの火力のいる兵器で倒さないと再生してキリがない！」

漣司「後藤、俺達が時間を稼ぐから、プレストキャノンで！」

後藤「わかった！」

俺はロストドライバー、後藤はバーストドライバーを装着した。

『ジョーカー！』

漣司 後藤「変身！」

『ジョーカー！』

後藤「プレストキャノン、最大出力！」

『ブレストキャノン！』

『セルバースト！』

俺達は即離れて、ゴブリンプラントはブレストキャノンの最大出力を浴びて、爆発した。

ズズーン！！

その時、体長5メートルはあろうかというシャープな形の戦闘口ボが俺達の目の前に現れ男の声がした。

男『お前達、その娘達を渡してもらおう！』

漣司『何でだ？』

男『そいつらは私の依頼を失敗して私に大損を与えたんだ！よって制裁を与えたる！』

漣司『だったら尚更渡すわけにはいかな。女の子を痛め付けるなんて男の風上にも置けねえ奴だ！』

男『だったらお前達もまとめて始末してやる！』

口ボが俺達を襲って来た。

漣司『がつ！』

一夏「ぐあっ！」

後藤「うわぁ！」

俺達はロボの巨大な腕に吹っ飛ばされた。

ジロー「くっ、ジローワイルドリルキック！」

トリコ「18連！釘パンチ！」

ジローのマントがジローの右足にドリルのように纏い、トリコの右腕の筋肉が膨らみ、ロボの右腕にジローのキック、トリコのパンチが炸裂した。

ズドドドドドドドドドッ！！

ズガガガガガガガガガガガガガッ！！

反動でロボの右腕は吹っ飛ばされた。

ジロー「何て固い！」

トリコ「もう釘パンチは打てねえか・・・。」

ジローとトリコは暫く闘えないか。

後藤「皆は逃げろ！」

行人「後藤さんは！？」

後藤「捨て身の戦法だが、プレストキャノン最大出力を奴の至近距離で放つ！」

遊星「待て！それじゃ後藤が・・・！」

後藤「下手すれば相打ち・・・だが上手く行けば・・・。」

男『お前達何をごちゃごちゃ言っ
てやがる！』

ロボは右足を上げて踏み潰そうとした。

ハヤテ「しまった!？」

ババババババババン!

『!!!??』

俺達は驚いた。俺達を踏み潰そうとした右足に銃弾が撃ち込まれロボはバランスを崩し倒れた。

?「後藤ちゃん!そんな捨て身の戦法、教えた覚えはないけど?」

現れたのは、バースバスターを構えた大男が俺達を助けた。

後藤「伊達さん!」

伊達「だて あきら伊達明・・・リターン!」

伊達と言う男はバースドライバーを装着し、右手でセルメダルをコイントスし、左手でキャッチした。

伊達「変身！」

伊達はセルメダルをバースドライバーに装填してハンドルを回し、仮面ライダーバースに変身した。

後藤「伊達さん！体、大丈夫ですか！？」

伊達「イエス！」

伊達は後藤に近付き、後藤の肩を叩いた。

伊達「行くよ後藤ちゃん！」

後藤「無茶しないで下さいよ！」

伊達と後藤はロボに近付き戦闘を始めた。俺達も戦闘を始めた。

後藤はバースの能力を駆使してアグレッシブな闘い方に対し、伊達はプロレス技を主体としたパワフルな闘い方をする。

一夏「漣司、データが届いた！あれは対IS用に作られた兵器らしいー！」

漣司「成る程な、火力も耐久性も桁違いな訳だ。」

篤「このままじゃー！」

伊達「よし、後藤ちゃん！さっきの戦法、やってみようか？」

後藤「教えた覚えはないんじゃないですか？」

伊達「・・・邪魔してすみませんでした。」

後藤「伊達さん・・・また病院送りになるかも知れませんよ？」

伊達「それだけは願い下げだな。」

『『ブレストキャノン！』』

男『うおおおおおおお！』

ロボは後藤と伊達に近づく。

『『セルバースト！』』

伊達「よし！充電完了！」

Wブレストキャノンのエネルギー弾がロボに直撃し、ロボは大ダメージを喰らい爆発した。中の男は気絶して倒れた。

その後俺達は食材を調達して学園に帰った。伊達が医者だったのでトリコとジローと寝ている2人を診てもらい、男は警察につきだした。

しかしこの2人や伊達は一体・・・？

その22 食材調達と2人の少女とWバース（後書き）

後、その16を編集して直します。

その23 伊達のカミングアウトと集いし主人公達と三度目の神（前書き）

合計アクセスが5万を超えました。皆さん、ありがとうございます。

その23 伊達のカミングアウトと集いし主人公達と三度目の神

3月22日 午後5時 学園地区 九路洲学園 医療室

医療室には、漣司、一夏、箒、ハヤテ、後藤、ジロー、遊星、トリコ、行人、優人、伊達に、ベッドに寝かされている夜空とイブキ。駆けつけたセシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、簪、楯無、ヒナギク、愛歌、千桜、キョーコ、ジャック、クロウ、小松、ココ、サニー、ゼブラ、滝丸、マツチ、すず、あやね、まち、りん、ゆきの、ちかげ、しのぶ、梅梅、緋鞠、凜子、静水久、くえすに、教師の千冬、山田、雪路、杉下、亀山、神戸がいた。

杉下「さて、あなたはどちら様でしょうか？」

伊達「ああ、俺は伊達明。医者でもあり、後藤ちゃんの前の初代バースだ。」

しのぶ「伊達殿、後藤殿の師匠でござるか？」

伊達「まあそうなるかな。ってお嬢ちゃん、何で侍口調なの？」

しのぶ「拙者はしのぶでござる。侍に憧れてまずは形から入ろうとしたでござる。」

伊達「成る程ね。」

後藤「伊達さん、何があったのですか？」

伊達「後藤ちゃん俺が1億円の金を手に入れて、自分のケガを治しに日本を離れたのは覚えてるよね？」

後藤「あの時見送りに行かなくてすみませんでした。伊達さんなら必ず日本に戻って来てくれてまた一緒に闘ってくれると信じていましたから。」

伊達「信じてくれるなんて、お兄さん嬉しい！」

後藤「はい、自分もまた伊達さんと共に闘えるのは嬉しいです。手術は成功したんですね。」

伊達「この通り、完治出来たよ。」

あやね「伊達さんだっけ？手術したって事はどっかケガしたか病気だったの？」

雪路「どうせ、酒飲み過ぎて、肝臓悪くしたんでしょ？」

ヒナギク「お姉ちゃんじゃあるまいし……。」

遊星「それに聞いた限りでは、伊達は元バースの装着者だ。持病を持ちながら闘っていたとは思えない。」

伊達「そつ、俺はケガしたんだ。それも命に関わる程な……聞かない？」

漣司「伊達がいいなら聞け。」

伊達「オーケー、まずは俺は医者でな、世界中を回って戦争に巻き込まれ、ケガや病気になった人達を治療していたんだ。」

緋鞠「お主も素晴らしい事をしていたのじゃな。」

伊達「まあね、てか君も侍口調なのね。」

緋鞠「緋鞠じゃ。それで伊達殿は？」

伊達「内戦中の病院で、患者の治療をしていたら、流れ弾が俺の頭に当たってね。」

『！！！？』

伊達の思わぬ発言に後藤以外の人は驚き声が出せなかった。

後藤「伊達さんは一命をとりとめたが、頭に銃弾が残ってしまいそれを取り除く手術するお金が1億円必要だったんだ。」

伊達「俺はバースを開発した鴻上ファウンデーションの会長さんに、報酬を1億円にバースの装着者になりセルメダルを集める仕事をしたんだ。」

後藤「伊達さんは1億円を集め治療する為に海外に旅立ったまでは分かるのですが、その後はどうしたのですか？」

伊達「その後、完治して、日本に帰って来た時会長さんから後藤ちゃんが行方不明になったと聞いてな。もう1つ開発されていたバースドライバーと使っていたバースバスターを持ち、後藤ちゃんを探していたら、急に光に包まれて気が付いたら、あのジャングルに

いたんだ。それにしても後藤ちゃん、ここ日本じゃないよね？」

後藤「伊達さん実は……。」

後藤はここは異世界だと言つことを伊達に伝えた。

伊達「成る程ね。俺も後藤ちゃんも行人達も優人達も杉下さん達も、そして漣司もこの世界に招かれた客つて訳か。」

夜空「うう……。」

イブキ「あ……。」

伊達「おっと、お嬢ちゃん方が目を覚ましたようだ。」

伊達の言う通り、夜空とイブキが目を覚ます。

夜空「お前はさっきの……。」

漣司「俺は桐札漣司だ。」

夜空「私は、法仙夜空よ。さっきは助けけてくれてありがとう。」

イブキ「私はイブキよ。漣司、助けけてくれてありがとう。」

漣司「あー、イブキを助けたのは、この後藤だ。」

後藤「後藤慎太郎だ。」

イブキ「後藤、助けけてくれてありがとう。」

それから一夏達も自己紹介した。

漣司「夜空、イブキ。お前達は何者なんだ？」

夜空「話すわ。実は私もイブキも漣司達と同じく異世界の住人なの。私は、魔法が科学的に証明され皆が魔法を当たり前のように使える世界の住人で、私はトップの魔法使いなの。」

イブキ「私はポケモンと言うモンスターがいてトレーナーと言う人達がポケモン同士をバトルさせる世界の住人。私はそのポケモンの中でドラゴンタイプのポケモンを使い、ポケモンジムのジムリーダーをしていたの。」

亀山「2人共、俺達と同じく、急に光に包まれて？」 夜空「そう、魔法の実験をしていたら爆発して急に光に包まれて、気が付いたらこの世界に。何故だか分からないけど、身体能力、魔力、魔術が格段に上がっていたわ。」

イブキ「私はポケモンバトルの時、相手のポケモンが急に光出して、この世界に。手持ちのポケモンが居なくなってしまったけど、代わりに身体能力が上がっていて私自身がドラゴンタイプの技を使えるようになっていて、技を使用するために消費する夜空と同等の魔力を手に入れたわ。」

夜空「私達はこの世界に来た瞬間に会って、互いの事情を知り、依頼人の依頼をこなしながら、フリーの傭兵みたいなのをやっていたの。」

イブキ「でも今回、食材の調達の依頼を受けた内容がパワーアッ

プした私達でも手におえなくて、失敗し、依頼人の怒りを買って追われ、あの密林に逃げて来たの。」

小松「あの、ちなみに、その食材って？」

夜空「この島の砂漠にあるクロスピラミッドの守護獣、『サラマ
ンダースフィングス』の涙から採れる、世界一旨いコーラ『メロウ
コーラ』を。」

トリコ「『サラマンドースフィングス』は俺と小松とゼブラがや
つと『メロウコーラ』を出すことが出来た奴だぞ！よく死ななかつ
たな。」

イブキ「ええ私達は何とか隙を見つけて逃げる事が出来たけど、
魔力と体力をひどく消耗してしまつて。」

夜空「おかげで、大した実力もない依頼人からも逃げるしかなく、
さっきの化け物にも魔力を吸収されもうダメかと思つたわ。」

まち「でも良かったじゃない。魔力を吸収され尽くされる前に漣
司様と後藤様に助けてもらつて。」

優人「確かに後一步遅かつたらどうなつていたか。」

神戸「流石、桐札君と後藤君ですね。」

漣司「それにしても、俺は転生してこの世界に来たが何で後藤達
は元の世界から直接来たのだろう？」

漣司はそう言った瞬間、何かを感じ取り、医療室の外側の窓を開

けた。

愛歌「どうしたの漣司君？」

漣司「また、恩人に会うことになるとは。その恩人が突っ込んでくる。」

セシリア「え？」

鈴「は？」

キョーコ「どう言つこと？」

レイ「やつーーーーーほーーーーー!!」

『空から少女が降ってきたーーーー!?!』

漣司と千冬と杉下以外は空からレイがこっちに向かって突っ込んでくるのに驚いたのだ。

漣司「よつと。」

漣司はレイを受け止めた。

レイ「ありがとう漣司君」

漣司「どういたしまして。」

第「漣司、その子は誰なんだ？」

凜子「漣司の妹？」

漣司「いや、この人は新人の神であるレイ。俺をこの世界に転生してくれて仮面ライダーの力をくれた俺の恩人だ。」

『ええー！！？』

千冬「ほう。」

杉下「なるほど。」

レイの頭を撫でる漣司の言葉に皆が驚いき千冬と杉下は感心した。

漣司「レイ、今回はどういう件で来たんだ。」

レイ「うん、さっきの漣司君の疑問に答える為に来たんだよ。」

レイは急に、真面目になり出した。

レイ「そして何故私が転生させてまで漣司君を、この世界に送ったのかを話すよ。」

レイが話す事実が誰もが驚愕することになるとは、この時、千冬でも杉下でも予期出来なかった。

その23 伊達のカミングアウトと集いし主人公達と三度目の神（後書き）

もう少ししたら主人公達の設定を投稿します。

その24 主人公達とメモリの力と裸エプロン（前書き）

9割シリーズで1割がほのぼの系かな。

その24 主人公達とメモリの力と裸エプロン

レイ「じゃあ、説明したいけど、そろそろ来るかな？」

漣司「ん？・・・！」

漣司はまた窓を見た。

束「やつーーーーーほーーーーー！！！」

人参型のロケットが近付いてきた。

ドカーーーーーーン！！！！

人参は外の地面に着地ではなく激突した。

漣司「束さん相変わらずだな・・・。」

篝「まあ姉さんらしいと言えば姉さんらしいが・・・。」

漣司と篝は若干呆れていた。

一夏は苦笑い、千冬は頭を右手を額に当て困っているし、杉下は「人参型の飛行物体ですか。」と感心していて、他の皆は呆然としていた。

束「やあやあ、皆元気にしていたかな。天才の束さんだよ」

レイ「久し振りだね〜 束ちゃん〜」

束「本当に久し振りだね〜 レイちゃん〜」

束とレイは抱き締め合う。

漣司「束さん、レイと知り合いなのですか？」

束「そうだよれつくん。れつくんの黒桜が出来た後に知り合ったかられつくんよりか短いけどね。」

篝「姉さん、神とまで知り合いを持つとは・・・。」

束「まあ、篝ちゃん、そこがホレ、束さんだから。」

漣司「レイ、束さん、そろそろ本題を教えてくださいませんか？」

レイ「うん、まずはこの世界に何が起きているか説明するね。」

漣司 side

レイ「まず漣司君、この世界に、ドーパントが現れて何度か闘っているよね？」

漣司「ああ、会ってきた奴らは皆と共に、メモリブレイクして倒したが。」

レイ「じゃあ、この世界にはガイアメモリが存在しないことは知っていた？」

漣司「えっ!？」

レイ「知らなかっただろうね。私でさえもこの世界には漣司君に持たせたのがはじめてだから。」

俺は驚いた。ここはクロスオーバーの世界だからガイアメモリが存在していても変に思わなかったからだ。

レイ「後藤君に伊達君。ヤミーはグリードから造られるのは知っているよね？」

後藤「はっ、はい。」

伊達「俺もあいつらは苦手だったな。」

後藤は神の前だろうか若干緊張気味に答え、伊達は思い出しながらしみじみと答えた。

レイ「後藤君、緊張しないでいいんだよ。リラックスしてね。」

後藤「はい。ありがとうございます。」

レイ「うん、よろしい 続きだけどね。そのグリードもガイアメ

モリと同じくこの世界にはいないのだよ。」

後藤「なるほど、どうりでグリードが邪魔に入って来ないか説明がつく。」

伊達「ってそうなるとそのガイアメモリもヤミーもどつから来たんだ？」

行人「もしかして僕達と同じく・・・。」

レイ「そう、行人君。誰かが、異世界から連れてきたのだよ。」

くえす「それは一体誰が？」

レイ「そこまで分からなかったよ。この世界の住人が、私と同じく神なのかさえ、でもその張本人はナンバーズカードまでこの世界にばらまいてしまつてこの世界は混沌の世界になってしまう恐れがあったの。」

優人「それってなんとかならないの？・・・。」

レイ「まず、この状況を打破するために私は漣司君に持たせたジョーカーメモリと12本のガイアメモリを作ったの。」

神戸「そして、貴女は僕達をこの世界に招いたのですね。」

レイ「うん。私が招いたの。既にこの世界にいたのと招いた子達、12人の戦士を集めるために。」

すず「12人の戦士？」

レイ「うん、12本のガイアメモリにそれぞれの適合率が100%の戦士と私と呼んでいるの。漣司君、12本のガイアメモリを出して。」

レイに言われた通り、12本のガイアメモリを出すと俺の手から離れ、俺を中心にして回り始め輪を作っていた。

レイ「織斑一夏君。」

一夏「えっ、はい！」

一夏が返事した瞬間、空色のガイアメモリ、スカイメモリが輪から外れ一夏とレイの間に現れた。

レイ「一夏君は空の記憶を宿したスカイメモリの適合者なの。」

一夏「俺が戦士の1人？」

レイ「そうだよ。白式に超音速飛行が可能なの。次に綾崎ハヤテ君。」

ハヤテ「はい。」

今度はハヤテの前に緑色のサイクロンメモリが現れた。

レイ「風の記憶を宿したサイクロンメモリは風を操るだけでなく、超高速の移動が可能だよ。」

ハヤテ「僕にピッタリですね。」

レイ「うん、じゃあ、次に後藤慎太郎君。」

後藤「はい。」

後藤の前に黄色のサンダーメモリが現れる。

レイ「雷のサンダーメモリはセルメダル代わりにバースの動力源になり、バースの武装に雷の力を宿らせる事が出来るよ。」

後藤「これで皆と一緒に世界を守れる。」

レイ「うん、次に伊達明君」

伊達「あいよ。」

伊達の前に銀色のメタルメモリが現れた。

レイ「金属のメタルメモリは伊達君のバースの使用するセルメダルの量が倍になっちゃうけど、代わりにバースの武装と出力と耐久力が格段に上がるよ。」

伊達「よし、お兄さん頑張りますか。」

レイ「うふふ、頑張つてね。次に不動遊星君。」

遊星「ああ。」

遊星の前に灰色のウェーブメモリが現れる。

レイ「波動のウェーブメモリは遊星君のデッキのモンスターに波動の力を宿らせて敵に物理的に攻撃を与える事が出来るよ。」

遊星「なるほど。」

レイ「遊星君なら大丈夫だから、次にトリコ君。」

トリコ「おう。」

トリコの前に茶色のグランドメモリが現れた。

レイ「地のグランドメモリはトリコ君の能力を数十倍にまで上げる事ができ、周囲の重力をコントロール出来るよ。消費カロリーも数十倍に跳ね上がったけど。」

トリコ「飯の量が多くなりそうだ。」

レイ「気を付けてね。次に阿久野ジロー君。」

ジローの前に橙色のボイスメモリが現れた。

レイ「音のボイスメモリはジロー君のマントに音の力を、ジロー君自身には聴覚が発達していてその能力はゼブラ君と同等だよ。」

ジロー「使いこなせるか心配だ。」

レイ「大丈夫。次に東方院行人君。」

行人「はい。」

行人の前に白色のアイスメモリが現れた。

レイ「氷のアイスメモリは行人君が修得している東方院家の武術に氷を操る能力でかなり有利な闘い方が出来るよ。」

行人「取り敢えず頑張るかな。」

レイ「うん、次に天河優人君。」

優人「はい。」

優人の前に金色のライトメモリが現れた。

レイ「光のライトメモリは優人君の天河家の力『光渡し』の力を極限にまで上げて仲間達もその恩恵を受けることが出来るよ。」

優人「俺の力を・・・。」

レイ「そう、逆転の可能性を秘めた力だよ。次にイブキちゃん。」

イブキ「はい。」

イブキの前に水色のアクアメモリが現れた。

レイ「水のアクアメモリはイブキちゃんの魔力とドラゴンタイプの技の強化だけでなく、イブキちゃんの意味で全ての水を自由自在に操る事が出来るよ。」

イブキ「氷もか？」

レイ「アイスメモリよりか劣るけど一応使えるよ。次に法仙夜空ちゃん。」

夜空「私？」

驚く夜空の前に紫色のダークネスメモリが現れた。

レイ「闇のダークネスメモリは夜空ちゃんの魔力と魔術強化だけでなく、万物を支配出来る能力まで備わっちゃったの。」

夜空「これは気を付けてないとな。」

レイ「うん、気を付けてね。そして最後に漣司君の相棒の篠ノ之箒ちゃん。」

箒「はい。」

箒の前に紅椿と同じ色の深紅のフレイムメモリが現れた。

レイ「炎のフレイムメモリは12本の中でもトップクラスの能力でね、紅椿に炎の力を宿らせる他、絢爛舞踏を発動中、相手の攻撃も吸収してエネルギーに変換する事が出来るの。」

箒「私が戦士の1人なのか？」

レイ「そうだよ。漣司君や一夏君、仲間達と共に頑張ってね。」

ゆきの「行人達はすごいね。」

雪路「これで一安心だわ。」

レイ「けど。」

12本のメモリは一夏達から離れ、再び俺の周りに回り始めた。

レイ「まだ君達はまだメモリを使う事ができないんだよね。」

『えっ?』

皆が驚く。まだ使えないとは?

ヒナギク「どういう事ですか。」

レイ「理由は簡単、それぞれのメモリの覚醒が出来てないからだよ。」

亀山「どうすればいいんだ?」

レイ「仮面ライダージョーカーがそれぞれのメモリでフォームチェンジすればいいんだけど、ジョーカーメモリとフォームチェンジのメモリ、1人で2本のメモリを使っているからいくらドライバーやメモリリングが制御しているからって、並みの装着者は使った途端にメモリの強力な力や副作用、暴走に耐える事が出来なくなつて最悪の場合、即死に繋がる。」

『!!!?』

皆が驚く。それは仕方無い事だ。驚くなと言う方が無理だ。俺もそうなってしまうのか……。

第「それじゃ漣司は・・・！」

束「ところがれつくんだだけは例外なんだよ。」

えっ？

レイ「漣司君、君が死んで私の所に来た時、体を調べさせて貰ったんだ。」

漣司「そうなのか？」

レイ「ごめんね。それで分かったんだけど漣司君はガイアメモリの副作用や暴走の力を殆ど受け付けない体質みたいなんだよ。」

束「れつくくんはフォームチェンジしても体力を激しく消耗だけになるみたいだよ。」

レイ「漣司君はガイアメモリに祝福されている子なのかもね。」

一夏「よかったな！漣司。」

漣司「だが、それでも樂觀視は出来ないな。まあなんとかなるだろう。」

レイ「そうだね。油断は禁物だけど漣司君なら大丈夫。」

凄い信頼されているな俺。

杉下「漣司君達は分かりました。僕達は何故？」

レイ「他の子達も闘って貰いたくて来てもらい、杉下君、亀山君、神戸君は刑事の経験を活かして皆を鍛えてほしいの。」

杉下「なるほど分かりました。」

千桜「私達も闘って大丈夫なのですか？」

レイ「漣司君と戦士の子達だけじゃ戦力不足だと思うの。」

まち「確かに。戦力は多い方が良いわ。」

束「まあこの束さんが皆にも使える武器を作って上げるから安心したまえ。」

レイ「さて、伝える事は伝えたし、皆じゃあね〜」

レイは光に包まれ消えていった。

漣司「さて皆明日からの特訓だ・・・の前にりん。」

りん「い、いやいいんだぜダンナ。あたいなんかより、特訓しよ
うぜ。」

漣司「いや、千桜や楯無だけだと不公平だからな。明日、俺と一緒に過ごそう。」

りん「ダンナ・・・。ああよろしくなダンナ！」

午後9時、あれからは夕飯を食べ、これからの対策を考えてから解散した後、俺は自分の部屋のドアを開けた。

そこに裸エプロン姿の楯無がいた。

楯無「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」 バタン

そう言えば楯無とはあんまり過ごせなかったな。俺はもう一度ドアを開けた。

楯無「お帰り。私にします？私にします？それともわ・た・し？」

漣司「見事に選択肢が1つしかないな。」

その後、俺は楯無にちゃんと着替えさせ、トランプしたりテレビ見たりして過ごした。

その24 主人公達とメモリの力と裸エプロン（後書き）

ミニコーナー

漣司「桐札漣司だ今回から始まったミニコーナーだが、作者が自由によつてくれと頼まれたから俺はジョーカーメモリについて教えるぜ。」

ジョーカーメモリ

切り札の記憶を宿したガイアメモリ。格闘能力を極限にまで上げる。

Wの場合、サイクロンメモリとでは最も戦闘バランスが良いサイクロンジョーカー、ヒートメモリとではサイクロン以上の肉弾戦に特化したヒートジョーカー、ルナメモリだとトリッキーな戦闘が出来るルナジョーカー、さらに翔太郎1人で変身する仮面ライダージョーカーになる。この小説では漣司が仮面ライダージョーカーに変身して12本のメモリを使いながら闘う。

他のメモリとも相性が良く使い勝手が良いメモリの1つ。

漣司「てな具合だ。このミニコーナーは毎回代わるから楽しみにしてくれ。それじゃ皆ありがとう。」

その25 三日目と意見と不安を消し去る切り札（前書き）

残業で更新速度が遅くなるかもしれない・・・（泣）。

その25 三日目と意見と不安を消し去る切り札

3月21日 午前10時 学園地区 九路洲学園 第2アリーナ
観客席 行人side

アリーナの中央で私服姿の漣司と訓練機用IS『打鉄』を纏って、支給されたISスーツ姿のりんが向かい合っていた。

漣司「俺もやるか。」

漣司は右手に持っているロストドライバーを装着し、左手でジョーカーメモリを持った。

『ジョーカー!』

ジョーカーメモリをロストドライバーに挿入した漣司は左手を顔の前に、右手をドライバーの位置まで下げた。

漣司「変身。」

『ジョーカー!』

右手でドライバーを展開させ、左手の親指と人差し指でりんに見せるようにJの文字にさせ、仮面ライダージョーカーに変身した。

漣司「次に。」

漣司は左手首にメモリリングを嵌め、『IS』と印された。蒼いメモリを出した。

『IS<インフィニット・ストラトス>!』

漣司はISメモリをメモリリングに挿入した。

『ISジョーカー!』

メモリリングからISのアーマーが現れ、ジョーカーに装着されて、ジョーカーはISジョーカーフォームにフォームチェンジした。

りん「ダンナ、準備はいい?」

りんは『打鉄』の基本装備の日本刀型の近接ブレードを持ち構える。

漣司「ああ、何時でも良いぜ。」

漣司は自然体で立っていて右手にはISキャリバーを持っている。

山田『それでは、桐札漣司対りんの模擬戦を始めます。』

山田先生のアナウンスが流れる。

山田『3。』

漣司は右手をISキャリバーの柄に左手を峰部分に添えるように構えた。

山田『2。』

りんもさっきより近接ブレードを強く握る。

山田『1。』

漣司もりんもそのまま動かず。

山田『始め!』

漣司　りん「「はああああああ!!!!」」

始まりの合図と共に両者が互いに突っ込み、刃を交えた。

ガキンツ！　ガキンツ！　ガキキキンツ!!!!

共に剣で斬り合い、両者一步も譲らない。

漣司「くっ！やはり、りんの一撃一撃が重い！」

りん「ダンナこそアタイの攻撃の威力を殺しているから凄い！」

三日目、りんが漣司にアピールする日。当初の予定は漣司がりにバイクの乗り方を教えるの立ったけど、昨日の事でりんが急遽漣司に試合を申し込んだ。漣司の力になりたいみたいだ。

それにしてもりんと言いい藍蘭島の住人の女の子達がこの世界に来たのは正解かも知れない。僕以外の男を知ることが出来たから。

ヒナギク「凄い……。」

亀山「へえ」。ISがこれ程とは右京さんどう思いますか？」

杉下「ISの性能にも驚きましたが、漣司君もりんさんもまるで自分の体の一部のようにISを動き慣らしてますね。」

そう言えば、運動能力の良い子はISの訓練しているて聞いたけどりんもしてたのかな？

緑谷「流石漣司君。一夏君の次に2人目の男のIS操縦者だね。」

セシリア「あら、漣司さんはISを操縦する事は出来ませんよ。」

行人「え？」

ナギ「何を言っているのだ？現に漣司はISを動かしているではないか。」

一夏「束さんの話だとISメモリにはISが搭載されてなく。ジョーカーを対IS用にジョーカーの力を制御する為のメモリらしい。」

あやね「どう言う事？ISって世界最強の兵器でしょ。何でジョーカーの方が力を制御させる必要があるのよ？」

第「確かにISはかなり強い兵器だ。だが、ISは対IS用で怪人や未知の生物を闘う為に作られていないんだ。」

鈴「ISは元々宇宙進出を前提に開発されたからね。今では持て余したスペックで武装が取り付けられ、兵器、スポーツに発展させられているけど、少なくとも、元々戦闘用には作られてないはずよ。」

シャルロット「それに対して、仮面ライダーのシステムは最初から対怪人用に作られているから戦闘に特化しているの。」

ラウラ「だからいくらISと云えど、根本的に作られている目的が違うから、仮面ライダージョーカーの方が戦闘力が高いんだ。」

簪「だから、漣司君はISの模擬戦する時はISメモリに内蔵されている『蒼椿』でジョーカーの力を制御しているんだ。『蒼椿』はISじゃなくてジョーカーの制御媒体。」

驚いた。僕はてっきりジョーカーを対IS用にまで強化させるんじゃないくて、ISに合わせてジョーカーの力を制御していたんだ。確かに、途中から戦闘用に改良する物より、初めから戦闘を前提に開発された物の方が、断然、そっちの方が戦闘能力に優れている。

まち「それにしても漣司様は武術を修めているようには見えないわね。」

緋鞠「そうじゃの、漣司殿は剣の扱いが素人に近い。」

マッチ「りん比べれば上だが、何と云うか、いつも力一杯に振り上げ、力加減が出来てないみたいだな。」

ヒナギク「まあ、東宮君みたいに竹刀を乱暴に振り回すよりは、大分マシね。」

西沢「ヒナさん、何気に東宮君の心に傷付くような事を言っているね・・・?。」

伊達「まあ、多分漣司は体は鍛え上げてケンカ慣れはしていても、武術を修得したり、俺や後藤ちゃんみたいに特別な訓練を受けてないからそうなってくるんじゃないか?。」

後藤「伊達さん、そうなって来ると武術を修得している子や、ラウちゃんみたいに軍の訓練を受けている相手には漣司は苦戦するのではないですか?。」

千冬「だから、桐札には織斑と同じく、軍の訓練と織り混ぜた特訓を密かにさせている。織斑はともかく、桐札は薄々気付いているようだが。」

一夏「千冬姉、いつの間に・・・ってか俺と漣司に密かにそんな特訓させていたのかよ・・・。」

スパーーーン!!!!

千冬「今は織斑先生だ。生徒は先生には敬語を使え馬鹿者。」

一夏「すみませんでした・・・。織斑先生・・・。」

一夏は織斑先生がいつの間にか所持していた出席簿で脳天を叩かれていた。

僕はあれを防げる自信がない・・・。

千冬「安心しろ東方院。馬鹿をやらなければ、『これ』を受ける

事はない。」

織斑先生、貴女は、超能力者か何かですか？

千冬「さて、諸君。そろそろ決着が付く。よく見ておけよ。」

僕達は織斑先生の言葉に試合を見ていた。

りん side

漣司「すうー、はあー。」

りん「はあ、はあ、はあ・・・。」

試合が始まって暫くはダンナとは剣の打ち合いをしていたが、あたいの方がスタミナが切れかけていて、どんどんシールドエネルギーってのが奪われていく。あたいはこんなにも息が絶え絶えなのに、ダンナは深呼吸をしてリラックスしている。

正直、悔しい。ダンナに勝てない事じゃなくて、ダンナの力になれるどころか足引っ張るんじゃないかと。

漣司「りん。」

りん「ん？ なっ、何？」

漣司「その表情からして不安があるのか？」

りん「！」

当てられた。あたいは考えている事が分かりやすいのか。

漣司「大丈夫だ。不安があるならそれを思いっきり俺にぶつけて来い。受け止めてやる。」

りん「ダンナ・・・。」

不安や悩みなどその言葉で消えていく。ああ、だからあたいはダンナを、桐札漣司を好きになったのか・・・。

りん「なら、行くぜ、ダンナ！」

漣司「ああ、来い！」

りん「はああああああ！」

あたいはダンナ目掛けて突っ込んでいく。

あたいはブレードを頭上まで上げるとダンナに目掛けて一気に振り落とす。

ガキン！！！！

漣司「くうっ！」

りん「渾身の一撃を・・・！？きゃあ！」

ダンナはISキャリバーをあたいの一撃横にして受け止めたばかりか、右足を蹴り上げて、あたいを頭上十メートル位に蹴り飛ばした。

漣司「はあ！」

りん「！」

ダンナは私に目掛けてISキャリバーを投げて来たのであたいはブレードで弾き飛ばしたが、下にいたダンナはあたいの目の前にいた。

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

漣司「ライダーパンチ！」

ダンナの右手には紫色の炎が宿っていた。

りん「はあ！」

チツ！

あたいはブレードで突きを放ったが、ダンナは紙一重で右頬を掠めるように避け、ダンナのパンチがあたいの腹に炸裂し、ISの絶対防御が発動し、エネルギーを大幅に奪われて、0になった。

山田「試合終了！勝者桐札漣司！」

山田先生の試合終了の合図と共に私は疲労の性か、地面に大の字に仰向けになって倒れて、意識を手放した。

その25 三日目と意見と不安を消し去る切り札（後書き）

ミニコーナー

箒「篠ノ之箒だ。今回は私だ。東宮と黄村があの後、どうなったか説明しよう。」

まず2人は謹慎中に部屋を抜け出した事と生徒会室を派手に壊したことで、千冬に10連釘パンチならぬ10連出席簿アタックを喰らい、謹慎1週間の追加と反省文として400字詰め原稿用紙500枚書かされる。

束は箒を泣かせたのと痛め付けようとした事でネット上に社会的に充分抹殺出来る2人の恥ずかしい写真をばらまこうとしたが、漣司、一夏、箒の3名に止められる。

束を止めた漣司と一夏だが、代わりに死神も顔真つ青の地獄の特訓メニューを2人にさせた。

東宮は反省したが黄村は懲りていない様子。

箒「漣司、一夏、姉さん……。私の為なのは嬉しいが、やり過ぎだと思う……。そろそろ終わりだな皆ありがとう。」

その26 変態くの一とゴーレムと和服美人（前書き）

早めに投稿出来た・・・。

その26 変態くの一とゴーレムと和服美人

e 同日 午後0時半 学園地区 九路洲学園 医療室 りんsid

りん「ん……。」

漣司「おっ、起きたか。」

目が覚めたら、あたいはISスーツを着たままベツトに寝かされていて、側の椅子に座って本を読んでいたダンナがいた。

りん「ダンナ、あたいは……。」

漣司「試合終了の直後、りんの打鉄が強制解除されたからどうしたのかと思ったのか、お前の意識が無くてな。俺が医療室まで運び、伊達先生に見てもらったんだ。」

そっか、あたいは負けたのが分かったその瞬間突然意識を失ったんだ。

漣司「伊達先生と千冬さんの話だと、ISを装着しての極度な戦闘をしたせいで心身共に酷く消耗したのでは無いんじゃないかと。りん、結構無理していたんじゃないのか？」

りん「うつ……。」

実はあたいのIS稼働時間と言うのが、千桜と同じ位で1時間。専用機つてのを持っている人を除いて、あたいと千桜が1番長い。けど、実際ダンナと試合したら5分も持たずにスタミナ切れで倒れてしまった。

「
漣司「無理はするな。まだ時間はある。ゆっくり強くなればいい。」

りん「ああ、ごめん、そうだね……。ん？」

ふと、あたいはある事を思い出してダンナに聞いてみた。

りん「ダンナ、あたいをここまで運んでくれたのはダンナだよな。」
「？」

漣司「えっ、そうだが。」

りん「あたいをどうやって運んだんだ？」

漣司「最初は背負って運ぼうとしたんだが、周りの女子が『えっ、おんぶなの？』、『ここはお姫様抱っこでしょ？』、『しなかつたら漣司君男じゃないでしょ！』みたいな目で訴えられてな。抱いて運んだんだ。」

あたいは一瞬呆けてしまう。

りん「それってお姫様抱っこで運んだって事……。？」

漣司「……。ああ。」

ダンナが恥ずかしながら言った。

ボンッ！！ プシューー。

あたいは顔が真っ赤になるのを感じた瞬間ショートしてしまった。

漣司「おい、大丈夫か!？」

りん「うん・・・何とか。」

りん「ダ、ダンナ・・・、重かった？」

漣司「いや、寧ろ軽すぎだ。」

ダンナが言う。そう言えばダンナはISキャリバーを生身で素振りしていたのを見た。あたしも持たせてもらったが、藍蘭島のメンバーの中で1番の怪力なあたいても1回の素振りがやっとな程の重さだった。それに比べればあたいは軽い方なんだな。

バン！

みこと「漣司はん！大変や・・・って、りん姉え様に手を出してないやろな!」

漣司「みこと、お前が心配しているような事はしてない。」

りん「みこと、お前・・・。」

みことが入って来た。折角ダンナと2人つきりだったのに・・・。

漣司「りん、みことはお前を心配していたんだ。あまり邪険扱いはするな。」

りん「わかった……。」

そうだな。みことも心配してくれたんだ……。邪険扱いしないで……。

みこと「くそっ！姉様だけだったら寝込みを襲えるのに！」

前言撤回、やはり邪険に扱おう。

漣司「それよりもみこと、何が大変なんだ？」

みこと「そうや、漣司はん。黄村っていうデブがまた問題起こしてんねん！」

漣司「黄村が？千冬さんから1週間の謹慎追加で謹慎室に閉じ込められているんじゃないか？」

みこと「なんか知らんけど、いつの間にか脱け出していて、変なISみたいなのが2体と一緒に大暴れしてんねん！」

漣司「変なIS？……って、訓練用の無人ゴーレムの事か。」

みこと「そう！それぞれ！」

漣司「束さんが俺達を鍛えるために制作したゴーレムが何故？……黄村の奴ハッキングして自分の味方にしやがったか……。」

ダンナは呆れると同時に怒りが込み上げて来るのがあたいにはわかった。

漣司「場所は？」

みこと「えーと、この端末機の情報だと地下の大型格納庫で専用機持ちと伊達先生、後藤はん達が食い止めてる！」

漣司「よし、俺が行ってくるから、みこと！りんを頼む！」

みこと「了解したで〜」

りん「へっ？ちょ、ちょっとダンナ！？」

ダンナは颯爽と医療室から出ていってしまう。

みこと「りん姉様、ウチが看病するさかい、安心してな〜う
っへっへっ〜」

マズイ、疲労で体が満足に動かない。

みこと「とうっ！」

みことがあたいが寝ている布団にダイブした。
ちよつとやああああああ〜！ダンナ〜！助けて〜！

後藤「皆大丈夫か！」

トリコ「ああ、・・・くそっ！」

遊星「なんとかな。」

ジロー「くそっ！場所が場所だから闘いづらい。」

俺達は互いに無事を確認する。

伊達「格納庫の備品を破損させずに闘うのはキツイね。」

後藤「黄村もそれをわかってわざとゴーレム達を備品に攻撃させている。」

そう、ここの格納庫は結構重要な物が格納されている。破損は極力避けたいが、黄村がゴーレムにわざと備品に攻撃させている。俺達が防御しているがダメージが多すぎて皆が本格的にヤバい。

黄村「ふっはっはっはっ！ナンバーズはあれだったがこっちは使い勝手がいい！」

黄村はインシャルがCのガイアメモリを俺達に見せた。

黄村「このコントロールメモリが俺に力を与えた！」

あのメモリでゴーレムを操ってたのか。

鈴「あいつぶん殴ってやりたいけど私達も限界だわ……。」

シャル「ゴーレムの火力が強すぎて予想外のダメージだよ。」

束さん訓練用だからって規格外過ぎるだろう……。

黄村「このままじゃお前達が負けるのは目に見えるが篠ノ之をここに渡せば見逃してやるよ！」

一夏「なっ……！？そんなの「それでいいんだな？」って箒！？」

箒は紅椿を解除してISスーツの姿になった。

箒「私が来れば、皆を見逃してくれるのか？」

黄村「ああ。」

箒、嘘だろ……？行くな！

箒「一夏……、私は皆が無事だったらそれだけでも「箒、その必要はないぜ。」えっ？」

黄村「何……へぶっ！？」

黄村の右頬に漣司の膝蹴りが炸裂した。

一夏「漣司！」

後藤「漣司、来てくれたのか。」

漣司「ああ、みことから連絡受けてな。箒。」

箒「漣司・・・、ひゃあ!？」

漣司は箒の前に立つと箒にデコピンをした。

漣司「1人で背負い込むな。こう言う時こそ相棒に頼るもんだろ。」

箒「漣司・・・。」

漣司「お前が皆を無事なのを祈っているように皆もお前の無事を祈っているんだ。」

箒「!!！」

漣司「だから自己犠牲は考えるな。仲間達を頼れって、俺も箒には言えたもんじゃないしな。さてと・・・。」

箒に優しい雰囲気だった漣司なのに、倒れている黄村に近づくと黄村の胸ぐらを掴み、無理矢理立たせた漣司の表情は静かな怒りを見せた。

黄村「桐札・・・、ごはっ!ぶはっ!へぶっ!」

黄村が言い終わる前に漣司は黄村の両頬1回ずつ殴り、最後に頭

突きをした。頭突きのせいか、黄村の鼻の骨は完全に折れ鼻血が出ている。

漣司「この前で一夏と共に地獄の特訓させた東宮は反省しているのに、お前はまだ懲りてないどころかまた箒を傷付けようしたよな？あ？」

ヤバイ、漣司を止めたいけど気迫に圧されて動けない。

黄村「よそ見していいのか？」

黄村がニヤリと笑った。

漣司「あ？・・・ん？」

ハヤテ「漣司君危ない！」

漣司の後ろにゴーレムが漣司を殴ろうと拳を振るった。

黄村「お前をこのまま、物言わぬ肉の塊にして『ガキンツ！』！？」

俺達は信じらなかった。漣司は黄村を睨んだまま、左手で持ったISキャリバーで後ろのゴーレムのパンチを防いだ。

ゴーレム『！！！！？？』

ゴーレムは力を入れているが拳が小刻みに震えている。漣司は圧さられているところかISキャリバーのを持った左腕を微動だに動かない。

「漣司「てめえ、箒だけじゃなく、東さんの名まで汚す気か？コラ。」

漣司は右手をロストドライバー、ジョーカーメモリの順に装着、装填、展開した。

漣司「変身……。」

『ジョーカー！』

ジョーカーに変身した漣司はISキャリバーでそのままゴーレムの右腕を真つ二つにしてISキャリバーにISメモリを装填した。

『IS<インフィニット・ストラトス>！マキマシマムドライブ！』

漣司「はあ！セイヤア！」

漣司はISキャリバーを横一線に振ると、空間ごとゴーレムが横真つ二つにずれた。空間は巻き戻したように戻ったがゴーレムは戻らず爆発して破壊された。

漣司「まだだ。」

今度はジョーカーメモ리를腰のメモリスロットに装填して押した。

『ジョーカー！マキマシマムドライブ！』

漣司「ライダーキック。」

漣司は後ろにいたもう1体のゴーレムのプラズマ手刀を腰を落として避けゴーレムの頭に回し蹴りを放ち、ゴーレムを破壊した。

黄村「くっそーならば・・・っていだだだ!？」

黄村がコントロールメモリを使おうとする前に漣司が黄村の手をひねり上げ、メモリを落とさせた。

漣司「使わせると思ったか？よつと。」

黄村「うつ・・・。」

黄村にデコピンをして気絶させた漣司はそのまま床に落ちたコントロールメモリを右足で踏み潰した。

同日 午後7時 九路洲学園 学生寮 漣司達の部屋前 漣司's
ide

俺は他の皆に連絡して一夏達を医療室まで運んだ。全員、たいした怪我は無かったようだ。一夏が念のため俺の左腕を見てもらえと言ったから、伊達先生に見てもらったら、骨は異常無かったが軽度の捻挫らしい。ISキャリバーとはいえ生身でゴーレムの攻撃を受け止めたんだ。この程度で済んだのは奇跡に近いのか？

黄村はどうなるのかはわからない。反省の色が無いからな。

ゴーレムの中から取り出した、ISコアは束さんが『私の子を止めてくれたお礼にれっくんの好きにしてくれたまえ』と言って俺が

管理している。丁度良い、このコアを使って仲間達と共に千桜と鈴の専用機を開発しよう。

俺はそう考えながら、部屋に入ると着物姿のりんがいた。

りん「お帰りダンナ腹減っているだろ？晩飯作ったから食べて。」

テーブルには和食を中心とした料理が並べられていた。

漣司「りん、一緒に食べるか？」

りん「いいの？」

漣司「ああ、和服美人と一緒に食べた方が楽しいからな。」

りん「ダンナ……。うん。」

一緒に晩飯食べた後、大工の話をしてくれたり、ボードゲームで遊んだりして寝るまで楽しく過ごした。

その26 変態くの一とゴーレムと和服美人（後書き）

ミニコーナー

東「はろー天才の篠ノ之束さんだよ。今回はれつくんが使っているISキャリバーとISメモリの説明をするよ。」

ISキャリバー

束が漣司にプレゼントした万能型の大型剣。見た目はオーズの専用武器メダジャリバーだがメダルの投入口の代わりにマキシマムスロットが付いている。メダジャリバーに比べて一回り大きく、重さもメダジャリバーの3倍だが漣司は毎日それで素振りしているから、片手でも扱える。

付属のISメモリをマキシマムスロットに装填するとマキシマムドライブが発動して、空間もろとも敵を斬り、空間だけを戻し、敵を倒す「ISスラッシュ」が出来る。

ISメモリ

漣司がジョーカーに変身してメモリリングにISメモリを装填するとアーマーが出てきてジョーカーに装着されて「ISジョーカーフォーム」になる。

蒼で装飾され紅椿に似ているから漣司は蒼椿と名付けた。

このフォームは蒼椿がジョーカーをISのレベルまで制御させるので、全フォーム中、最下位のスペックだが代表候補生とその専用機とは十分に渡り合える程の戦闘力がある。

必殺技はジョーカーと同じく「ライダーパンチ」、「ライダーキック」。

東「まあこんなものかな。おっ時間だね。それじゃバイバイ」

その27 2つのコアと開発と7色のメダル（前書き）

活動報告で書いた通り、編集し直しました。ちなみにその09とその16です。

その27 2つのコアと開発と7色のメダル

3月22日 午前9時 学園地区 九路洲学園 IS整備室
ot side n

ここは生徒達がISとISの兵装の開発、整備する事が可能なIS整備室。

この整備室に13人の主人公の他にセシリア、鈴、シャル、ラウラ、楯無、簪、虚、本音、ブルーノ、トオル、ミサキに今回集まった理由の千桜にりん、更に立会人として千冬、山田、杉下、そして興味本意で来た亀山、神戸、謹慎が解けた泉、美希、理沙の生徒会3人娘が集まっていた。

箒「漣司、腕は大丈夫か？」

漣司「ああ軽い捻挫だが、骨には異常はないな。」

箒「そうか、無理はするな。私に頼ってくれ。」

漣司「ああ、頼りにしているぜ。相棒。」

千冬 杉下以外（もう付き合っているしか見えない・・・。）

漣司と箒の会話に千冬はやれやれといった感じで見て、杉下は2

人を見て、「本当に2人は仲がよろしい」と感心したり、楯無、千桜、りんは羨ましそうに見ている。

千冬「やれやれ、桐札と篠ノ之は特殊な関係になったものだな。」

伊達「これで互いに恋愛感情が無いつてのは驚きだね。」

トオル「何かそう言う意味では残念な関係だな・・・。」

ミサキ「・・・トオル、人の関係にいちやもん付けるのは不粹・・・。」

遊星「まあ、確かに2人が納得しているなら、俺達がどうこう言うものじゃないな。ん？どうした一夏？」

一夏「遊星！？あつ、いや、何でもない・・・。」

後藤「？（一夏、漣司と篝ちゃんがああやって話しているとぼーっと見ているようだがどうしたんだ？）」

千冬「さて、桐札と篠ノ之、話はこれくらいにして桐札、本題を。」

漣司 篝「はっ、はい。」

泉「あつ、ハモった。」

美希「漣太君、篝君、息ピッタリだな。」

理沙「本当は付き合って「よし、今から俺と一夏と篝でお前ら

に地獄のIS特訓を……。」「ごめんなさい。もうふざけません。」「

漣司「まったく、じゃこれから説明する。今回皆集まって貰ったのはこれについてだ。」「

漣司は、右手に紅色の、左手に深緑色のISコアを箒達に見せた。

漣司「知っている人もいると思うが、これは昨日、バカな事して箒を傷付けようとしたが俺によって阻止された奴がメモリの力で操っていたISゴーレムのコアだ。」「

簪「漣司、何気に前回のあらすじ言っているよね……。」「

漣司「まあそれは兎も角、束さんがそのISゴーレムを阻止したお礼に俺がこのコア達を好きにしていそうだ。」「

千冬「全く、束の奴……。」「

漣司「こっちの紅色をりん、深緑のを千桜のでそれぞれの専用機にしようと思うんだ。」「

千桜「漣司君、私達の為に……。」「

りん「そうだぜダンナ。あたい達よりもダンナが使えばいいんじゃないか。」「

漣司「2人忘れていいのか？俺は男だからISは使えないんだぞ・
・。」「

りん「あっ！」「

千桜「確かに確かISメモリはジョーカーの制御媒体だったんだっけ。」

漣司「やっぱり勘違いしている人が何人かいるな。」

一夏「見た目がISに似ているから、ジョーカーをIS用に強化された様に勘違いされるんだ。しょうがないって。」

漣司「そうだな・・・。毎回説明するのが億劫になってくるぜ・・・。まあそれは兎も角2人にはそれぞれ世話になったからと2人がIS適正が高かったからこのコアを使って2人だけの専用機を作る。」

千桜「漣司君・・・。」

りん「ダンナ・・・。」

漣司「皆に集まって貰ったのは他でもない。2人の専用機の製作に力を貸して欲しいんだ。」

一夏「いいぜ漣司。」

第「相棒として力を貸すぞ。」

ハヤテ「仲間として執事としてお手伝いします。」

ジロー「科学者として腕がなるぞ。」

遊星「仲間の為なら力を貸す。」

トリコ「力仕事なら任せな。」

漣司「ありがとう。まず、千桜、りん、どういう機体がいいんだ？」

千桜「私は射撃がよかった方だから中々遠距離で闘える機体がいい……。」

りん「あたいは射撃が全くダメだったから、基本は接近戦型がいいかな。」

漣司「そう言えば、楯無の専用機は中々接近戦型の機体だったよな？」

楯無「ええ、そうだけど、それがどうしたの？」

漣司「いや、千桜が遠距離、楯無が中、りんが近距離が得意みたいだから、2人のISも楯無のミステリアス・レイディと連携しやすい機体にしようかなって思っただ。」

行人「三位一体みたいな感じにするんだ。」

美希「ああけど、一から作るとなると骨が折れそうだ。」

理沙「漣太君、既にある機体をベースにしたらどうだろう？」

泉「理沙ちゃん、いい考えだね。」

漣司「それも考えたんだが、それはちとマズいな……。」

優人「どうして？」

千冬「存在している機体をベースとしたら、その機体を製作した国から2人のに何かしらの接触があるかも分からない。下手したら2人共その国に実験などで拘束されるかも知れない。」

杉下「だから漣司君は、どの国にも属さないオリジナルのISを製作し、学園のテストパイロットになって貰い学園が保護すると言ったところでしょうね。」

漣司「2人共流石ですね。その通り、千桜とりんが国の実験動物にはさせない。だから皆でオリジナルの機体を考えて欲しいんだ。」

イブキ「だったら、デザインは私と夜空に任せて。」

夜空「結構自信はあるから、」

トオル「じゃあ次は機能はどうする？」

亀山「りんは接近戦だから、パワーとスピードがある様にしたらどうだ？」

一夏「白式のデータが参考になると思う。」

伊達「漣司、バースのバースC L A W sのデータも入れたらどうだ？」

後藤「確かにバースの武装は主に接近戦に特化しているようですし、漣司、バースのデータもそっちに送ろう。」

鈴「だったら、甲龍のデータも送るわ。パワー系だけど安定性と燃費がいいから役に立つとは思っわよ。」

セシリア「千桜さんのは実弾とエネルギー系両方の兵器を扱えるような機体の方がよろしいのでは？」

ラウラ「千桜は器用だから大型よりも小回りが効く小型の武装の方が良いだろう。」

シャル「だったら高速切替は修得した方が良いかも。僕が教えてあげるから。」

千桜「ありがとう。」

漣司「よし、りんはパワーとスピードを活かした大型の武装を扱える機体で、千桜は小回りが効く実弾、エネルギー系の武装両方扱える機体で製作しよう。」

午後2時 中庭 漣司 side

俺は気分転換に中庭を散歩している。

あれから製作しているが2割程度しか出来ていない。国がほとん

どの予算と膨大な時間と多くの人とあらゆる技術を駆使して第三世代型のISを製作しているんだ。無理もないか。東さんはそれらの努力を無駄だと主張するように第四世代型のIS《紅椿》を簞にプレゼントしているから各国のIS開発に携わっている皆さん、ご愁傷さまです……。

漣司「さてと、そろそろ戻るか……ん？」

俺は中庭の中央にあるオブジェの前に何かあるのに気付いた。

漣司「何だ？中には……メダル？」

オブジェの前にはアタッシユケースがあって開けてみると赤、緑、黄、白、青、紫、橙色のそれぞれ3種類ずつのメダルが入っていた。

漣司「セルメダルとはまた違うようだな。とりあえず持っていこう。」

俺はアタッシユケースを俺の部屋に置き、整備室に行き日付が代わるまで皆と作業をした。

その27 2つのコアと開発と7色のメダル（後書き）

ミニコーナー

漣司「おい、作者。多重クロスだからってコアメダル出すってんこ盛り過ぎるだろ。」

いやー、バース出てきているからさ、オーズも出そうかなって。

漣司「まったく、映司さんが出るのか？」

いや、オーズになるのは君の相棒だよ。

漣司「え？」

紅椿×オーズになるけど。

漣司「第大丈夫か？」

第「私も初めて聞くぞ……。」

では、今回はこれで……。

漣司 第「「待て。」」

漣司、第どうしたのってギャー……！

作者がログオフになった。

一夏「作者大丈夫なのか？」

漣司「大丈夫だろう・・・多分。」

第「それじゃ次回もお楽しみに。」

その28 新パッケージと特訓と言う名のリンチと7色を持った赤

3月23日 午前10時 九路洲学園 第2アリーナ 一夏s i
de

この日俺達はそれぞれの専用機のパデータ収集の為の機体の出力調整や新武装のインストールをしていた。

一夏「漣司、白式の出力はどうだ？」

漣司「うーん。零落白夜でさえもかなりエネルギー消費するのに雪羅もかなりの大食らいだから、自滅が多いな。取り敢えず、エネルギー配分の調整してみるがエネルギー消費が激しいのは変わりないだろうな。」

一夏「うう……。紅椿の絢爛舞踏みたいな能力があれば……。」「

第「何、心配するな一夏。私がいるではないか。」

漣司「第は絢爛舞踏を任意で発動出来るしな。俺との模擬戦も五分五分だっけ？」

第「どちらかと言うと漣司が6で私が4だ。」

一夏「漣司……。どうやったんだ？」

漣司「一夏も見ていたと思うが、やっぱり、紅椿みたいなエネルギー増幅機能持っていたとしても結局はシールドエネルギーを0にすれば勝てるからな。俺は箒が絢爛舞踏を発動させる前に一気に攻撃をしてエネルギーを0にさせる戦法で勝てたと言っている。」

箒「漣司には驚いたな……。私の二刀流でも難なくISキャリバーで対処してセシリア達とはまた違う闘い方なのだからな。」

漣司「俺は、戦闘より、どちらかと言えば不良の喧嘩みたいなものだからな。セシリア達とは勝手が違うもんな……。あつ、そうだ。一夏。」

一夏「ん？どうしたんだ漣司？」

漣司「雪羅って格闘、射撃、防御あらゆる事に対応出来ているんだよな？」

一夏「ああ、けど結構エネルギー消費が激しくてそう迂闊には使えないんだよな。」

漣司「エネルギー質だから問題なだけで、エネルギー質の代わりになる物があれば自滅は少なくなり、勝率は上がるな。」

一夏「まあ、それがあればの話だけど……。って漣司、ISメモリを出してどうしたんだ？」

一夏の言葉通り、俺はISメモリを出して自分の端末機に挿し込んだ。

『IS<インフィニット・ストラトス>！』

更に端末機から出ているコードを雪羅に挿し込む。

一夏「れっ、漣司？」

漣司「今から、ＩＳメモリに記録されている俺の戦闘データを端末機にある俺が設計した武装パッケージに読み込ませ、雪羅にインストールする。」

鈴「漣司、あんたいつの間にそんなの作ってたの！？」

セシリア「そうですね。パッケージだけでも資金と技術と優秀な人材と膨大な時間が必要ですのに。」

漣司「えっ？パッケージだけでもそんなに掛かってしまうものなのか？」

シャル「漣司・・・、因みにそれどれくらい掛かった？」

漣司「東さんじゃあるまいし、１週間近く掛かったよ。でも雪羅のデータがあつたから１週間で出来たんだ。」

ラウラ「新パッケージの開発は早くとも１ヶ月も掛かるんだぞ・・・。」

簪「しかも、１ヶ月ってのはセシリアがさっき言ったように資金と人材と技術が揃った場合でもっと掛かるかもしれないのに・・・。」

漣司「技術については機械弄るのが好きだったし、東さんから教え

て貰った。ジローや遊星らと一緒に互いが持っている技術を見せあっていたな。」

楯無「漣司君、各国の研究員達がこれを知ったら、落胆するか、漣司君を引き込むかどちらかになると思うから気を付けた方が良いわよ。」

漣司「気を付けるよ。」

楯無の言う通りに本当に気を付けた方がいいな。

漣司「話を元に戻す。一夏、雪羅も零落白夜や同じく、全てエネルギー質で動かすから、エネルギー切れも早い。俺は代わりになる物を探してみたがけど、シールドエネルギーの代わりとなる物が無かった。」

一夏「そうか……。」

漣司「そこでだ、俺が設計したパッケージを使う。これでインストール完了だ。」

一夏「早っ！10分しかたってないぞ！」

俺は雪羅からコードを抜くと雪羅からパッケージの武装が取り付けられた。

一夏side

漣司の作業は凄い。パッケージにISメモリのデータを読み込ませながら、雪羅にインストール、同時進行でやってのけた。

漣司が雪羅からコードを抜くと雪羅の上部分には2メートル強の物理シールド、右部分には並列に並んだ2枚刃のブレード、左部分には実弾のキャノン砲が2門がそれぞれ取り付けられ、雪羅の爪部分が白から銀色に変わった。

漣司「一夏、シールドエネルギーを、消費して戦闘する必要がない状況で使うようにしたのがこのパッケージ。『雪羅・破壊の騎士』と俺は名付けた。」

一夏「破壊の騎士……。」

漣司「このパッケージは実弾の武装や物理的攻撃用に組み込んだ。これで物理的、エネルギー系の格闘、射撃、防御が両方可能となった。」

一夏「両方に……。」

漣司「だがな、これはエネルギー系の攻撃には対処出来なくて、それは普通の雪羅に切り替えなければならないんだ。」

第「状況に合わせて切り替えないとパッケージが破損してしまうんだな。」

漣司「そう言う事。じゃあ一夏、俺が物理的、第がエネルギー系

の攻撃するから、上手く切り替えが出来る特訓しよう。」

一夏「ちよつと待て！それって、俺対漣司、第の1対2の模擬戦だよな！？」

漣司「心配するな。出来る限り力を制限する・・・多分。」

一夏「多分って、何！？多分って！」

漣司「俺は大丈夫だが、第、力みすぎるなよ。」

第「心配するな漣司。私も紅椿を大分使いこなせれて『穿千^{うがち}』も使用可能となった。」

漣司「両肩の展開装甲がクロスボウに変形したブラスタライフルだったな。束さんの話だと戦闘経験値が一定に達すると使用可能と聞いたが、第そこまで成長したか。」

第「ああ、だから漣司、私に気を使わず一夏の特訓に集中しよう。」

漣司「そうだな、それじゃ一夏！行くぜ！」

第「行くぞ一夏！」

一夏「ちよつ、ちよつと待て！これじゃ、特訓じゃなくてただのランチ・・・って、アー！！！！」

1時間後、そこには「動かない。まるで屍のようだ。」状態の一夏がいた。

漣司「一夏、大丈夫か？」

一夏「大丈夫・・・じゃない・・・。」

一夏が弱々しく答えた。

最初の方は切り替えが出来ていたが、俺と箒が少しレベルを上げたら、一夏が冷静に判断出来なくなり、切り替えが出来ない隙に俺と箒が攻撃して一夏が撃沈した。

漣司「一夏、すまん・・・。」

箒「やり過ぎてしまった・・・。」

箒は一夏を担ぐと医療室に運んだ。

それにしても『破壊の騎士』は予想以上に性能は良かった。一夏も初めてにしては大分使いこなせていたし。

鈴「漣司、あたしの専用パッケージ作って欲しいんだけど。」

セシリア「わたくしもお願いしますわ。」

シャル「僕も作って欲しいinna。」

ラウラ「私も頼む。」

簪「私も・・・。」

漣司「ああ俺で良ければな。」

ジローや遊星達に手伝ってもらおうと思った。

同時刻 学生寮 漣司達の部屋

漣司の机にあるケースが7色に光だした。

ギャラクシー『何だ?』

ウィン『どうしたの?』

ギャラクシー『いや、昨日漣司が持ってきたケースが光だしてよ。開けてみるか。』

ギャラクシーはケースを開けようと手を伸ばした。

ギャラクシー『うおっ!?!』

ウィンダ『きゃあ!』

3枚で1種類、合わせて7種類、合計21枚のメダルがケースから出てきて、外に出ていった。

ギャラクシー『何だっただ？』

ウィン『さあ？』

同時刻 医療室 第side

今一夏はベットで寝ている。少しやり過ぎてしまったな。

第「何か飲み物でも買ってくるか・・・！」

私は一夏の為に飲み物を買うに行こうと立ち上がって驚いた。待機状態の紅椿を机に置いていたのだが、21枚のメダルみたいなのに囲まれて宙に浮いていた。

第「何だ？このメダルは？」

暫し見ていたが、緑、黄、白、青、赤、紫、橙の順番に待機状態の紅椿に取り込まれた。紅椿が床に落ちそうだったので慌ててキャッチした時も驚いた。紅椿の待機状態は金と銀の2つの鈴が付いた紐なのだが、鈴がさっきのメダルと同じ色が7つ増え、紐も真ん中部分7色に色付けされていた。

第「紅椿・・・。お前も進化するのか？」

私は紅椿の待機状態を胸元の前まで寄せ、握り締めた。

第「姉さんか漣司に聞いてみよう。」

私はそう言いながら飲み物を買いに医療室を後にした。

その28 新パッケージと特訓と言う名のリンチと7色を持った赤（後書き）

ミニコーナー

漣司「今回紅椿が取り込んだメダルはご存知のようにタカ、クジヤク、コンドル、クワガタ、カマキリ、バッタ、ライオン、トラ、チーター、サイ、ゴリラ、ゾウ、シャチ、ウナギ、タコ、プテラ、トリケラ、ティラノ、コブラ、カメ、ワニだ。それにしても、当初の予定では今回で第3がオーズになる予定だったんだか、作者これはどういう事だ？」

・・・・・・・・・・。

漣司「この沈黙が恐ろしい・・・。」

一夏「取り敢えず、次回もお楽しみに。」

その29 信じる信じないと搜索とドーパントガールズ

同日 午前11時 学園地区 九路洲学園 学生寮 漣司達の部屋

一夏、箒を除いた主人公達と他の仲間達は漣司達の部屋に来ていた。

漣司「ギャラクシー、このケースに入っていたメダルは本当に何処かに行ったんだな？」

ギャラクシー「ああ、間違いねえ。7色に光だしたから開けようとしたらメダルが出てきて何処かに行っちゃったんだ。」

後藤「まさか、コアメダルまでこの世界に来るとは。」

ワタル「コアメダル？」

後藤「コアメダルはヤミーを作る怪人グリードの核となるメダルでセルメダルとは比べ物にならない程強力な力を持っているんだ。」

伊澄「そう言えば、昨日中庭にいた漣司様から強力な力を感じたわ。」

まち「伊澄も感じた？確かに式神や妖怪とも違う力を感じたわね。」

ココ「21個の強力な電磁波を感じたね。」

行人「またまた皆妖怪とか不思議な力とかただのメダルなんかにそんな力があるわけないでしょ。漣司もそんな痛い創作は良くないよ。」

漣司「行人、ガイアメモリやISは信じてコアメダルは信じないのか？」

行人「信じるも何もISとガイアメモリはオーバテクノロジーで作られているからね。妖怪やらそのメダルの力やら信じる事が出来ない・・・ムグッ！」

行人が言い終わる前にさすが行人の口を抑えていた。

すず「もおー！行人が喋るとややこしくなるから、少し黙ってて！・・・って行人！？」

すずは口と一緒に鼻まで抑えてしまったから息が出来なくなり、行人が気絶した。

あやね「すず、あんたやり過ぎよ・・・。」

すず「うにゃあーん！！行人ー！！！！」

すずは行人を揺さぶる。

ゼブラ「行人の心音や脈拍を聴いてみたらどうやら本当に信じてねーみてーだぜ。」

緋鞠「そうじゃの行人殿は私の耳や尻尾をハリボテだと思ってい

るようじゃし。」

ギャラクシー「俺らをホログラムだと思っているようだし。」

伊澄「私達が力を見せても。」

くえす「手品としか見てくれませんでしたわ。」

伊達「行人はセルメダルをガソリンか何かを固めた物かと思っているし。」

黒澤「私のスーツも変な解釈していますし……。」

中津川「スーツって言えば、あたし達がISスーツ姿の時行人だけが、不自然に視線反らしてたよな。」

ゆきの「顔を無理矢理向かせたら鼻血出して気絶しちゃったし。」

漣司「案外行人が一番大変なのかもな。」

優人「相棒としても少しでも良いから信じてほしいよ……。」

トリコ「こればかりしょうがないんじゃないかね？」

愛歌「行人君は取り敢えず寝かせておいて、まずはそのコアメダルを捜すのが先決ね。」

漣司「そうだな、皆伊澄やまち、力を感じ取れる者をリーダーにして手分けして捜そう。」

こうして漣司達はコアメダルを捜索が始まる。

中庭 漣司 side

俺は取り敢えずギャラクシーと一緒にコアメダルを捜していた。

漣司「それにしても変だ・・・。」

ギャラクシー「何がだ？」

漣司「誰がどうしてコアメダルだけをこの世界に・・・？」

ギャラクシー「コアメダルだけじゃおかしいのか？漣司。」

漣司「ああ。後藤から聞いた話じゃ、コアメダルの制御するベルトがあるんだと。」

ギャラクシー「レイだったら、そのベルトも送るはずだからな。」

ギャラクシーの言う通り、レイが俺達の誰かにコアメダルの力を使わせようとするなら、そのベルトまで送るはずだ。

漣司「俺が想像出来る事は3つ。1つはレイが言ってたこの世界を混沌にしようする奴が送り込んだ。」

ギャラクシー「なるほどな。」

漣司「2つ、レイが送り込んだ前提の話なんだが、レイはベルトが無くてコアメダルの力を引き出せる力を持った奴がいると知っていてあえてコアメダルだけを送った。」

ギヤラクシー「力を引き出せる奴がいるならベルトは必要ないな。」

漣司「3つは・・・これもレイが送り込んだと前提なんだが、レイがただベルト入れるのを忘れたのか・・・。」

ギヤラクシー「それは・・・有り得るな・・・。」

レイは神だったとしてもどっか抜けているところがあるからな。ベルト入れるのを忘れたとしても不思議ではない。

ギヤラクシー「レイの奴・・・漣司！この先から強力な力を5つ感じるぞ！」

ギヤラクシーがそう言うのと、目の前に、高校生ぐらいの女の子が5人いた。

漣司「お前ら誰だ。」

？「私達はこの4月にこの学園に入学するんだよ。君も？」

漣司「そうなのか？それじゃ後で案内を・・・。」

ギヤラクシー「おい！漣司！この小娘からさっきの力を感じるぞ！」

漣司「何!？」

俺は彼女達から素早く離れた。

?「あちゃー、バレてもーたか。」

?「ボク達が新しく手に入った力を見抜く何てね。」

?「私達はこの学園で自分の力を試そうと入学してきました。」

?「陰で隠れて試そうと思ったがしょうがねえ。」

?「悪いけど、君には口封じとして消えてもらうよ。」

彼女達はそう言うそれぞれガイアメモリを出したが、ちょっと待てあれは・・・!

『サイクロン!』

『ヒート!』

『ルナ!』

『メタル!』

『トリガー!』

それぞれガイアメモリを差し込んでドーパントになった。ふざけるなよ。あれは、あのメモリは・・・!

ルナ「うーんやっぱりこれ気分がいいね。」

ヒート「さすがはガイアメモリってところか。この力を使ってこの学園を好き放題に「おい。」！！？？」

俺は彼女達が話している途中に俺の堪忍袋の緒が切れてしまったようだ。

ギャラクシー『（ヤバい！ナンバーズの時の漣司になってやがる！）』

漣司「お前らが使っているのはな、ある都市を命懸けで守っている2人の人が使っている力だ。学園を好き放題に出来る為にあるんじゃないんだよ！」

メタル「そつ、それでどうするのですか？ドーパントになった私達を倒そうと？」

トリガー「だったらお前もこのメモリでドーパントに「その必要はない。」は？」

トリガード「ドーパントはジョーカーメモリを取り出したが俺は断る。」

漣司「何故なら、俺自身がジョーカーだからだ。」

俺は左手に持ったジョーカーメモリ彼女達に見せた。

『ジョーカー！』

俺はロストドライバーを装着しジョーカーメモリを挿し込み展開した。

漣司「変身・・・。」

『ジョーカー!』

『『『『『!!?!?』』』』』

彼女達はジョーカーになった俺に驚く。

サイクロン「あなたは何者なの!?!」

漣司「言っただろ?俺は仮面ライダー・・・ジョーカー!」

俺は彼女達に指差しながら言った。

漣司「さあ、お前達の罪を数えろ!!」

彼女は一斉に俺に立ち向かって来るが、恐怖は感じない。
何故なら、彼女達が使っても弱いと確信していたからだ。あのメモリ達はあの2人だけが使いこなせる力だからだ。

その29 信じる信じないと搜索とドーパントガールズ（後書き）

ミニコーナー

レイ「ちょっとーーーー！！漣司君！！」

漣司「どうしたレイ？」

レイ「どうしたも何も私が何か何時も凡ミスするような言い方・・・」

ギャラクシー『その凡ミスで漣司を死なせてしまったのを忘れて・・・って、おい、泣くな！』

漣司「レイが泣いちまって慰めるのに時間が掛かるから・・・。
今回はここまでだ。じゃあな。」

その30 第六感と救援とエセ外国人

ドーパント達は一斉に漣司に立ち向かう。

ヒート「くっ！こいつホンマに強い！」

メタル「私達の運動神経の高さとメモリの能力、相性の良さには自信がありました、彼はどれも私達の上をいつてます！」

ヒートは熱を帯びた拳で、メタルはシャフトの棒術で立ち向かうが漣司は必要最低限の動きで対処してカウンター攻撃を主体とした戦法で5人を一度に相手していた。

ルナ「おりゃ！」

トリガー「喰らえ！」

ルナは両手を伸ばし、トリガーは所持していた銃で射撃したが、漣司はルナの両手を掴み、盾のようにして弾丸を防ぐ。

ルナ「痛っ！？」

トリガー「あつ！悪い・・・って、わぁ！？」

ルナ「きゃああああっ！！」

漣司はルナをハンマー投げの要領でトリガーの方に投げた。

サイクロン「皆！よくも・・・！」

サイクロンは漣司に突進し回り蹴りを連続で繰り出した。

サイクロン「はあっ！はあっ！はあああああっ！！」

ところが漣司には全く当たらない。漣司には相手が次にどんな攻撃、防御が相手の仕草で大体予想ができ、対処している。

漣司は転生する前、中学、高校時代様々な不良に喧嘩を売られ、全て買い喧嘩をした。その経験から相手の行動を直感的に予想が出来る第六感に近い感覚を身に付けていた。

また、千冬から軍の訓練と織り混ぜた特訓メニューにISの模擬戦、一夏や箒との剣道の練習や自主トレーニングなどで漣司のそれは更に鋭さを増していき、的中率90%以上になっていた。

漣司が人からの好意に鋭いのは正にこれが原因である。

因みに一番発達しているのは漣司で一夏達は漣司のようには上手く出来ないが、多少なりとも予想は出来ている。

サイクロン「くっ！なかなか当たらない！だったら皆！！」

ヒート「ええ！」

ルナ「うん！」

メタル「はい！」

トリガー「おう！」

漣司「ぐうっ！」

彼女達是一緒のタイミングで攻撃が漣司に直撃し漣司は苦痛の声を上げる。

漣司「かはっ！」

サイクロン「やっぱり。君は私達の攻撃を予想出来ても一緒に同じタイミングで攻撃されたら対処出来ないね。」

漣司「ぐっ！（これはちとマズいな・・・。）」

ヒート「それやったら、覚悟！」

ヒートは漣司に止めを指そうとした。

漣司「千冬さんに怒られる覚悟で12本のメモリを使わせ「使う必要は無いわ漣司。」え？」

イブキ「りゅうのはどう！」

夜空「雷の剣（サンダー・セイバー）。」

イブキが体から波動を、夜空は魔力で作り出した、雷の力を宿した蛇腹剣でヒートを攻撃した。

ヒート「ぐあっ！」

メタル「ヒート！だったら私が「はぁー！」「！？」

シャフトを構えたメタルには木刀を持った行人と優人が防いだ。

トリガー「何だよこいつらは」「お前の相手は俺達だ!」「!?!」

トリガーの前に遊星とトリコが現れる。

遊星「レベル2、スピードウォリアーにレベル3、ジャンク・シンクロンをチューニング!」

遊星のデュエルディスクから召喚されたジャンク・シンクロンが3つの光の輪となり、スピードウォリアーを包む。

遊星「集いし星が、新たな力を呼び起こす!光差す道となれ!シンクロ召喚!出でよ!『ジャンク・ウォリアー』!」

遊星の前にレベル5のシンクロモンスター、ジャンク・ウォリアーが召喚された。

トリコ「はああああ!」

トリコも右腕に力を込める。

遊星「行け『ジャンク・ウォリアー』!」

トリコ「10連……」

遊星「スクラップ・フィスト!」

トリコ「釘パンチ!」

2つのパンチがトリガーに炸裂する。

トリガー「ぐはっ!!」

ルナ「皆! だったら」「させるかー!!」「!？」

ジロー「ジローワイルドドリルキック!」

ハヤテ「疾風の如く!」

ジローと木刀・正宗を所持していたハヤテはそれぞれの必殺技をルナに当てた。

ルナ「うわー!」

ルナは吹き飛ばされる。

サイクロン「ちょっと2対1は卑怯」「5人で漣司を袋叩きにしようとする奴に言われたくない。」「!？」

『キヤタピラレッグ!』

『シヨベルアーム!』

伊達と後藤はバースに変身して伊達は両足に装備された紫色のラインが入ったキヤタピラで、後藤は左腕に装備された橙色のラインが入ったバケットでサイクロンに攻撃した。

サイクロン「うにゃあああああっ!？」

ドーパント達を攻撃した後藤達は漣司の元に駆けつける。

ハヤテ「漣司君！大丈夫ですか！？」

漣司「ああ……。なんとか……。行人……。目え覚めたんだな……。」

行人「まあ、あの後ね……。」

漣司「遊星もデュエルディスクのモンスターの実体化に成功したんだ……。」

遊星「ああ、漣司。お前やジロー達が協力してくれたおかげだ。まだ試作段階でウェーブメモリのように上手くいかないが……。」

優人「それよりも漣司、ジョーカーのボディがボロボロじゃないか！」

優人の言う通り、さっきの一齐攻撃でジョーカーは傷だらけで漣司も軽傷ではないだろうと誰でも理解出来た。

漣司「やっぱり、5人まとめて相手するのは無理があつたか。」

伊達「全く、漣司も後藤ちゃんと同じく無茶するね。」

ジロー「漣司！何故すぐ知らせなかったのだ！」

漣司「悪いなジロー……。あいつらが使っているのは、仮面ライダーとして闘っている2人が使っているメモリで、あいつらはそれで学園を好き放題にしてやると言いやがったから、いてもたっても

もられず……。」

イブキ「だからって漣司一人で頑張る必要はないの！」

漣司「イブキ……。」

夜空「イブキの言う通りよ漣司。漣司がこの前篇に言ったのを覚えてるわよね？」

漣司「自己犠牲は考えず、仲間達を頼れ……。！」

夜空「いい、漣司がいなくなったら私達も悲しいし、千桜も楯無もりんも千冬さんも束さんも杉下さん達も悲しむし……。」

後藤「何より相棒の篤ちゃんも悲しませる事になる。」

ギャラクシー「漣司……。俺達精霊もだからな……。」

漣司「皆……。すまねえ。」

ハヤテ「いいですって。早くあの人達を止めましょう。」

漣司「ああ！」

漣司達、11人の主人公がそれぞれ構える。

サイクロン「うー痛たた……。って、うわ！？」

ハヤテ、ジロー、トリコ、遊星、行人、優人、夜空、イブキがド
ーパント達に攻撃して一ヶ所に集めさせた。

ジロー「後藤、伊達先生今だ！」

後藤「ああ！」

伊達「はいよ。」

後藤はバースバスターのメダルポッドを銃口に連結させ、

『ブレストキャノン！』

伊達はブレストキャノンを装備した。

『セルバースト！』

バースバスターの砲撃がヒート、ルナにブレストキャノンの砲撃がトリガー、メタルに直撃した。

漣司「俺も決めるぜ。」

『ジョーカー！マキマシマムドライブ！』

漣司「ライダーパンチ！」

漣司は紫色の炎を宿した拳でサイクロンを殴った。

「「「「ぐわあー！」「」「」

ドーパント達からメモリが排出され、少女達に戻った。

サイクロン「あれー？ここは？」

ヒート「うちら、何してたんやろ？」

行人「君達、何やってたか覚えてないの？」

メタル「ええ、全く・・・。」

トリコ「まさかお前達もナンバーズを！？」

ギャラクシー「いや、コイツらは持つてねえ。」

漣司「ああ、操られていたにしては意識ははっきりしていたしな。俺は桐札漣司だ。お前らは？」

サイクロン「えみな「私は都幾川えみなだよ。」

ヒート「なな「うちは瑞穂ななや。」

ルナ「美由「ボクは鳩山美由だよ。」

トリガー「理沙「オレは名栗理沙だ。」

メタル「静「私は花園静です。」

漣司達はえみな達の名前を聞いた後、散らばっている、6本のメモリを回収した。

ジロー「半分のは漣司のメモリと同じだな。」

漣司「ああ、さつきも言ったように、これらのメモリは『仮面ライダーW』と言う2人で1人の仮面ライダーが使うメモリだ。」

静「でも何故私達が持っていたのでしょうか？」

？「ハッー、ハッ、ハッ！」

『！！！？』

皆が考えていた時に甲高い笑い声が聞こえた。

？「ソレハワタシガメモリノチカラヲツカッテアナタタチヲアヤツツテイタカラデース。」

漣司達は声がしたほうを向くとそこには外国人（？）がいた。

漣司「何だ？あの素直に外国人とは思えない、外国人に会ったのは初めてだ。」

ギルバード「ワタシハ『ラッキークローバーズ』のヒトリ、ギルバードデー・・・ギャーーーーー！！！！？」

ギルバードと言う外国人（？）が言い終わる前にハヤテが木刀・正宗を持って襲い掛かった。

ここからは残酷過ぎるので『音声』だけをお送りします。by作者
ドカッ！バキッ！ドコッ！

ギルバード「ハヤテサーン！イタイデース！！」

メリツ！ガリガリ！グリグリ！

ギルバード「ギャーーーーー！ハヤテサーン！コスラナイデー！
キズグチエグラナイデクダサーイ！！」

ヒューーーーー、ゴシャ！ドシャ！グシャ！メキメキ！

ギルバード「アツーーーーー！！！！！！！！！！」

ハヤテ「ふうっ、スッキリしました。（超スマイル顔）」

優人「あんな笑顔であれをやるハヤテは正直言つて怖い……。」

夜空「あれだけやられてもあの外国人（？）、原型は留められて
いるわね……。」

トリコ「奴が頑丈なのか、ハヤテが加減したのか……まあ、加
減しているようには見えなかったな。」

漣司「ハヤテがああなるとはあの外国人（？）とハヤテの関係つ
て……？」

一気に謎が深まる漣司達であつた。

その30 第六感と救援とエセ外国人（後書き）

ミニコーナー

ハヤテ「ここでは初めまして。綾崎ハヤテです。いやー今回はスツキリしました（ブラックスマイル）。」

漣司「ハヤテ・・・一体どうしたんだ？」

一夏「さあ？」

篤「今回のと関係ありそうだが・・・、次で決着がつきます。」

後藤「次回もお楽しみに。」

その31 副作用と闘牛と連携攻撃

後藤「ハヤテ、このギルバードって人とはどういう関係だ？」

ハヤテ「お嬢様の遺産を狙うエセ外国人ですよ」

遊星「ハヤテ目が笑ってないぞ・・・。」

ギルバード「グツ・・・！」

漣司「漸く意識が戻ったか。教える、何でこれらのメモリを持っていた？」

ギルバード「アナタガタニオシエルキハアリマセーン!!」

ギルバードは漣司から離れると別のガイアメモリを手に持った。

『ライアー!!』

ギルバードはライアーメモリでライアードーパントに変身した。

漣司「なるほど、えみな達をライアーの能力で『自分達はメモリの力を使い学園を好き放題したい』と言う嘘の欲望を信じこませていたのか・・・!!」

漣司はえみな達よりも更に怒りが込み上げているのがハヤテ達はすぐにわかった。

行人「漣司、怒っているの？」

漣司「ああ怒っているさ。あれは関係のない奴を犯罪者にしたてあげそいつの人生をも狂わせかねないからな……!」

ギルバード　　ライター「ワタシノチカラハコンナモノデハナイ！」

ギルバードは更にもう1本のメモリを取り出した。

「バッファロー！」

それは闘牛の記憶が宿されたバッファローメモリだった。

遊星「まさか、2本のメモリを使うのか!？」

トリコ「無茶苦茶な野郎だ！メモリ1本でも強い副作用があんのに！」

ライアー・パントの頭には牛の角、闘牛士が使うマントを羽織っており、両手両足の筋肉が数倍にも膨らんでいた。

ライアー「ハッ、ハッ……ウグツ!? グガッアア
アアアアアアアアアアアー!!!」?

「

優人「2本のメモリを制御出来ずに暴走しだしている！」

「ジョー、漣司以外だとあぁなってしまうのか……。」

夜空「早く止めましょう。あの人のままじゃ死んでしまうわ。」

えみな「わ、私達も・・・ふえっ!？」

えみなはサイクロンメモリに手を伸ばしたが、漣司はえみなの腕を掴み遮る。

漣司「頼む・・・、使わないでくれ・・・。お前達をメモリの犠牲になつて欲しくない・・・。あの人達の名を汚したくないんだ・・・。」

漣司は悲しそうな目でえみなを見る。

えみな「う・・・うん。（何だろ？漣司君に腕を掴まれてドキドキ・・・じゃなくて！何であんな悲しそうな目を？）」

라이어「グオオオオオー!!」

라이어はえみなに向かって突進した。

漣司「危ねえ!？」

えみな「きゃあ!？」

漣司はえみなを抱えて라이어の突進を間一髪で回避した。

漣司「大丈夫か？」

えみな「あつ、ありがとう・・・!。だ、大丈夫だから降ろして!」

漣司「ああ悪い。」

えみなは漣司にお姫様抱っこされているのに気付いたので漣司に降ろして貰うように頼み、漣司はえみなを降ろす。

えみな「あつ・・・ありがとう（なっ何なのこの気持ち！？胸がドキドキする・・・。）」

遊星「皆！来るぞ！」

遊星の言葉で全員が構える。

ガシッ！

ライアーはバッファローの怪力で半径3メートルの岩石を持ち上げて投げて来た。

ジロー「ここは俺」「俺達に任せな！」「！？」

ジローが必殺技を放とうとするが目の前にゼブラとサニーが現れる。

ゼブラ「てめーら、耳塞げよ！」

ゼブラは大きく息を吸い、漣司達は耳を塞ぐ。

ゼブラ「サウンドバズーカ！」

ゼブラの咆哮の衝撃で岩石を粉々に砕く。

サニー「髪^{ヘア}ネット！」

サニーの目に見えない触覚がネットを作り、岩石の全ての破片を受け止めた。

サニー「スーパーフライ返し！」

サニーは飛んできた以上のスピードで岩石を弾き飛ばし、ライアーに直撃した。

ライアー「グアッ！？」

ジャラジャラ！

ライアー「！？」

3方向から分銅の付いた鎖がライアーを巻き付ける。

くない「よし！」

しのぶ「上手くいったでござる。」

みこと「でも力が強いからそう長く持たへん！」

鎖の先にはそれぞれ忍装束のくない、しのぶ、みことが鎖を握っていた。

ヒナギク「いいえ、ありがとう。」

緋鞠「時間稼ぎ感謝するぞ。」

ライアーが鎖を引きちぎった瞬間に前には白桜を持ったヒナギク、後ろには安綱を構えた緋鞠がライアーに斬撃を放つ。

ライアー「ガハッ！クソッ！グウゼンヒロツタメモリデメチャク
チャニスルワタシノヤボウガー！！」

ライアーはヒナギク、緋鞠に突進を繰り返すが、動きが止まる。

ライアー「！？」

ラウラ「私達を忘れてもらっては困るな。」

ラウラのシュヴァルツァ・レーゲンのAICで停止させた。

鈴「ラウラ、そのまま押さえてね！」

セシリア「行きますわよ！」

簪「ヒナギク！緋鞠！離れて！」

ヒナギクと緋鞠は離れると セシリアはブルー・ティアーズの6機のビットとレーザライフルスターライザーmkIEEの一斉射撃で鈴は甲龍の2門ある龍砲の衝撃砲を最大出力で放ち、簪は打鉄二式の山嵐のミサイル一斉射撃でライアーに全命中した。

シャルロット「まだまだ！」

シャルロットは撃ち落とされたライアーに近付き、ラファール・リヴァイヴ・カスタムIEEの切り札とも言える左腕の大型物理シールドに隠された灰色の鱗殻でライアーを打つ。

ズガン！ズガン！ズガン！

リボルバー式なので連射が可能なので3連発くらわせる。

ライアー「クソツーーーーー！！」

ライアーは2本のバッファローの角を伸ばし漣司を串刺しにしよ
うとするが……。

ガキンッ！

一夏「漣司、遅くなったな。」

箒「漣司、大丈夫か！？」

一夏が雪片で箒は空裂で角を防ぐ。

漣司「まあ、結構ギリギリなんだがな……。一夏も目が覚めた
んだな。」

一夏「ああ、さつきな。おりゃ！」

箒「はあっ！」

雪片で右角を空裂で左角を切断した。

漣司「行くぜ！」

『ジョーカー！マキマシマムドライブ！』

漣司「ライダーキック！」

漣司はライアーにライダーキックをくらわせる。

ライアー「ギャアーーーー!?」

ライアーとバッファローのメモリはメモリブレイクしギルバードは気絶し、倒れる。

漣司「こいつ、拾ったと言ってたな……。目が覚めた後、聞き出すとするか……。うつ!?うつ……。」

ジョーカーの変身が解除され、漣司も気絶して倒れる。

「漣司!?」

箒達は漣司に駆け寄る。

伊達「マズイ! 傷が思ったより酷いな。応急措置するから手伝って後藤ちゃん!」

後藤「わかりました!」

トリコ「それじゃ俺が運ぶぜ!」

一夏「漣司、死ぬなよ!」

応急措置が終わった漣司をトリコが運び急いで医療室に向かった。

その31 副作用と闘牛と連携攻撃（後書き）

ミニコーナー

一夏「織斑一夏です。今回は漣司の設定追加です。」

1 漣司はこの作品の原作はWまでの平成仮面ライダーしか知らない。

2 漣司の身体能力や技術力は転生前からの努力して得たものでレイから貰ったチートのものではない。

3 後に漣司はこれから邪な気持ちでチートに頼って努力しない転生者が来た時、その転生者を元の世界に強制送還させる力を手にする。

一夏「最後のはネタバレになっちゃったな……。以上の3つはこれからの物語に係る事らしい。次回も楽しみにしてくれ。」

その32 傷と謝罪と天才達の会話（前書き）

早く投稿出来た・・・。

その32 傷と謝罪と天才達の会話

午後3時 医療室の前

えみな「ぐすつ・・・、ひつぐ・・・、うええ・・・。」

えみは医療室に着いてからずっと泣き出していた。

梅梅「ひゃあああ、泣き止んでくだサイ？」

梅梅は慰めているが無理もない。いくらライアードーパントの能力で操られていたとしても、漣司に重傷を負わせ、気絶させてしまったのは自分達なのだ。

ななも美由も理沙も静も暗い顔している。

鈴「はあ、アンタ達のせいでこんな事になったんでしょ。今反省中？ふざけんじゃないわよ！」

理沙「何だと！」

理沙は鈴の胸ぐらを掴もうとするが、鈴は理沙の腕を取り左手で理沙の両腕を理沙の背中に右手で理沙の頭を抑え、床にねじ伏せさせる。

理沙「はっ、離せ！」

鈴「アンタ達は何で泣いたり落ち込んだりしかできないのよ！漣司を信じる事が出来ないの!？」

理沙「お前達は心配じゃねーのかよ!？」

鈴「あたし達が心配してないと言いたいの!？」

ココ「鈴ちゃん、離してあげなよ。」

ココに言われ理沙を離す鈴。

ココ「大丈夫。漣司君に死相は見えなかった。漣司君は死なないよ。」

ジャック「漣司は例えその死相があろうがなかるうが、こんな事ぐらいでくたばる奴ではない!」

第「何より、漣司は私の相棒だ。相棒の私だ。相棒の私を残して死ぬなど有り得ん。」

千冬「静かにしてるガキ共。桐札はこれくらいで死なない。何せ私の生徒だからな。」

プシュー。

医療室のドアが開き、漣司の治療をしていた伊達と後藤が出てきた。

伊達「終わったぜ千冬ちゃん。」

千冬「ご苦労様です。それから伊達先生。ここでは織斑先生と呼んでください。」

伊達「あつ、すいません。」

えみな「あ、あの！」

伊達「うおっ！？」

えみなは伊達の両腕を掴む。

えみな「漣司君はどうなったんですか！？」

後藤「君、落ち着いて！」

伊達「大丈夫だ。漣司は今寝ているんだが・・・。」

千冬「何か問題が？」

後藤「皆、落ち着いて聞いてくれ。漣司の傷が治っているんだ。」

「「「え？」「」」

後藤の言葉に皆驚く。

ナギ「どついう事なのだ？」

弾「漣司って超再生力の細胞を持っていたのか？」

数馬「幾らなんでも早すぎね？」

小松「そうですよ！グルメ細胞を持っているトリコさん達でも適した食材を食べないと、傷が治らないのに！」

咲夜「漣司兄ちゃんも伊澄さん達と同じく力を持つてんのか？」

伊澄「いいえ、漣司様からそういったのは感じられなかったわ。」

伊達「なんと言つか、傷を負った後が無いんだよ。」

後藤「治ったと言うよりまるで最初から傷なんか負ってないって、言った方が正しいか。」

伊達「俺と後藤ちゃんは調べたが原因が解らずに、出てきたところだ。」

一夏「そう言えば、初めてハヤテ達と会った時、ドーパントの攻撃から箒を庇って受けた時も漣司の傷、いつの間にか治っていたし。」

アキ「もしかしてガイアメモリの力に耐える事が出来るのとの関係があるのかしら？」

ジロー「確かに関係があるかもしれないが、情報が少なすぎる。」

皆が意見しあっていたその時、

漣司「うつ・・・うつん。」

漣司が目を覚ます。

「漣司！」

皆が漣司が寝ているベッドに集まる。

千冬「桐札、大丈夫か？気分は悪くないか？」

漣司「織斑先生。ああ、はい。頭が少し痛いだけです・・・『ギ
ュッ！』！？。」

漣司の意識が一気に覚醒した。何故なら、えみなが泣きながら漣
司に抱き付いたのだ。

えみな「ぐすつ・・・、うええ・・・、ごめんなさい。ごめんな
さい・・・。」

泣きながら謝るえみなに漣司は一瞬戸惑っていたが直ぐに、

漣司「気にすんな。お前達は悪くない。」

漣司はえみなの頭を撫でた。

千桜「（うう・・・。出遅れた。）」

楯無「（新たな強敵現れるか・・・。）」

りん「（いいなあ、あの子・・・ダンナに撫でてもらって・・・。
）」

落胆する3人。

5分後、えみなのは泣き止み、今度は顔真っ赤にして漣司から離れ
た。

えみな「えっ、えっとごめんなさい。」

漣司「俺は大丈夫だ。気にすんな。」

一夏「漣司、傷は大丈夫なのか？」

漣司「ああ、俺自身も驚く程、完治してんだ。元の世界でもケンカした時、よくケガしてたが、次の日になるとまるでケガなんかしてなかったかのように傷が治っているんだ。」

えみな「漣司君、元の世界って？」

漣司「ああ、それはな……。」

漣司は自分が転生してこの世界に來た事をえみな達に伝える。

えみな「そうだったんだ……。」

漣司「まあ仮面ライダーの力以外は転生前とほぼ同じなんだがな……。そう言えば、ギルバードはどうなったんだ？」

遊星「今は地下の独房室に入れている。学園を襲撃したんだ。織斑先生の判断でそうした。」

漣司「そうか……。」

ガシッ！

千冬「待て桐札何処に行く？」

漣司はベッドから降り部屋から出ようとしたが、千冬に止められる。

漣司「何って奴から聞き出すんですよ。アイツはWのメモリを拾ったと言ったが、もう少し話を聞いてくる。」

千冬「だったら焦るな。近い内、その男に尋問する。お前も同行を認めるから今は休め。」

漣司「・・・わかりました。」

漣司は千冬に説得されベッドに戻る。

漣司「傷は治ったが、疲れているみたいだから寝さしてもらっ・・・」

箒「ああ、お休み、漣司。」

箒達は部屋から出た。

転生の方舟

ここは漣司を今の世界に転生させた場所で、まだ死ぬべきじゃない人が死んでしまった時別の世界に転生させる転生の方舟。

そこを管理しているのが、漣司を凡ミス（？）で死なせてしまった。新人の神、レイ・スカーレット・ノヴァである。

レイ「むっ、なんか失礼な事を言われた気が……。ん？東ちゃんからの着信だっ」

レイは東からの着信を繋げる。

レイ「ヤッホー東ちゃん」

東「こつちこそヤッホー レイちゃん」

レイ「どうしたの東ちゃんから連絡なんて珍しいね」

東「うん、れっくんの体に何かが起きているみたいなんだよ。」

東は急に真面目な声で言う。

レイ「成る程、意外と早く兆候が出るとは……。東ちゃん、今から漣司君達にはまだ早い話をするから。」

東「わかったよ。」

レイ「ありがとう。実は漣司君がそっちの世界に来てから、漣司君の体内に少しずつだけ、あるメモリが作られているのがわかったんだ。そのメモリの名は……」

エクストリームメモリだよ。」

束は納得したかのように頷く。

束「束さんは何をすればいいのかな？」

レイ「束ちゃんは今まで通り他の子達でも闘える力を開発して欲しいのと、これから誰かの力で転生して来る子が来るかも知れない。来た時は知らせるからもしその子が漣司君達に危害を加えそうだったら、元の世界に強制送還して欲しいんだ。」

束さん「わかったよ。でもエクストリームが完成したらどうなるの？」

レイ「私の予想だと、漣司君はガイアメモリもISも執事の力も正悪の組織もデュエルモンスターズもグルメ食材も妖も全てを司る究極の仮面ライダーになっていると思う……。」

レイは複雑な表情になる。

束「そうか……。そう言えば、紅椿がコアメダルを取り込んだ件だけだね。あれもわかった？」

レイ「うん。どうやら、あのコアメダルは錬金術とは違う方法で

作られたみたいで、元のあった世界から何かしらの原因でこっちに
来たみたい。」

東「グリードが復活するかもしれないと？」

レイ「それは安心して。どうやら、頭部のコアそれぞれにグリー
ドとは違う、真の友情を持った7人の勇者の意思が込められている
みたいだから。」

東「そう、なら安心したよ。それじゃまたね」

レイ「うん またね」

東からの通信が終わった。

レイ「よし、私も頑張るか！」

一層やる気を出すレイであった。

その32 傷と謝罪と天才達の会話（後書き）

ミニコーナー

orz・・・。

漣司「どうした作者？」

感想を書いてくれた人が3人だけで、毎回書いてくれる人が1人しかない・・・。

漣司「作者・・・。1人でも毎回感想書いてくれる人がいるんだ。それだけでも、充分幸せだと思うぜ。」

漣司・・・。

漣司「感想たくさん来て欲しいなら、文章力を上げたり、投稿ペー
スを早めにしたリする努力をしろ！」

はいいいいいっ!?

漣司「ったく、これを読んで下さっている皆さん、ウチの哀れな作者の為に感想を待ってるぜ。次回も楽しみにしてくれ。」

その33 少女達の会話と夢と石板

3月24日 午前9時 学生寮 廊下

ここ学生寮の廊下で2人の少女が悲鳴を上げていた。名前はみちると三千院ナギである。その原因は・・・

みちる「いやぁー！離してください。漣司くん！」

ナギ「漣司離せー！！！」

・・・半日近い睡眠をとって元気になった漣司である。しかし彼は少々不機嫌な表情をして、右肩にみちるを乗せ、左腕でナギを抱えてIS専用の第2アリーナに向かっていた。

漣司「お前らいい加減にしろよ……。体力が無いからって引き込もってたら益々、体力が無くなるぞ……。」

漣司はため息をつく。

ナギ「っていつか、どうして私達の部屋の鍵をお前が持っているのだ!？」

漣司「ナギはヒナギク、みちるはあやねから借りた。2人共、お前らを何とかして欲しいと頼まれたからな。サボった分みっちり鍛えさせてやるからな。覚悟しとけよ。」

ナギ みちる「「いつ、いやぁー！！！！！」」

その後第2アリーナに2人の断末魔の叫びがあったのは言うまでもない。

午後0時 食堂

食堂には口から魂が半分出ているナギとみちるが机に突っ伏していた。

歩「ナギちゃん大丈夫??」

ナギ「うう。大丈夫じゃないのだ。 (泣)」

みちる「小雪さんの妖力全開でも体が熱いです。 . . . 」。

ラウラ「情けないぞ！漣司はさっきの10倍の量の訓練をしているのだぞ。」

虚「漣司君は更に織斑先生の特別メニュー、剣道、組み手もしていますよ。」

キョーコ「なのに英語以外の成績はトップクラスよ。」

ゆきの「それに漣司が作る料理も上手いし。」

「漣司 (君) (さん) はほぼ無敵のスペックだ. . . 」。」「」

少女達は次々と漣司に好評価を出す。

朝風「漣太君は転生前からそれほどのスペックだとは、彼自身も大変な人生だったろうな……。」

中津川「それなのに漣司は前向きに生きようとしている。」

本音「だから、たちちゃん達はきりふーを好きになっちゃったんだよね。」

楯無「ま、まあその話は置いて、漣司君、今日はかなり苛立ってみたいだけ。」

あやね「あんた達漣司様を怒らせるような事したんじゃないの？」

ナギ「私は何もしてないぞ!？」

みちる「そうですね!そりゃ訓練サボって、引き込もってしましたけど……。」

ヒナギク「確かにナギやみちるには厳しい特訓してたけど漣司君は2人に怒りをぶつけるような事はしてないから2人が原因じゃないと思うけど……。」

シャルロット「漣司が露骨に不機嫌な表情するのってあんまり見たこと無いけど……。」

夜空「やはり昨日の事で何かあったのかしら？」

ガチャ。

イブキ「漣司が来たわ。」

イブキの言葉にナギとみちるは即隠れる。

鈴「あんた達、どんだけ漣司が恐いのよ……。」

鈴が呆れながら言う。

漣司はカウンターで働いているえみなと一緒に話していた。

東雲「漣司君。えみなちゃんと話し込んでいるみたい……。」

少女達は耳を傾けるが、なに話しているか聞こえなくてわからない。
い。

花菱「おつ、漣太君が料理選んで、テーブルに行ったぞ。」

愛歌「あら、あつちから、織斑君と篠ノ之さん？」

しのぶ「一緒に食べるみたいでござる。」

少女達は更に観察を続ける。

漣司 side

変な夢を見た。細かい事までは覚えてないが、俺が他の転生者達を元の世界に強制送還させる夢を見た。転生者達はチートやバグに頼った奴等ばかりだった。その夢では何故か俺は奴等のチートやバグは通用しなく、触れただけで強制送還させる事が出来た。

全員強制送還させると、突如目の前に仮面ライダージョーカーが現れるのだが、そのジョーカーは全身に12体の動物の顔があちこちにある鎧みたいなのに包まれていたのだ。

しかもドライバーもロストドライバーじゃなくダブルドライバーになっており、挿入されていたメモリは・・・。

その時に目が覚めたのだ。

漣司「何だったんだ？今の夢は・・・？」

時計を見たら、自分は半日近く医療室のベッドに寝ていたようだ。今、朝の4時で俺は体を完全に目覚めさせるため、軽くジョギングした。

今、食堂が開いてあるはずがないからジョギングが終わった後、自分の部屋に戻り食材調達の時に手に入れた食材を使い、備え付けのキッチンで朝食を作り、早めの朝食を食べた。

これらをまだ起きるのには早いだろう、一夏達を起こさないように気を付けながら済ませた。

9時から全員のISの特訓やデータ収集が始まるまで、IS整備室で千桜とりんの専用機とセシリア達の専用パッケージを開発に取り掛かった。

9時、ナギとみちる、2人を除いて全員集合した。この2人最近サボってばかりだったから流石に俺自身で無理矢理連れていこう

と決心した。

ヒナギクとあやねからそれぞれ鍵を借りて無理矢理2人を引っ張りだし、サボった分みっちり特訓させた。やり過ぎた自分に反省したが……。

それにしても、あの夢に対する嫌悪感が全く無くならない。

あのジョーカーのドライバーに装填されたメモリは見たことあるが、目が覚めたらどんなメモリか思い出せなくなっていた。俺自身がなるのかまたは、別の誰かがなるのかはわからない。今考えてもしようがないか……。

今12時だから、食堂で料理選ぼうとカウンターに行ったらエプロン姿のえみなが働いていた。

漣司「よう、えみな。」

えみな「あ、漣司君。元気になったんだ。」

漣司「まあな。えみناは何で食堂で働いているんだ？」

えみな「漣司君にお礼と謝罪の意味で手料理を振る舞おうと思ったんだけど、私は料理苦手だから食堂で働きながら料理を覚えようとしているんだ。」

漣司「俺はもう気にしてないから別にいいぞ。」

えみな「ううん、これは私がやりたいからやりたいんだ。漣司君が許してくれても私自身が許せないから……。」

漣司「……わかった。楽しみにしてるよ。」

えみな「うん！」

えみな、昨日はあんなに泣きじゃくっていたのにすっかり元気になったな。

俺は来た料理を貰いえみなと別れた後、空いているテーブルを探していたら特訓終わって一時別れた一夏と箒に会い、一緒に食事した。

一夏「そう言えば漣司、昨日皆色々動き回っていたけど、どうしたんだ？」

漣司「ああ、実は……。」

俺は詳細を知らない2人にコアメダルについて話した。

漣司「……と言う事だ。」

一夏「俺が寝ていた間にそんな事があったのか……。」

箒「漣司……、もしかしてそれって、7色のが3枚ずつあったメダルか？」

漣司「そうだが……、箒よくわかったな。」

箒「ああ、実はこれを見てくれ。」

箒が見せたのは紅椿の待機状態なのだが、鈴が7つ増え、9つになっており、紐も真ん中部分が7色に装飾されていた。

漣司「まさか、紅椿の中にあるとは、箒何ともなかったのか？」

箒「ああ、私は大丈夫だそれに紅椿も問題なく動いた。」

漣司「見させてくれないか・・・！？」

俺は紅椿の待機状態を手を持った瞬間、突如目の前が真っ暗になった。そしていきなり10メートルはあるだろう台座に置かれた円盤形の石板が現れた。

漣司「何だこれは・・・？」

その石板をよく見ると、中央にはJで周りには上から時計回りにF、C、T、I、S、G、M、V、W、L、D、Aの順番になっており更にその周りは21個の窪みがあった。更にその周りには10枚の絵が彫られていた。

その石板の台座には馬に乗った西部のガンマン風のと、角が生えてマントを持っていた闘牛士みたいなのと、中国服みたいなのを着ているのと、サッカーボールを持っているのと、アラジンに出てきそうな魔法使いみたいなのと、狼みたいなのと、後タヌキ(?)みたいなのを合わせて7人がそれぞれ右手にカードみたいなものを持っている絵が彫られていた。

漣司「ここは一体・・・？」

考えていたら、台座から、タカ、クワガタ、ライオン、サイ、シヤチ、プテラノドン、コブラの絵が彫られた7枚のコアメダルが出てきた。

その33 少女達の会話と夢と石板（後書き）

ミニコーナー

遊星「不動遊星だ。作者、何をすればいいんだ？」

取り敢えず、最近の事とか言いたい事があるならご自由にどうぞのコーナーだから好きにしていよ。

遊星「わかった。毎日やっているISでの特訓は一夏と漣司以外の俺達男はISの戦闘データ収集しているんだ。ISって本当に興味深い。何故なら・・・」

1時間後

・・・と言うわけだ。大分時間使ったな・・・。次回も楽しみにしてくれ。」

その34 メダルの意思と少女の初恋と深まる絆（前書き）

後書きのミニコーナーのお知らせがあります。

その34 メダルの意思と少女の初恋と深まる絆

台座からコアメダルが出てきて俺はロストドライバーを装着した。

コブラ『待つである。わがはい達は君と闘う気は毛頭ないである。』

ライオン『そうだぜ！その気があつたら台座から即お前を攻撃してる！』

漣司「……。」

クワガタ『それにしてもマスターよりも早くこの石板に来る子がいるなんて驚いたよ。』

サイ『それがマスターの相棒だとは、』

タカ『流石は全ての力を司る切り札ですね。』

プテラ『……。』

漣司「？」

こいつらの話を聞いた限りでは、マスターは筭の事を指しているんだろう。それにしても切り札はわかるが俺が全ての力を司るって……？

シャチ『君もここに来るべきだったんだけどまだ早すぎるんだ。』

ライオン『だから戻ってもらっぜ!』

漣司「ぐっ!」

コア達が光だし俺は目をつぶってしまった。

一夏「……じ。……んじ。……漣司!」

漣司「ん……?んん。」

一夏の呼び掛けに俺は目を覚ます。

俺は食堂のソファーに寝かせてられており、セシリア達もいた。

第「ビックリしたぞ!紅椿に触れたら漣司急に気を失ったから……」

龍可「一体何があつたの?」

漣司「えーっと、紅椿に触れたまでは覚えているんだが……、あれ?思い出せない。」

ラウラ「どうしたのだ漣司?」

漣司「何か大事な物を見たような気がしたんだが、それが何なの
か思い出せないんだ。」

そう、それは大事だと言う事は思い出せたがそれが何なのか思い出せなくなった。

えみな「漣司君！大丈夫！？」

えみなが慌てて駆け付けた。

えみな「大丈夫？気分が悪くなったの？」

漣司「ああ、大丈夫だが・・・。」

なな「えみな、あんた桐札君の事心配し過ぎなんとちゃう？」

静「そうですね。トウマ君が体調崩した時以上に心配していますし。」

漣司「トウマって？」

美由「えみなの双子の弟だよ。」

理沙「まあ、一緒に入学するから入学式の時に会えるが・・・。」

なな「トウマ君と会えるのが待ち遠しいわ。」

ななの頬が赤い。ななはトウマって奴が好きなんだな。

えみな「もー！トウマにベタベタして良いのは私だけなんだからね！」

えみなが怒っている・・・ん？もしかしてえみなは・・・。

漣司「えみなって、ブラコンなのか？」

静「ええ、そうなんです……。まあそこがカワイイですけど……」

ん？ 静の頬も赤いな。

歩「話が逸れちゃったけどえみなちゃん。本当に漣司君を心配しているんだね。」

なな「あなた、桐札君に気があるんとちゃうか？」

えみな「えっ！ 漣司君は確かに心配だよ。漣司君は酷い事した私を助けてくれたし、メモリを使おうしたら本気で止めてくれて『何ともないか』って言って心配してくれたし……。あつても、自分は漣司君にそう言った感情は……。ただ漣司君はカッコよくて、トウマと同じくらいに大切に頼りになる存在だけど、あれ？ 私漣司君の事をどう思っているんだろ？」

ななの問いに若干顔が赤くなり困惑している。まあ昨日あんな事があつて、俺自身もえみなさんの心を揺さぶってしまうような言葉や行動してしまったしな。

でも朝訓練に参加してた美由がえみなは小説家になるのが夢で他に興味を持つ事が無かったて言ってたから、えみなが俺の事を好きになる事は無いだろう……。

だが後にえみなが漣司の事が好きになった少女の1人になるとは漣司でも思いもしなかったのである。

n o t s i d e

漣司達が話している時、千冬、山田ら教師達が来た。

千冬「男子は織斑と桐札だけか。」

漣司「どうかしたんですか？」

杉下「実は2日後に地下の独房室に留置しているギルバードさんの聴取をするのですよ。」

山田「桐札君達当事者達は私達と一緒に他の人はモニター室で見てもらうことにしました。」

亀山「本当は皆入って貰いたかったんだが、流石に全員は入れないからな……。」

神戸「そこで、山田先生が仰ったような処置を取りました。」

千冬「桐札、2日後だから気持ちを整理するようにな。」

漣司「わかりました。」

千冬「では、1時間後に第2アリーナでISの搭乗、機動訓練と訓練のデータ収集を行う！各自迅速に食事を済ませ、訓練に備えよう！」

「はい！！」

ナギ「またやるのか。」

みちる「こっさり抜け出して・・・。」

千冬「桐札、織斑、篠ノ之。あそこの2人が私と山田先生、お前達に模擬戦を申請した。付き合えよ？」

漣司 一夏 第「「「わかりました！！」」」

みちる ナギ「「いやぁーーーー！！」」

抜け出す計画を立てたみちるとナギに漣司達と模擬戦させる千冬。

1時間後、第2アリーナで3時間に渡る本日二度目の断末魔の叫びが聞こえたと言う。

午後8時　IS整備室

第「皆飲み物を買ってきたぞ。」

伊達「ありがとう第ちゃん。」

遊星「ありがとう。」

主人公達と専用機持ちと千桜とりんは2人の専用機の開発をしていて休憩の時第が皆の飲み物を買ってきて渡していた。

第「漣司、はいカフェオレだ。」

漣司「ありがとう第。」

漣司はカフェオレの缶を第から受け取る。

一夏「漣司、カフェオレが好きなんだな。」

漣司「ああブラックも好きだが、疲れた時や闘いの後は甘くてほろ苦いカフェオレが俺にとっては1番いいんだ。」

一夏「確かに漣司って訓練終わった後もカフェオレ飲んでたよな。」

そう言いながら、一夏わスポーツドリンクを飲む。

第「漣司、午前中機嫌悪かったようだが、何かあったのか？相談に乗るぞ？」

第は緑茶が入ったペットボトルを飲んでから言う。

漣司「ああ、実は……。」

漣司は夢の内容を皆に話した。

トリコ「まあ確かに、よくわからない夢を見たらいい気分じゃないな。」

後藤「ジョーカーに装着されたの鎧みたいなのは12本のメモリと関係するのかな？」

漣司「そこまでは……ただ、12体の生物の顔があったから少なからずとも関係していると思う。」

ジロー「でも不思議な夢だよな。転生者である漣司がこの世界にやって来た他の転生者を元の世界に戻すとはな。」

漣司「正直、それでイライラしてたのもあったんだ。今の世界で一生懸命生きようとせず、努力しないで転生して来る奴らが……。もうその世界に生きたいのに死んで生きる事が出来ない奴がいるのに……。」

漣司は右手で飲み干したカフェオレの缶を握り潰して、震えている。

第「漣司、この世界に来て後悔しているのか？」

箒は不安そうな顔で漣司に聞く。

漣司「あるな。親や友達、尊敬してた先生に別れを言えず唐突に死んでしまった事。だがな……。」

漣司は一息入れてから言う。

漣司「先生は言っていた。『後悔し続けてばかりだと、人の進化は終わり退化する。常に前向きに努力する事で人は極限を超え進化する。』と。俺はレイからジョーカーの力を貰い、この世界に転生する事が出来ると聞いた時、今度こそ後悔しない生き方をしようと決めた。」

ハヤテ「漣司君……。」

漣司「俺は皆と仲間となり、俺を本気で好きになってくれる子達もいる。そして何より……。」

漣司は箒を見る。

漣司「箒、俺はお前の相棒になれた事を誇りに思う。」

漣司は涙を流して言う。

箒「私も漣司、お前の相棒になって本当に良かった……。」

箒も涙を流して言う。

この日から、漣司達1年1組の絆がさらに深まったのは言いつまでもない。

その34 メダルの意思と少女の初恋と深まる絆（後書き）

ミニコーナー

漣司「桐札漣司だ。」

篤「篠ノ之篤です。」

一夏「織斑一夏です。」

篤「作者からのお知らせがあります。次の話は3つほど考えているらしいが、作者がどの様にするか迷っているらしいんだ。」

一夏「考えているのは……。」

1 料理が下手なキャラ達で料理対決する。

2 幾つかのチームに別れて、この島の調査をする。

3 主人公達のデュエルモンスターのデッキ調節する（デュエルするかは未定）。

一夏「以上の3つです。」

漣司「これを読んでくださっている皆さん、感想の方でアンケートを金曜日まで受け付けます。答え方は1、2、3でお願いします。」

第「1番多かったのを次の25日に、ギルバード聴取の26日の後に、2番は27日、3番を28にする予定です。」

「夏」それじゃ次回も楽しみにしてくれ。」

その35 料理対決とチームと調理開始（料理対決前編）（前書き）

投票の結果と言うより、1票しか無かったので料理対決しました。

Orz・・・。

その35 料理対決とチームと調理開始（料理対決前編）

3月25日 午前9時 食堂

花菱「これより1年1組の交流会及び料理対決を行う！」

瀬川 朝風「イエーイ！」

花菱が叫び、瀬川はラッパを鳴らし、朝風は太鼓を叩く。1組のメンバーも拍手をする。

花菱「司会はこの生徒会ブルーこと、花菱美希！」

瀬川「生徒会レッドこと瀬川泉！」

朝風「そしてミナミハルオ・・・『ゴッソ！』すまない。風紀員ブラックこと朝風理沙！」

朝風がボケたので、花菱がツッコミと言う名のゲンコツを喰らわせた。

花菱「気を取り直して料理対決のルールを発表する！ルールは簡単！挑戦者達は事前に決めた協力者達7人と組み、8人で1チームを作る！」

泉「挑戦者は我々が出すお題に料理をして貰い、協力者は挑戦者を仕込み等のサポートする！」

朝風「制限時間は3時間後の正午12時まで！それでは挑戦者達の登場だ！」

朝風が言い終わった後、厨房から5人の挑戦者が現れる。

朝風「1人目は、セシリア・オルコット！」

シェフのエプロン姿のセシリアが一礼する。

朝風「協力者は織斑一夏！篠ノ之箒！鳳鈴音！シャルロット・デュノア！ラウラ・ボーデヴィツヒ！更識簪！そして、桐札漣司！」

セシリアの後ろに一夏、箒、鈴、シャルロット、ラウラ、簪、漣司がいる。

朝風「続いて2人目は三千院ナギ！」

ナギもエプロン姿で一礼する。

朝風「協力者は綾崎ハヤテ！桂ヒナギク！西沢歩！愛沢咲夜！鷺ノ宮伊澄！橘ワタル！春風千桜！」

ナギの後ろにハヤテ、ヒナギク、歩、咲夜、伊澄、ワタル、千桜がいる。

朝風「3人目は阿久野ジロー！」

ジローもエプロン姿で両手を上げて気合を入れている。

朝風「協力者は後藤慎太郎！伊達明！不動遊星！トリコ！東方院行人！天河優人！亀山薫！」

ジローの後ろに後藤、伊達、遊星、トリコ、行人、優人、亀山がいる。

朝風「4人目はまち！」

巫女服で割烹着姿のまちが包丁を持ってニヤリと笑っている。

朝風「協力者は、すず！あやね！しのぶ！りん！ちかげ！ゆきの！みちる！」

まちの後ろにはすず、あやね、しのぶ、りん、ちかげ、ゆきの、みちるも割烹着姿でいた。

朝風「5人目はイブキ！」

エプロン姿で緊張したイブキがぎこちない一礼をする。

朝風「協力者は法仙夜空！十六夜アキ！渡キョーコ！キョーコ乙型！五反田蘭！九崎凜子！更識楯無！」

イブキの後ろには夜空、アキ、キョーコ、乙型、凜子、蘭、楯無がいる。

朝風「そして審査員は、織斑千冬先生！山田真耶先生！杉下右京先生！神戸尊先生！桂雪路先生！」

審査員の席では千冬、真耶、杉下、神戸、雪路が座っている。

朝風「料理のお題は『井物』！それではスタート！」

セシリアチーム

漣司「セシリアはどんな井物にしたいんだ？」

セシリア「えーとですわね。取り敢えず・・・、このレシピに載っている親子丼を作ろうかと・・・。」

漣司「よし、セシリアはここにいてくれ。皆集合。」

セシリア「？」

セシリアは頭の上に？マークを浮かばせながら、集合した漣司達を見る。

一夏「漣司・・・。」

漣司「わかっている。皆、セシリアが余計な物を入れようとしたら止めてアドバイスするんだ。」

第「セシリアが作った料理は見た目は完璧なのだが・・・。」

鈴「レシピに書いてある調理法を見ずに写真に似せようと色々な物を入れてんのよね……。」

シャルロット「ただ単に不味いんじゃないって、見た目と味が一致していないんだよね……。」

ラウラ「だからちゃんと手順通りにしたら大丈夫だと思うが……。」

簪「言えない……。セシリアには言えない。」

漣司「兎に角、ちゃんと千冬さん達が食べられるように全力でサポートしよう。」

「……おー!」「」

セシリア「???」

いきなり円陣組んで掛け声を上げた漣司達に益々、?マークを浮かべるセシリア。

ナギチーム

ハヤテ「お、お嬢様はどの様な井物に?」

ハヤテは恐る恐るナギに聞く。

ナギ「ふっ、ふっ、ふっ。私はオリジナリティー溢れる井物を作る！」

ヒナギク「取り敢えず皆頑張りましょう……。」

「「「おー……。」「」」

ナギ「何なのだ！そのやる気のなさはー！？」

ジローチーム

ジロー「亀山先生協力感謝する。」

亀山「いいつて事よ。」

伊達「本当は漣司達誘おうと思ったんだが……。」

後藤「漣司と一夏はセシリアちゃん、ハヤテはナギちゃんのチームに行ってしまったから。」

行人「東宮と黄村は謹慎中だし。」

優人「弾と数馬は、蘭の無言の圧力で拒否してしまったし。」

遊星「ジャック、クロウ、鬼柳、トオルも経験がないから辞退した。」

トリコ「小松も自分が出たら不公平じゃないかと辞退したし、ココは別件でいねーし、サニーは美しくない奴とはしたくないと言っし、ゼブラは論外だ。」

亀山「そこで俺が参加したって訳ね。ジローはどんな丼物にするんだ？」

ジロー「全員男だから男の料理の定番、肉を作った丼物にしようと思うのだ！」

トリコ「よし決まったし早速料理開始だ！」

「「「おー!!」「」」

男達の男の料理が始まる。

まちチーム

まち「ふっ、うふふふふふ・・・。」

まちは相変わらず包丁を見て不気味に笑っている。

すず「怖いよ。」

あやね「取り敢えず、お姉様は見た目が悪いのと、台所滅茶苦茶にするのを防げたら何とかなると思うから頑張るわよ！」

「「「おー・・・。」」」

ナギチームとはまた違った不安を持つまちチームだった。

イブキチーム

夜空「イブキはどんなの作りたいの？」

イブキ「か、かわいいの・・・。変？」

キョーコ「ううん、変じゃないよ。」

アキ「私達が全力でサポートするから安心して。」

乙型「他の皆をギャフンと言わせましょう！」

凜子「ギャフンって古いわね・・・。でも他のチームをあつと言わせましょ。」

蘭「だからイブキさん自信を持ってください！」

楯無「お姉さんの力、見せてあげるわ。」

イブキ「皆・・・ありがとう。」

友情が高まったイブキチームであった。

各チームが食材を確保し、仕込み、調理を始めた。

残り時間、2時間50分。

その35 料理対決とチームと調理開始（料理対決前編）（後書き）

ミニコーナー

漣司「作者……。感想書いてくれている人が少ないから、投票は無理だったんじゃないか？」

そうだったね……。もう1つの作品の方が人気あるし、転生者のオリ主で多重クロスって人気が無いのかな……？

漣司「うーん……。キャラクターは原作基準でも話自体はオリジナルが多いから理解してくれる人が少ないか、この作品自体があまり知られてないか……。」

orz……。

漣司「やべつ……。作者を更に落ち込んでさせてしまった……。処女作だから仕方ないか……。それでは次回も楽しみにしてくれ。」

その36 過去話とカオスと調理終了（料理対決中編）

セシリアチーム

セシリアチームは一夏と漣司が率先として仕込みをしていた。

シャルロット「凄い……。一夏も漣司も……。」

シャルロットが驚く。何故なら、2人の作業のペースが速くて、それで丁寧であるからだ。

一夏は怪鳥ゲロルドの肉を丁寧に一口サイズにして、人数分作る。漣司も玉葱を人数分切り終えた後、ガーリックの風味を出す為か、ニンニクを細かく切り、若干油を敷いたフライパンで炒め始めた。

第「流石は一夏と漣司だな……。」

彼女達は暫く2人の作業を見ていた。

漣司「第、親子丼で鶏肉と同じく必要な卵を選ぶのを頼む。ラウラは俺達が仕込み終わったゲロルドの肉と玉葱を一人前ずつ分けてくれ。」

一夏「鈴は極楽米の炊飯を炊飯釜で頼む。シャルは肉を網で最初軽く炙るから火の準備を。簪はセシリアに手順を教え込んでくれ。」

「はっ、はい！」

彼女達は漣司達の指示で即行動する。

一夏「流石漣司だな。作業しながらも的確な指示は。」

漣司「一夏こそ並大抵の料理人じゃ扱えない、食材の仕込み恐れ入ったぜ。」

2人は決して手を休まず、作業を続ける。

漣司「そう言えば話は変わるが、一夏。箒達とは幼なじみって言うたが、国籍がバラバラの彼女達とは何処で出会ったんだ？」

一夏「えーと、箒とは小さい頃、あいつの実家が神社で剣道場を開いていて千冬姉の紹介で入って、箒とはそこで出会ったんだ。初めは睨み付けていたが、一緒に稽古していたら、仲良くなったんだ。」

漣司「そうだったんだ。」

一夏「次に会ったのは鈴と簪だ。中学の時に会ってな弾と数馬、蘭に楯無さんもその時に会ったんだ。セシリアは皆と一緒にイギリスに旅してた時会ったんだ。セシリアは変な力を持つ奴に狙われていて俺達が助けたんだ。」

漣司「もしかするとそいつって・・・。」

一夏「ああ、今から思うと転生者かもしれない。チートの力を持った……って漣司！力入れすぎ！」

漣司は力を入れすぎた為持っていた包丁がまな板にめり込んでいた。

漣司「あつ、悪い。」

一夏「い、いや気にするな。話は戻すけど、シャルはイギリスの次にフランスに旅に行った時デュノア社に無理矢理連れて行かれそうになったから一緒に旅に同行したセシリアと一緒に助けたんだ。ラウラは千冬姉がドイツ軍の教官していて、ラウラはドイツ軍に所属していたから千冬姉が紹介して仲良くなったんだ。」

漣司「凄い出会い方したんだな……。」

一夏「まあ、これらのお陰で皆に会えたんだからかな『ドカーン！……！』『ドゴーン！……！』！？何だ！？」

漣司「ナギとまちが派手にやってるな……。」

一夏「大丈夫か……？」

漣司「あまりに酷かったら止めてくる。」

一夏「俺も手伝うよ……。」

巻き添えを喰らう最悪の事態にならない事を漣司と一夏は祈った。

ナギチーム

ナギ「フハハハハハハハハハッ！！」

ハヤテ「お嬢様！毒化したフグ鯨はマズイですって！」

ヒナギク「ナギー！ルビークラブは殻を取らないと食べられないでしょー！！」

ナギチームはオリジナリティーの海鮮丼を作っている。どれも特別な調理法が必要な特殊調理食材なのだがナギはそれに構わず、適当に食材を切って、極楽米が入っている丼に入れている。

歩「マズインじゃないかな！？」

歩の言う通り、ナギの料理は不味いとかのレベルじゃなく、確実に死人が出る殺人料理が出来てしまう。

咲夜「ウチ！漣司兄ちゃんと一夏兄ちゃん呼んでくるわ！」

ワタル「俺も他の兄ちゃん達も呼んでくる！」

数分後。

ナギ「ぐはっ！？」

ナギの意識は駆け付けた漣司によって墮とされ、後藤達が片付けの手伝いをした。

ヒナギク「皆ごめんなさいね・・・。」

伊達「良いって事よ。」

ナギが意識不明の為、ナギチーム棄権。

ジローチーム。

伊達「それじゃ仕切り直しますか！」

遊星「各肉の仕込みは終わったぞ。」

行人「固さはどれくらいにするの？」

ジロー「黒胡椒を掛けて固めに焼いてくれ。さてと・・・。」

後藤「ジロー、ゆで卵するのか？」

ジロー「ああ、これを時間掛けて茹でる。」

優人「半熟にした方がいいんじゃないか？」

ジロー「いいや敢えてハーフ（半熟）じゃなくハード（完熟）にする。」

トリコ「拘りがあるのか？」

ジロー「漣司がハードボイルドの探偵小説を貸してくれた時憧れてから形だけでもハードになろうと思ってな。」

亀山「なるほどね・・・。」

（ゆで卵以外）順調なジローチームだった。

まちチーム

ドカーン！！！！

すず「うにゃああああっ！！！！」

ドコーン！！！！

りん「ひひひひひひっ！！！！」

一体どんな調理したらキッチンが破壊するのだろうかと思う程、破壊音を出しながら料理するまち。

しのぶ「これじゃ近付けなくて、止めるどころか、協力も出来ないでござるー!」

しのぶの言う通り、包丁やら骨やらキッチンの瓦礫やら、色々な物が飛んで来て近付けなくて皆一生懸命避けている。

あやね「へばっ!ごぶっ!ぶへっ!」

何故かあやねには百発百中で当たっているが・・・。

ゆきの「誰か呼ぶ!?!」

みちる「漣司くん達呼んで・・・。」

りん「それじゃダンナ達がタダじゃ済まねーだろ!」

あやね「あんた達、少しは私を心配しなさいよー!?!」

絶叫が飛び回るまちチームであった。

イブキチーム

イブキ「これでよしと・・・。」

夜空「上手く出来たわね。」

キョーコ「これで大丈夫でしょう。」

乙型「後は待つだけですネ。」

蘭「それにしても一番驚くのは漣司さん達ですよネ。」

アキ「そうよね遊星達がどんな反応するか楽しみだわ。」

凜子「井が大きくなっちゃったけどネ・・・。」

楯無「でも皆喜ぶと思うわ。」

イブキ「うん!」

イブキ達は時間終了まで待つ。

審査員席

神戸「杉下さんはどうなると思いますか?」

杉下「三千院君のチームが棄権したのは残念でしたが、皆さん興味深い料理が出来ると思いますよ。」

山田「三千院さんの流石に……。」

千冬「桐札が止めてなかったら私達の意識が飛ぶことになるからな。永遠に……。」

雪路「ZZZ……。」

雪路はさっきまで酒飲んでいたので眠っていた。

千冬 杉下 神戸 山田「……。」

そんな雪路を見て何とも言えない表情をする千冬達。

そして、

ドン！ドン！ドン！

花菱「終了ー！！！」

瀬川が太鼓を叩き、花菱が終了の言葉を掛ける。

朝風「それでは各自挑戦者達は井を持って来てくれ。」

セシリア達はトレイに載せた五つの井を持ち集まる。

審査員の審査が始まる。

その36 過去話とカオスと調理終了（料理対決中編）（後書き）

ミニコーナー

漣司「なあ、箒。」

箒「どうしたのだ漣司？」

漣司「一夏達が『箒が作ったチャーハン食べたら、ビックリする』って言うから食べてみたいんだが・・・。」

箒「えっ！？あつ、いやっ、そのっ（一夏達め〜！）。」

漣司「箒・・・？チャーハン作りたく無いなら諦めるが・・・。」

箒「何時か必ず作るから、待ってくれるか！？」

漣司「あつ、ああ、いいぜ・・・（余程チャーハン作りたくないんだな）。」

箒「（漣司だけは、相棒だけには、味なしチャーハンを食べさせられない！一夏達・・・！！！！）」

一方その頃

「「「（ゾクッ！！？）」「」」

ハヤテ「一夏君達？どうかしましたか？」

一夏「いやっ……。」

鈴「なっ、何でもないわよ。」

セシリア「そっ、そうですわ。」

シャルロット「あっ、あはははは……。」

ラウラ「……（今、教官以上の覇気と殺気を感じた！？）。」

簪「……（この感じ）。」

「……（まっ、まさか第^{さん}！！？）」「」

遊星「どうしたんだ一夏達は？」

優人「さあ？」

行人「取り敢えず次回もお楽しみに。」

その37 審査と変人刑事とただ1人の犠牲者（料理対決後編）（前書き）

サブタイトルに書いてありますが、死人は出ません。出す予定もありません。

その37 審査と変人刑事とただ1人の犠牲者（料理対決後編）

審査員達の審査が始まった。

セシリアチームの場合

神戸「オルコットさんのチームは親子丼ですか。」

セシリア「はい、どうぞ。」

千冬 杉下 神戸 山田「」「」「頂きます。」「」「」

雪路はまだ寝たままなので、千冬達は先に食べる。

山田「美味しい・・・。」

神戸「ふわふわの卵と少し固めの鶏肉がバランス良くて良いですね。」

杉下「更にクセのあるガーリックが効いていて、興味深いですね・・・。」

千冬「前のオルコットなら想像出来なかったな。」

セシリア「はっ、はい！ありがとうございます！」

セシリア慌てて一礼する。

因みに漣司はセシリアの手料理を食べた時、一つ一つの料理が見た目では想像していたとは違う味をしていたので、流石の漣司も軽度の頭痛と吐き気の症状が出た。

閑話休題。

ジローチームの場合

山田「これ、ご飯が入っているのですか？」

ジロー「当然です。さあどうぞ。」

ジロー達の丼はデビルオロチやガララワニなどの肉を盛りすぎて、山のような形にしており、極楽米が見えなかった。そして何故か一番上には半分に切った2つのゆで卵があった。

千冬 杉下 神戸 山田「」「」「頂きます。」「」「」

4人は圧倒されながらも食べ始めた。

山田「色々な肉の味がありまして美味しいですね。」

杉下「どれも固めで歯応えがありますし。」

神戸「えーとこのゆで卵は・・・、って固い！」

千冬「本当だ。阿久野、このゆで卵は固すぎないか？」

ジロー「固めになるように茹でておきましたから。」

「「「何で!?」「」」

ジローチームと漣司以外は何で固めにしたのか聞いてみた。

ジロー「それがハードボイルドだからです！」

「「「・・・。」「」」

キョーコ「ジローのバカ・・・！」

キョーコは顔を真っ赤にしており、漣司とジローチームも苦笑し、皆は茫然としていた。

まちチームの場合

杉下「これは・・・。」

神戸「インパクトありますね・・・。」

まちもナギ（棄権したが）と同じく海鮮丼なのだが、見た目が酷かった。

杉下「どんな味がするのか大変興味があります。」

「「「（やっぱり杉下先生は変人だ・・・。）」「」」

長年一緒に仕事をしている亀山と神戸以外はそう思った・・・。

千冬 杉下 神戸 山田「「「頂きます。」「」」」

まず始めに千冬と杉下が一口食べる。

杉下「おや？」

千冬「これは・・・。」

この場に戦慄が走る。

杉下「美味しいですね。」

千冬「うまいな。」

神戸「嘘・・・。」

山田「私達も・・・。」

神戸も山田も食べ始める。

神戸「本当だ・・・。」

山田「美味しい・・・。」

あやね「お姉様の料理は何で見た目は悪いのに美味しいのかしら・・・グエツ!？」

あやねは一言余計に言ってしまった為、まちから藁人形の呪いを受ける。

イブキチームの場合。

千冬「ん？やけに井が大きいな。」

千冬の言う通り、イブキチームの井は他のチームの1・5倍大きく、蓋がされていた。

千冬「開けてみるか・・・ほう、なるほどな。」

「「「おー!」「」」

最初に見た千冬は納得し、他の皆は感嘆した。

イブキチームの井はデコレーションしたもので、真ん中がジョーカーメモリを持った漣司で、回りには12人の戦士達が漣司を囲む

ように描かれていた。

漣司の上から時計回りにフレームメモリを持った箒、サイクロンメモリを持ったハヤテ、サンダーメモリを持った後藤、アイスメモリを持った行人、スカイメモリを持った一夏、グランドメモリを持ったトリコ、メタルメモリを持った伊達、ボイスメモリを持ったジロー、ウエーブメモリを持った遊星、ライトメモリを持った優人、ダークネスメモリを持った夜空、アクアを持ったイブキがそれぞれメモリを持って笑顔だった。

杉下「これは微笑ましいですね。」

神戸「食べるのが勿体無いですね。」

山田「でも、美味しそうに見えます。」

千冬「では、そろそろ……。」

千冬 杉下 神戸 山田「」「」「頂きます。」「」「」

千冬達は食べ始める。

千冬「美味しいな。」

杉下「ええ。」

神戸「見た目も味も良いですね。」

山田「バランスが合って良いですね。」

千冬達は高評価を出す。

そして、

朝風「結果発表！」

遂に審査員達の結果発表が始まる。

朝風「それでは審査員達一番美味しかったのはどのチームか判定をどうぞ！」

全員がフリップを出す。

朝風「何と全員イブキチームだ！！！」

全員フリップにはイブキチームと書かれていた。

杉下「印象が残ったのはイブキ君のチームですからね。」

神戸「他の皆さんのも美味しかったのですが・・・。」

山田「最も見た目と味が両立が出来てたのはイブキさんのチーム

でした。」

千冬「私も同意見だ。」

朝風「と言うわけで優勝はイブキチームだ!!!!」

漣司達はイブキチームに盛大の拍手をした。

これで交流を含めた料理対決は終わ・・・、

雪路「ちょっとあんた達!!!!!!私を放っておくなんてどう言う事!!!!!!?」

・・・らなかった。

漣司「何ですかヅラ?折角綺麗に終わろうとしているのですが・・・。」

雪路「桐札君!いい加減ヅラはやめて!私は何も食べてないのに!」

雪路の分は雪路が何時までたつても起きなかったので漣司達が試食してしまったので無かった。

ヒナギク「お姉ちゃんが起きなかったからでしょ・・・。」

雪路「うるさい！うるさい！うるさーい！！！！私も何か食わせろー！！！！」

雪路まだ酔いが覚めてないようで駄々っ子の様に腕を振るう。

伊達「雪路ちゃん。こんな事があるうと作って置いたぜ。」

雪路「ホント！？」

雪路の目が輝いている。

確かに伊達の両手には蓋がされた井を持っていた。

雪路「ありがとう！頂きまーす！」

雪路は蓋を取り食べ始めた。

雪路「ぐはっ！？」

雪路は倒れた。

ヒナギク「お姉ちゃん！？」

ヒナギクは駆け寄る。

後藤「伊達さん……。もしかして……。」

伊達「おう、後藤ちゃん。おでんの具におでんの出汁を掛けたおでん丼だ。」

伊達はおでん丼を皆に見せた。勿論皆は引くが杉下だけが興味を示し食べてみた。

「杉下先生（右京さん）！！？」

皆は杉下の行動に驚く。

杉下「何ともよくわからない味ですね……。それ故クセになります。」

杉下は食べ始めた。

「「「やっぱり杉下先生は変人だ……。」」」

本日2回目の杉下の変人ぶりが解った料理対決は幕を閉じた。

その37 審査と変人刑事とただ1人の犠牲者（料理対決後編）（後書き）

ミニコーナー

料理対決終了した日の夜

篤「漣司……。」

伊達「どうしたの篤ちゃん？」

篤「伊達先生……、実は明日のギルバードって人の聴取が始まるのが近付いているのか、さっき漣司に話し掛けようとしたら、漣司険しい顔つきで考え事していたみたいで心配なんです……。漣司無茶を事をするんじゃないかって……。」

伊達「心配するなって篤ちゃん。千冬ちゃんや杉下さん達もいるし、ハルバードの奴が漣司を怒らせない事を言わない限り大丈夫だって。」

後藤「伊達さんハルバードじゃなくてギルバードです……。」

伊達「おっと、そうだった。」

篤「伊達先生ありがとうございます（漣司……無茶だけはしないでくれ……）。」

その38 尋問と正体と切り札の逆鱗

3月26日 九路洲学園 地下

九路洲学園地下の廊下には横2人ずつに歩いて千冬と山田を先頭に、漣司と後藤、一夏と箒、ハヤテとジロー、遊星とトリコ、行人と優人、夜空とイブキ、杉下と伊達、亀山と神戸の順番で、ギルバードのいる独房室に向かった。

一夏「なあ、漣司・・・！？」

漣司に声をかける一夏だが、一瞬黙ってしまった。
何故なら、漣司の表情は何ら変わらなかったが、漣司の周りは温度が下がっているかの様に冷たく感じたのだった。

後藤「漣司・・・。大丈夫なのか？」

漣司「ん？ああ一夏、後藤。すまねえ・・・。考え事していた・・・。」

どこかぎこちない感じで返事をする漣司。

箒「・・・。」

そんな漣司を見て心配そうな表情をする箒。

山田「皆さん、そろそろ着きますよ。」

山田の言う通り、後10メートルでギルバードが入れられている
独房室に着く。

トリコ「ギルバードの奴、どんな情報を持っているのか・・・。」

杉下「それは聞いてみないとわかりませんねえ。」

千冬「では、入るぞ。」

千冬は独房室のドアを開ける。

独房室の中は広めに造られており、真ん中には机が置いてあった。
その机を挟む様に椅子が置かれてあって、奥側の椅子に手錠を掛け
られ、死んだ魚の目をしていたギルバードが座っていた。

千冬「では杉下先生、亀山先生、神戸先生お願いします。」

杉下「わかりました。」

亀山「うっす。」

神戸「了解しました。」

千冬の言葉に頷いた杉下は入り口側つまり、ギルバードの向かい
側の椅子に座り、亀山は机の右側、神戸は机の左側に立った。

神戸「まず、貴方の名前はギルバード。間違いありませんね?」

神戸は訪ねるがギルバードは答えない。

ギルバード「……………」

亀山「おい！返事くらいしろ！」

亀山が机を叩き、ギルバードを睨む。

神戸「亀山さん。落ち着いてください。」

神戸が亀山を宥める。

亀山「悪い……………」

ギルバード「エエ、ソウデスヨ……………」

ギルバードは弱々しい声で神戸の質問に答える。

神戸「何でこんな事を行ったのかな？」

ギルバード「コノ学園ハアラル国ノ政界ニ影響ヲ与エ、ワタシ
モソノ影響ノ犠牲ニナツタ。ソナ学園ヲメチャクチャニシタカッ
タノデスヨ……………」

亀山「お前の身勝手な考え方や行動が俺達の生徒が重傷を負った
り、そのせいで都幾川達の心が壊れそうになったりしたんだぞ！わ
かってんのか！」

亀山が怒り、ギルバードの胸ぐらを掴もうとしたが、杉下に止め
られる。

亀山「っ！？……………右京さんすみません……………」

杉下「いえ、気にしないで下さい亀山君。ギルバードさん、一つ聞いても宜しいですか？」

杉下は右手の人差し指だけを上げて、訪ねる。

ギルバード「ナンデショウカ・・・。」

杉下「貴方は3日前の3月23日に都幾川君達をライアーメモリの能力を使って彼女達に貴方が拾ったメモリを使わせ、桐札君を襲わせました。貴方は何処でメモリを拾ったのですか？」

ギルバード「ソツ、ソレハ偶然拾ッタダケデ・・・。」

亀山「へえ、偶然拾っただけで良く使う気になったな。」

神戸「普通は良くわからない物は不安や気味が悪くて使おうとは思えないよ？」

ギルバード「・・・。」

杉下「それからもう一つ。貴方はどうやって来たのですか？」

ギルバード「ハ？」

ギルバードは杉下の質問の意味がわからなかったのか、呆気な声を出す。

杉下「この学園は海の真ん中にある島で、空には捕獲レベルの高い猛獣が飛び回っていてISでないと飛ぶの大変危険です。この島

にたどり着くのは週に一回来る船だけです。しかし23日に来た船の渡航歴には都幾川君達の名前はあっても貴方のだけは無かったのですよ。」

亀山「海岸地区は複雑な海流で海から近付く事が出来なくて不可能だし、唯一の船が近付ける事が出来たのは港区だけだ。」

神戸「その港区も各国から選ばれた軍の人達が厳重な警備をしているから怪しい船が来てもすぐ捕まる。」

杉下「さらに貴方は約一ヶ月前の2月20日、三千院家の襲撃未遂事件を起こして、刑務所に収容されています。収容された刑務所に確認をとったところ、貴方はまだ刑務所にいる事がわかったんですよ。」

杉下達の言葉にギルバードは焦りの表情を浮かべる。

亀山「何で今刑務所にいるお前が、こっそりとこの島に来る事が出来たのか。」

神戸「それは僕達と同じく、貴方はおそらく、別世界のギルバードさんで僕達をこの世界に招いた神とは違う神が貴方にガイアメモリの存在を教えて、メモリを渡し、この学園に来るようにした。」

ギルバード「・・・!?!」

杉下「どうやら凶星のようですねえ。」

杉下の言葉にギルバードはわなわなと震えているが、急に立ち上がる。

ギルバード「クッソー！アノクソ神ガ！！ワタシ八元ノ世界デ死ニ、アノ神ノ元ニ来タ時ニ」転生したらこの3本のメモリを使って好き放題暴れる事が出来る」ト言ツタノニ！！！」

ギルバードの口からはイニシャルのKが刻まれたガイアメモリが出てきた。

『ナイト！』

騎士の記憶を宿したナイトメモリがギルバードの顎に挿入され、手錠が壊された。

神戸「杉下さん！？」

亀山「くそっ！」

亀山が机を蹴り飛ばし、机を盾にする事で杉下と神戸もメモリを挿入した衝撃波から身を守った。

神戸「杉下さん大丈夫ですか？」

杉下「ええ、僕は、2人は？」

亀山「俺は大丈夫です。」

神戸「僕もです。でもメモリを3本貰ったって言うてましたが・・・」

杉下「おそらく、今のナイトと桐札君達がメモリブレイクしたら

イアーとバツファローでしょう。」

ナイト『ソウデス！！アノ6本ノメモリハコノ学園ニ来タ時、偶然、近クニアツテ、偶々近クニイタ彼女達ニライアーノ能力ヲ使イ彼女達ニ使ワセマシタ！！彼女達ハ運ガナカッタ諦メテ貰ウシカアリマセーン！！』

ナイトは高らかに笑う。

トリコ「あいつ！！！」

一夏「図に乗りやがって！！！」

ハヤテ「流石に僕も怒りました！！！」

伊達「皆！行きますか・・・！！？」

ゾクッ！！！！

皆がナイトを倒しに行こうとしたが、急に寒気と殺気を感じて動けなくなる。

遊星「なっ、何だ！！？」

ジロー「急に足の震えが止まらないぞ！！？」

イブキ「私達に向けられて無いのはわかるけど、それでも怖い・・・。」

夜空「イブキしっかりして！！！」

イブキはあまりの寒気と殺気に倒れそうになるが後藤が支える。

後藤「漣司！大丈夫・・・か！！？」

後藤は漣司を見るが黙ってしまい、一夏達も恐怖を感じた。

何故なら、その寒気と殺気を出していたのは他でもない、漣司だったのだ。

第「れっ、漣司？」

漣司の表情は落ち着いていたが、目は完全にナイトドローパントを睨んでおり、両腕は力を入れ過ぎていて血が出ていた。

杉下達も漣司の寒気と殺気を感じていた。唯一感じて無かったのは・・・。

ナイト『ボートシテイル暇ハ無イデース！クライナサーイ！！』

ナイトは背中に背負った3メートルの大剣を杉下に向けて投げた。

神戸「杉下さん！？」

ガンッ！！！！

だが、杉下に届く事は無かった。

杉下「！！？」

大剣は粉々に碎かれ、大剣があつた場所には空中に回転して床に刺さつた。

ドスッ！！！！

床に刺さつたのはＩＳキャリバーだった。

千冬「まさか・・・桐札！？」

漣司は右手を前に出して何かを投げた様子だった。

漣司がＩＳキャリバーを右手で投げ、ナイトの大剣に当て粉々に碎いたのだ。

箒「漣司・・・？」

箒は漣司に声をかけるが返事がない。

漣司「・・・だな。」

箒「えっ？」

漣司「俺を本気で怒らせるのは何時もあいつみたいな奴だな・・・。
おい、そのエセ外国人。」

ナイト『エセ外国人？誰ノ事デスカ？』

ナイトドーパントが惚けた声で言う。

漣司「お前だよ。」

いつの間にかナイトドーパントの前に立つ漣司。

ナイト『ゾクッ！？』

ナイトドーパントは初めて漣司から発する寒気と殺気が自分に向けられているのにわかると剣で攻撃しようとした。

『ジョーカー！』

漣司「変身……。」

『ジョーカー！』

漣司は仮面ライダージョーカーに変身してナイトドーパントの剣の側面を殴り付けた。

剣は粉々に砕かれたがジョーカーの拳は止まらず、ナイトドーパントの鎧も砕き、ナイトドーパントをぶっ飛ばした。

ナイト『グハッ！？』

ナイトドーパントは壁に叩き付けられている。

ナイト『ヤバイデス……。サツサト逃ゲナイトヤバイ』その必要は無いぜ。」「……！？」

漣司は指の関節を鳴らしながらナイトドールパントの言葉を遮る。

漣司「もう、逃げる必要は無い。何故なら俺が今ここでお前を駆除してやるよ。」

漣司は立ち上がろうとするナイトドールパントを殴り付る。

ナイト『オッ、才前ハ一体・・・？』

漣司「俺は桐札漣司。仮面ライダー・・・ジョーカーだ！！！」

更に漣司の右拳のストレートがナイトの腹に決まった。

漣司「さあ！お前の罪を数えろ！！！」

ナイトドールパントに向けた漣司の右拳は若干緑色の光に包まれていた。

その38 尋問と正体と切り札の逆鱗（後書き）

ミニコーナー

あり？書いた自分でも恐怖を感じるぞ？

一夏「俺達だってそうだよ。ましてや千冬姉でさえ動けなかったんだぜ……。」

行人「漣司が本気でキレたらどうなるの？」

元の世界では、ある事件が切っ掛けでキレた漣司が近所で有名な極悪の高校の不良全員を1人で全治半年間にさせるほどの設定だったな……。

「「「……。」」」

漣司「ん？どうした皆？」

「「「イツ、イエ！ナンデモゴザイマセン！……。」」」

漣司「？」

第「そつ、それでは次回もお楽しみに。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4896t/>

ある少年のなんとかなった学園物語

2011年11月20日16時40分発行